

國學院大學文学部考古学実習報告 第31集

長野県木曾郡開田村

柳又遺跡 A 地点

YANAGIMATA-A SITE

第7次発掘調査報告書

1997

國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學文学部考古学実習報告 第31集

長野県木曾郡開田村

柳又遺跡 A 地点

YANAGIMATA-A SITE

第7次発掘調査報告書

1997

國學院大學文学部考古学研究室

監修

小林達雄

構成・編集

宮尾 亨

本文執筆

石川季彦、岩越宏典

笠井洋祐、栗田一生

大堀あずさ、後藤希久子

千葉博俊、松島悦子、森 一欽

田村令子、宮下治枝

挿図作成

岩越宏典、笠井洋祐、田村令子、宮下治枝

写真撮影

石川季彦

協力

阿部奈緒美、小久保拓也、小松崎弘展

田村 覚、吉田 仁

谷地亜希子

山本 克

卷頭原色図版 1



卷頭原色図版 2



卷頭原色図版 3



卷頭原色図版 4



序

長野県木曾郡開田村に所在する柳又遺跡A地点の第7次発掘調査報告書をここに上梓する。

國學院大學では、考古学演習II（考古学実習）の一環として夏季休暇中に合宿しての発掘調査を1979年以来実施してきている。この調査においては、履修生だけに制限することなく、あるいは所属する大学や機関を問わず、関心を寄せる研究者、学生に予め案内し、参加を促してきたものであり、まさにこの点に考古学演習II（考古学実習）という講義の枠を越えて、公開性を重要視してきた特色がある。こうして、ともに学ぶ意義と効果はさらに高められたのではないかと思うのである。

具体的には、日本列島における旧石器時代から縄文時代の開始にいたる、ちょうど過渡期の様相に焦点をあてて新潟県壬遺跡を皮切りに、山形県北堂C遺跡に移り、そして、柳又遺跡A地点を含む木曾開田高原にやってきたのであった。やがて9年次にわたる調査の継続となり、我々はいろいろなことを学ぶことができた。そして、ついに1995年度の調査を以って、ひとまず開田高原の遺跡から離れることになった。従って本報告書はその棹尾を飾る記念すべきものとなったのである。まさに感に耐えない。

この間の発掘調査から報告書の作成までには、多くの人々の御指導および御助言を賜った。衷心より御礼申し上げる次第である。とりわけ、長野県教育委員会、開田村教育委員会をはじめとする開田村関係諸機関、村民の方々の御理解と御力添えを得ている。特に遺跡の地主の村上和幸氏には調査の継続を配慮していただき、嶽見旅館・たけみ商店には食事や宿舎から調査地点までの移動等で御世話いただき、多大な御協力を頂戴している。

さらに9年間に亘って学校法人市邨学園開田高原研修センターを宿舎として使用させていただき、快適な合宿をすることができた。末岡熙章理事長の格別なる御高配によるものであり、後輩に対する深甚なる思いやりと変わらぬ友情に、改めてうれしい気持ちで一杯である。

ところで発掘に参加する学生諸氏は、合宿にかかる費用を負担しているので調査期間は、毎年せいぜい10日間が限界になってしまう。このたびの柳又遺跡A地点の発掘調査では、このわずかな日程の半分を天候に祟られた。調査が進んでいけば、遺物の水洗や図面の整理などすることもあろうが、あいにく本格的に調査に取りかかろうかという段で雨に見舞われてしまった。しかし、雨に阻まれて調査ができず宿舎に入り浸っている間も、激励のため訪れた丸山敏一郎、新谷和孝、下平博行の各氏から、信州の考古学事情を講義をしてもらい有意義に過ごすことができたことは幸いであった。人と人との縁の繋がりを実感する瞬間であり、有難く感謝申し上げます。次第であります。

天候に祟られて調査ができない日々が続こうとも、日程を変更することはできないため、遺跡に立つことのできた後半は、日の出から日の入りまで発掘三昧となりながら、調査は完遂された。学生諸氏の奮闘を称えたいところである。さらに、東京に持ち帰った資料を大学構内の考古学実習室で文字通り連日連夜にわたって整理し、発掘調査という個人的な体験は、報告書という公的な記録へと纏め上げられていったのである。

本書は発掘調査に参加した学生諸氏の努力がカタチとなったものでもある。内容には多くの不備もあろうが、それらはそのまま学生諸氏の考古学した軌跡である。諸賢の研究に資するものであれば幸甚である。

平成9年3月25日

小林 達雄

例 言

1. 本書は國學院大學文学部が実施した長野県木曾郡開田村柳又遺跡A地点における第7次発掘調査の報告書である。
2. 柳又遺跡A地点の地籍は、長野県木曾郡開田村大字西野6503-1番地である。
3. 本発掘調査は考古学演習II（考古学実習）の一環として実施したもので、國學院大學学長上田賢治が主体者となり、文学部教授小林達雄が担当した。発掘調査及び報告書の作成は、文学部教授永峯光一、加藤晋平、小林達雄、吉田恵二、文学部助手宮尾亨が指導にあたり、考古学演習II履修生（考古学実習生）31名が従事した。
4. 第7次発掘調査は、1995年9月12日から9月21日までの10日間にわたり実施した。
5. 発掘調査の計画・実施には、長野県教育委員会、開田村教育委員会および木曾郡町村会埋蔵文化財調査室より指導・協力を得た。
6. 調査団の宿舎には、学校法人市邨学園より同学園開田高原研修センターの提供を受けた。
7. 本書の遺跡付近の地図は、国土地理院発行の5万分の1木曾福島の一部を転載した。
8. 遺跡の土壌に関する自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得た。その成果は本書の付編に「柳又遺跡A地点周辺の基本土層と土層の形成について」として掲載した。
9. 石器ならびに礫の石質鑑定は、五十嵐俊雄・成田英吉の両氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）に協力を得た。
10. 発掘調査および整理作業には、多数の方々の参加・協力を得た。また、発掘調査および整理作業の過程で見学者各位より数々のご教示を賜った。御芳名を巻末に記して謝意を表する次第である。
11. 石器の観察、計測、ならびに実測図の作成は、以下の諸氏が分担した。
阿部奈緒美、石川季彦、岩越宏典、大堀あずさ、笠井洋祐、栗田一生、小泉 一
小久保拓也、後藤希久子、佐々木裕輝、田村令子、千葉博俊、中村祥子、平野珠美
松島悦子、宮下治枝、吉田 仁
12. 遺構や遺物の出土状況の図面の作成、および分析作業は、以下の諸氏が分担した。
阿部奈緒美、岩越宏典、笠井洋祐、栗田一生、小久保拓也、小松崎弘展、佐々木裕輝
田村 覚、田村令子、千葉博俊、宮下治枝、森 一欽、吉田 仁
13. 本書に掲載した挿図は、以下の諸氏が作成したものである。
阿部奈緒美、岩越宏典、笠井洋祐、小久保拓也、田村 覚、田村令子、宮下治枝
谷地亜希子、山本 克、吉田 仁
14. 本書に掲載した表は、以下の諸氏が作成したものである。
阿部奈緒美、小久保拓也、小松崎弘展、田村 覚、宮下治枝、谷地亜希子、森 一欽

15. 本書に掲載した写真は、石川季彦が撮影したものである。
16. 本書の本文は、以下の諸氏が執筆し、それぞれの分担文章の末尾に（氏名）を明記した。
阿部奈緒美、石川季彦、岩越宏典、大堀あずさ、笠井洋祐、栗田一生、小久保拓也
後藤希久子、田村令子、千葉博俊、松島悦子、宮下治枝、森 一欽
17. 本書の構成・編集は宮尾亨が行い、小林達雄が監修した。
18. 本発掘調査によって出土した遺物および記録類は、國學院大學において保管している。
19. 第1次～第7次発掘調査までの調査研究成果については下記の報告書・論文が既に刊行されている。併せて参照されたい。

小林達雄編 1990『柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書』考古学実習報告 第19集
國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩 1991「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』第92巻第2号
21～51頁 國學院大學

小林達雄・谷口康浩編 1992『柳又遺跡A地点 第2次発掘調査報告書』考古学実習報告
第21集 國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩 1992「開田高原柳又遺跡A地点の発掘調査」『第5回 長野県旧石器文化研究交
流会－発表要旨－』 47～57頁

永峯光一・谷口康浩編 1993『柳又遺跡A地点 第3次発掘調査報告書』考古学実習報告
第23集 國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩・宮尾亨編 1995『柳又遺跡A地点 第4次発掘調査報告書』考古学実習報告
第26集 國學院大學文学部考古学研究室

小林達雄・宮尾亨編 1996『柳又遺跡A地点 第5次発掘調査報告書』考古学実習報告
第28集 國學院大學文学部考古学研究室

永峯光一・宮尾亨編 1996『柳又遺跡A地点 第6次発掘調査報告書』考古学実習報告
第28集 國學院大學文学部考古学研究室

宮尾亨 1996「柳又遺跡A地点－第7次発掘調査－」『第9回 長野県旧石器文化研究交
流会－発表要旨－』 73～81頁

凡 例

1. 石器の実測図は原則として第三角投影図法に拠った。
2. 石器の各部位の名称と計測基準、石器・礫の分類基準は、次々頁ならびに次々頁に図示した通りである。
3. 器種認定した石器は実測図を掲載し、文化層別に通し番号を付してある。本文中および表にある挿図番号は、この通し番号である。
4. 石器実測図には、通し番号に続けて石質と出土グリッド、グリッド毎の収納番号を記した。石質の略記は次の通りである。

an：安山岩 ch：チャート gla：玻璃質安山岩 hor：ホルンフェルス ob：黒曜石
rhy：濃飛流紋岩 san：砂岩 sh：珪質頁岩 sla：粘板岩 tuf：凝灰岩 gtuf：緑色凝灰岩
tufsh：凝灰岩質頁岩 ba：黒色緻密安山岩 qua：石英 sil：珪岩 cha：玉髓
rhytuf：流紋岩質凝灰岩
5. 石器実測図には、既報告の石器実測図を再掲載したのものがあり、発掘調査回数と各文化層別の通し番号を記した。なお、既報告の石器実測図について、分析の進捗によって帰属する文化層を変更した場合に限り、既報告中の文化層をローマ数字で略記した。
6. 母岩別資料の分類は、遺跡の部分的な調査の過程で行うには限界があり、当面は掲載した母岩別資料について文化層毎に通し番号で記す。なお、既報告の母岩別資料について、分析の進捗によって帰属する文化層を変更した場合があります、従来の文化層で母岩別資料に付した通し番号を欠番とし、新たに変更した文化層における通し番号を付してある。
7. 母岩別資料として掲載した石器実測図には、各母岩別資料別に通し番号を付してある。本文中および表にある挿図番号は、この通し番号である。
8. 母岩別資料として掲載した石器実測図には、通し番号に続けて石質と出土グリッド、グリッド毎の収納番号を記した。石質の略記は凡例4に記したとおりである。
9. 本報告書に掲載した石器実測図の縮尺は、剥片石器3/4、礫石器1/4に統一してある。また、母岩別資料として掲載した石器実測図の縮尺は2/3に統一してある。
10. 分布図の掲載縮尺には1/40、1/80がある。挿図それぞれの縮尺については挿図目次ならびに各図を参照されたい。
11. 層序および分布図における基準標高は、1122.500m、1123.000m、1123.500m、1124.000mを用いている。
12. 分布図におけるシンボルマークの凡例は、文化層の違いに関わらず、本書を通じて統一して次々頁に図示したとおりである。なお、利便性を考慮して分布図中に示している場合もあるが、相違するわけではない。

13. 本遺跡の第1次～第7次発掘調査資料における出土石器（剥片・碎片を含む、礫群を構成する礫は除外）は、石器計測一覧として巻末401～490頁にまとめて、グリッド毎の収納番号順に掲載してある。なお、デジタルデータ化しており、國學院大學において利用することが可能である。この石器計測一覧では、器種と石質の略記は以下のとおりである。

【器種】 KN:ナイフ形石器 AP:槍先形尖頭器 PO:尖頭器 GE:彫器搔器 GR:彫器 GS:彫器削器 GRS:彫器削片 ES:搔器 SE:拇指状搔器 SS:削器 SSI:縦形削器 NS:挟入石器 MNS:鋸歯状石器 SAW:錐器 PA:楔形石器 PF:両端折り取り石器 RF:細部調整剥片 UF:微細剝離痕を有する剥片 BLa:石刃 BLb:石刃状剥片 FL:剥片 CL:碎片 FS:稜付削片 CPF:打面再生剥片 CO:石核 SM:石核素材 AX:石斧 PT:礫器 HS:敲石 TR:台石 MB:細石刃 MCFa:細石刃石核調整剥片 MCFb:細石刃剝離作業面再生剥片 MCF:細石刃打面再生剥片 MCS:細石刃石核打面形成削片 MC:細石刃石核 MCP:細石刃石核原形 BT:両面調整石器 TPO:有舌尖頭器 SA:石鏃 TSS:石匙

【石質】 an:安山岩 ch:チャート gla:玻璃質安山岩 hor:ホルンフェルス ob:黒曜石 rhy:濃飛流紋岩 san:砂岩 sh:珪質頁岩 sla:粘板岩 tuf:凝灰岩 gtuf:緑色凝灰岩 tufsh:凝灰岩質頁岩 ba:黒色緻密安山岩 qua:石英 sil:珪岩 cha:玉髓 rhytuf:流紋岩質凝灰岩

14. 石器・剥片の遺存状態について断面（折れ面）が認められる場合には、以下の定義に従い記述上「折断」「折損」「破損」を区別した。また、耕作等による現代・後世の破損については、実測図において破損部の剝離面・断面を白抜きとした。

折断：細石刃や石刃に見られる断面のように、石器の加工あるいは石器素材の分割を目的とした意図的な折断と認められる場合か、その可能性の考えられる場合をさす。

折損：槍先形尖頭器・ナイフ形石器・縦長削器に見られる断面のように、各器種に本来備わる定形的な機能形態が折れによって損なわれている場合をさす。

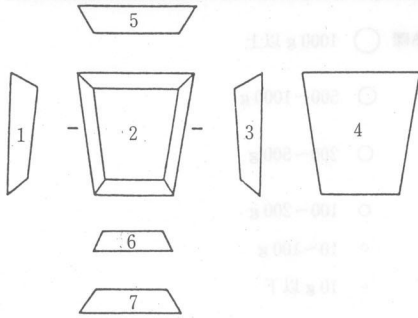
破損：断面に限らず、石器・剥片の原形が損なわれている場合を破損と総称する。

15. 石質の比較的粗悪なチャートの礫が被熱等によって節理面に沿って角状に細かく砕けたものの総称について、第4次発掘調査報告書ではそれまでの「碎片」という分類名を改め、「礫」に含めている。また、第5次発掘調査報告書はこれに準じているが、本書も第4次・第5次発掘調査報告書に準じている。

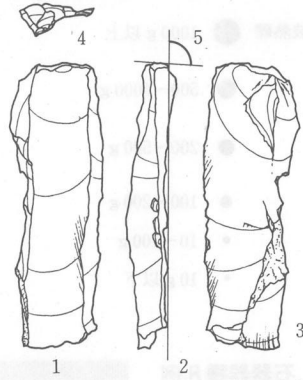
16. 本遺跡の各文化層名称は、石器群ならびに礫群の出土層位に基づいた呼称である。本書では、第4次調査において提示され、第5次発掘調査報告書、第6次発掘調査報告書でも継承されている以下の文化層名称を用いている。

第V層文化層：第V層に集中する石器群ならびに礫群や配石。細石刃の文化層。配石2基、礫群7基がある。

石器各器種の各部名称・計測部位

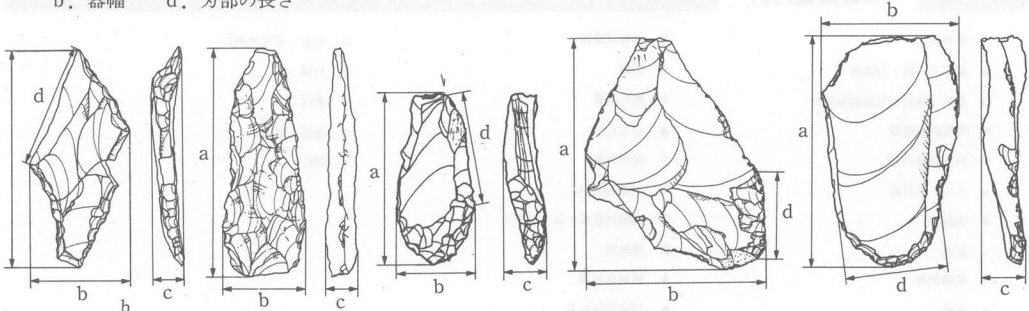


1. 左側面
2. 正面
3. 右側面
4. 裏面
5. 上面
6. 下面
7. 断面



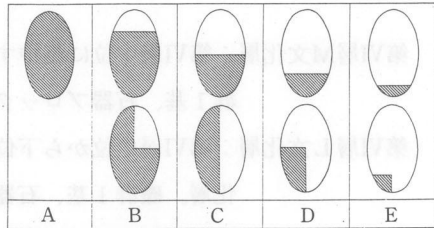
1. 背面
2. 右側面
3. 腹面
4. 打面角
5. 剝離角

- a. 器長 c. 器厚 (最大厚)
b. 器幅 d. 刃部の長さ



- e. 作業面の長さ h. 幅
f. 作業面の幅 i. 厚さ
g. 高さ j. 打面角

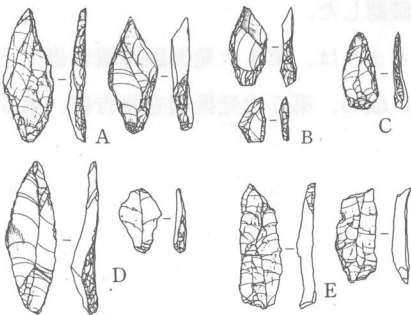
礫群構成礫の遺存状態



- A: 完形
B: 全体の3/4以上を残す破砕礫
C: 全体の約1/2を残す破砕礫
D: 全体の1/4を残す破砕礫
E: 小部分の破片

(永峯・谷口編 1993)

ナイフ形石器の形態分類



- A: 鋭い先端をもち、二側縁に調整を加えたナイフ形石器。石刃を素材とし、折断技法によって素材の形状を大きく変形している。素材の打面は除去される。
B: 剥片を素材とし、二側縁調整によって切出形に整形されたナイフ形石器。小形のものが多い。
C: 石刃を素材とし、一側縁に調整を加えたナイフ形石器。素材の形状をほとんど変形せず、打面も残置する。
D: 石刃・縦長剥片を素材とし、その打点側を基部として、基部両側縁の腹面側に調整を加えた基部調整ナイフ形石器。素材の形状を大きく変形せず、打面を残置することがある。
E: 石刃を素材とし、先端を斜めに折断するように急斜度の調整を加えた部分調整ナイフ形石器。

(小林・谷口編 1992)

礫の重量・被熱凡例

被熱礫 ● 1000 g 以上

● 500~1000 g

● 200~500 g

● 100~200 g

● 10~100 g

● 10 g 以下

非被熱礫 ○ 1000 g 以上

○ 500~1000 g

○ 200~500 g

○ 100~200 g

○ 10~100 g

○ 10 g 以下

石器器種凡例

◆ 細石刃

★ 細石刃石核・同素材

◇ 削片・細石刃石核調整剥片

★ 槍先形尖頭器

* 両面調整石器

☆ ナイフ形石器

★ 尖頭器

▽ 彫器

◆ 彫器削器

▲ 掻器

● 拇指状掻器

▽ 削器

◇ 縦形削器

■ 挟入石器

◇ 楔形石器

△ 細部調整剥片

□ 微細刺離痕を有する剥片

□ 抹錐器

▲ 鋸歯状石器

○ 細部調整石刃

○ 石刃・石刃状剥片

● 石核

○ 素材

□ 礫器・敲石

・ 剥片

第VI層M文化層：第VI層中位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群1基、石器ブロック1ヶ所がある。

第VI層L文化層：第VI層中位から下位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群1基、石器ブロック1ヶ所がある。第7次発掘調査によって新たに礫群5基と石器ブロック2ヶ所とが確認された。

第VII層文化層：第VII層上位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群2基、石器ブロックヶ所がある。第7次発掘調査ではこれらの中で礫群1基と石器ブロック1か所について未確認部分を発掘するとともに、新たに礫群1基と石器ブロック1ヶ所とを確認した。

17. 各文化層における石器群の平面的分布の視覚的なまとまりは、第4次発掘調査報告書でそれまでの「石器ユニット」の用語を「石器ブロック」に改め、第5次発掘調査報告書、第6次発掘調査報告書、そして本書もそれに準じている。

18. 引用参考文献は、491~496頁に掲載した。

19. 発掘調査参加者・関係者一覧は、497頁に記載した。

20. 報告書抄録は、498頁に付した。

目次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第I章 発掘調査の目的と経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
(1) 発掘調査の目的	1
(2) これまでの発掘調査の概要	3
第2節 第7次調査の経過	8
(1) 第7次調査の方針と経過	8
(2) 整理作業の経過	9
第II章 開田高原と柳又遺跡	11
第1節 柳又遺跡の位置	11
(1) 開田高原の地理と環境	11
(2) 柳又遺跡の位置	13
第2節 第7次発掘調査の区域	14
(1) 発掘調査区域の設定	14
(2) 基本層序	15
(3) 調査区層序と遺跡の微地形	16
第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布	20
(1) 礫群の位置と検出層位	22
(2) 石器ブロックの位置と検出層位	24
(3) 表面採集資料	30
第III章 第V層文化層	33
第1節 概要	33
第2節 石器	34
(1) 石器器種組成と石器石材	34
(2) 石器	35
第3節 石器群の分布状態	50
第4節 母岩別資料と剥片剥離技術	52
(1) 母岩別資料2	52
(2) 母岩別資料5	55
(3) 母岩別資料8	58
(4) 母岩別資料9	64
(5) 母岩別資料10	66
(6) 母岩別資料11	70
(7) 母岩別資料13	74
(8) 母岩別資料15	75
(9) 母岩別資料16	82
(10) 母岩別資料17	85
(11) 母岩別資料18	87
(12) 母岩別資料19	89
(13) 母岩別資料20	92
(14) 母岩別資料21	95
第IV章 第VI層L文化層	97
第1節 概要	97
第2節 礫群の位置と内容	98
(1) 各礫群の位置	98
(2) 第2号礫群	102
(3) 第3号礫群	106
(4) 第4号礫群	107
(5) 第5号礫群	111
(6) 第6号礫群	114

第3節	石器	119
(1)	石器器種組成と石器石材	119
(2)	石器	121
第4節	石器群の分布状態と内容	141
(1)	分布状態	141
(2)	石器ブロック2	142
(3)	石器ブロック3	146
第5節	母岩別資料と剥片剥離技術	150
(1)	母岩別資料1	156
(2)	母岩別資料2	156
(3)	母岩別資料4	160
(4)	母岩別資料7	167
(5)	母岩別資料9	168
(6)	母岩別資料10	179
(7)	母岩別資料11	186
(8)	母岩別資料12	192
(9)	母岩別資料13	196
(10)	母岩別資料14	201
(11)	母岩別資料15	203
(12)	母岩別資料16	206
(13)	母岩別資料17	210
(14)	母岩別資料18	211
(15)	母岩別資料19	213
(16)	母岩別資料20	214
第V層	第VII層文化層	217
第1節	概要	217
第2節	礫群の位置と内容	218
(1)	各礫群の位置	218
(2)	第1号礫群	223
(3)	第3号礫群	224
第3節	石器	227
(1)	石器器種組成と石器石材	227
(2)	石器	228
第4節	石器群の分布状態と内容	234
(1)	分布状態	234
(2)	石器ブロック1	235
(3)	石器ブロック4	238
第5節	母岩別資料と剥片剥離技術	241
(1)	母岩別資料3	244
(2)	母岩別資料6	245
(3)	母岩別資料7	249
第VI章	第7次発掘調査の成果	253
第1節	柳又遺跡A地点における編年	253
第2節	柳又遺跡A地点の各文化層	254
(1)	縄文時代草創期～早期初頭	254
(2)	第IV層文化層	256
(3)	第V層文化層	259
(4)	第VI層M文化層	264
(5)	第VI層L文化層	317
(6)	第VII層文化層	351
第3節	おわりにかえて	372
付編	自然科学分析「柳又遺跡A地点周辺の基本土層と土層の形成について」パリノ・サーヴェイ株式会社	375
	石器計測一覧	401
	引用参考文献	491
	発掘調査参加者一覧・関係者一覧	497
	報告書抄録	498
	図版	

挿図目次

第 1 図	柳又遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/5000)	10
第 2 図	遺跡周辺と発掘調査区域 (1/1600)	13
第 3 図	遺跡の基本層序 (1/20)	15
第 4 図	各次の調査区と調査深度	17
第 5 図	発掘調査区域の層序 (1/40)	19
第 6 図	第 7 次調査における礫の出土状況 (1/80)	21
第 7 図	第 7 次調査における石器の出土状況 (1/80)	23
第 8 図	第 1～3・7 次調査における礫の出土状況 (1/80)	26
第 9 図	第 1～3・7 次調査における礫の出土状況 (1/80)	27
第 10 図	第 1～3・7 次調査における石器の出土状況 (1/80)	28
第 11 図	第 1～3・7 次調査における石器の出土状況 (1/80)	29
第 12 図	第 7 次発掘調査資料 表採の石器 彫器、石刃、細部調整剥片 (3/4)	30
第 13 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(1) 細石刃、槍先形尖頭器、搔器、削器 (3/4)	40
第 14 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(2) 彫器・細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	41
第 15 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(3) 彫器、細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	42
第 16 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(4) 抉入石器、細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	43
第 17 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(5) 石刃、石刃状剥片、石核 (3/4)	44
第 18 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(6) 石核 (3/4)	45
第 19 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(7) 石核 (3/4)	46
第 20 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器(8) 石核 (3/4)	47
第 21 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器 分布 (A、Y、Z 列) (1/40)	48
第 22 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器 分布 (W、X、Y 列) (1/40)	49
第 23 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器 分布 (A、Y、Z 列) (1/40)	50
第 24 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器 分布 (W、X、Y 列) (1/40)	50
第 25 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層の石器 分布 (B・C 列) (1/40)	51
第 26 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 2(1) (2/3)	53
第 27 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 2(2) (2/3)	54
第 28 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 2：分布 (1/80)	55
第 29 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 5 (2/3)	56
第 30 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 5：分布 (1/80)	57
第 31 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 8(1) (2/3)	59
第 32 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 8(2) (2/3)	60
第 33 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 8(3) (2/3)	61
第 34 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 8(4) (2/3)	62
第 35 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 8：分布 (1/80)	63
第 36 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 9(1) (2/3)	65
第 37 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 9(2) (2/3)	66
第 38 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料 9：分布 (1/80)	67
第 39 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料10(1) (2/3)	68
第 40 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料10(2) (2/3)	69
第 41 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料10(3) (2/3)	70
第 42 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料10：分布 (1/80)	71
第 43 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料11(1) (2/3)	72
第 44 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料11(2) (2/3)	73
第 45 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料11：分布 (1/80)	74
第 46 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料15(1) (2/3)	76
第 47 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料15(2) (2/3)	77
第 48 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料15(3) (2/3)	78
第 49 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料15：分布 (1/80)	79
第 50 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料16(1) (2/3)	80
第 51 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料16(2) (2/3)	81
第 52 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料16：分布 (1/80)	82
第 53 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料17(1) (2/3)	84
第 54 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料17(2) (2/3)	85
第 55 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料17：分布 (1/80)	86
第 56 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料18(1) (2/3)	88
第 57 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料18(2) (2/3)	89
第 58 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料18：分布 (1/80)	90
第 59 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料19 (2/3)	91
第 60 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料19：分布 (1/80)	92
第 61 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料20 (2/3)	93
第 62 図	第 7 次発掘調査資料 第 V 層文化層 母岩別資料20：分布 (1/80)	94

第63図	第7次発掘調査資料	第V層文化層 母岩別資料21 (2/3)	95
第64図	第7次発掘調査資料	第VI層文化層 母岩別資料21:分布 (1/80)	96
第65図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第2号礫群 (1/40)	98
第66図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第2号礫群 構成礫の重量・被熱状態 (1/40)	99
第67図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第2号礫群 接合状態 (1/40)	100
第68図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第3号礫群 (1/40)	102
第69図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第3号礫群 構成礫の重量・被熱状態 (1/40)	103
第70図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第3号礫群 接合状態 (1/40)	104
第71図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第4号礫群 (1/40)	106
第72図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第4号礫群 構成礫の重量・被熱状態 (1/40)	107
第73図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第4号礫群 接合状態 (1/40)	108
第74図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第5号礫群 (1/40)	110
第75図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第5号礫群 構成礫の重量・被熱状態 (1/40)	111
第76図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第5号礫群 接合状態 (1/40)	112
第77図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第6号礫群 (1/40)	115
第78図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第6号礫群 構成礫の重量・被熱状態 (1/40)	116
第79図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層第6号礫群 接合状態 (1/40)	117
第80図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(1) ナイフ形石器、搔器、拇指状搔器 (3/4)	129
第81図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(2) 細部調整剥片・挟入石器 (3/4)	130
第82図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(3) 挟入石器、細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	131
第83図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(4) 挟入石器、細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	132
第84図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(5) 挟入石器、細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	133
第85図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(6) 楔形石器 (3/4)	134
第86図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(7) 石刃・石刃状剥片 (3/4)	135
第87図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(8) 石刃、石刃状剥片、細部調整剥片 (3/4)	136
第88図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(9) 石刃・石刃状剥片 (3/4)	137
第89図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(10) 石核 (3/4)	138
第90図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(11) 石核 (3/4)	139
第91図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層の石器(12) 石核 (3/4)	140
第92図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層石器ブロック2 分布 (1/40)	144
第93図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層石器ブロック外 分布 (A、Z、Y、X列) (1/40)	145
第94図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層石器ブロック3 分布 (1/40)	148
第95図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層石器ブロック外 分布 (B・C列) (1/40)	149
第96図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層石器ブロック外 分布 (B・C列) (1/40)	150
第97図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料1 (1) (2/3)	152
第98図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料1 (2) (2/3)	153
第99図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料1 (3) (2/3)	154
第100図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料1:分布 (1/80)	155
第101図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料2 (1) (2/3)	157
第102図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料2 (2) (2/3)	158
第103図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料2:分布 (1/80)	159
第104図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料4 (1) (2/3)	162
第105図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料4 (2) (2/3)	163
第106図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料4 (3) (2/3)	164
第107図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料4:分布 (1/80)	165
第108図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料7:分布 (1/80)	166
第109図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料7:分布 (1/80)	167
第110図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (1) (2/3)	171
第111図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (2) (2/3)	172
第112図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (3) (2/3)	173
第113図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (4) (2/3)	174
第114図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (5) (2/3)	175
第115図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (6) (2/3)	176
第116図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9 (7) (2/3)	177
第117図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料9:分布 (1/80)	178
第118図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料10(1) (2/3)	181
第119図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料10(2) (2/3)	182
第120図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料10(3) (2/3)	183
第121図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料10(4) (2/3)	184
第122図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料10:分布 (1/80)	185
第123図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料11(1) (2/3)	187
第124図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料11(2) (2/3)	188
第125図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料11(3) (2/3)	189
第126図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料11(4) (2/3)	190
第127図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料11:分布 (1/80)	191

第128図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料12(1) (2/3)	193
第129図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料12(2) (2/3)	194
第130図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料12: 分布 (1/80)	195
第131図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料12: 分布 (1/80)	196
第132図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料13(1) (2/3)	197
第133図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料13(2) (2/3)	198
第134図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料13(3) (2/3)	199
第135図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料13: 分布 (1/80)	200
第136図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料14 (2/3)	202
第137図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料14: 分布 (1/80)	203
第138図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料15 (2/3)	204
第139図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料15: 分布 (1/80)	205
第140図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料16 (2/3)	207
第141図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料16: 分布 (1/80)	208
第142図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料17 (2/3)	209
第143図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料17: 分布 (1/80)	210
第144図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料18: 分布 (1/80)	212
第145図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料19: 分布 (1/80)	213
第146図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料20: 分布(1) (1/80)	215
第147図	第7次発掘調査資料	第VI層L文化層母岩別資料20: 分布(2) (1/80)	216
第148図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層第1号礫群 (1/40)	219
第149図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層第1号礫群 構成礫の重量・被熱状態 (1/40)	220
第150図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層第1号礫群 接合状態 (1/40)	221
第151図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層第1号礫群 (1/40)	223
第152図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層第3号礫群 (1/40)	226
第153図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層の石器(1) ナイフ形石器、搔器、細部調整剥片、石刃 (3/4)	231
第154図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層の石器(2) 微細剥離痕を有する剥片、石刃、石刃状剥片 (3/4)	232
第155図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層の石器(3) 石核 (3/4)	233
第156図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層石器ブロック1 分布 (1/40)	237
第157図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層石器ブロック4 分布 (1/40)	240
第158図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層母岩別資料3 (2/3)	242
第159図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層母岩別資料3: 分布 (1/80)	243
第160図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層母岩別資料6 (2/3)	246
第161図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層母岩別資料6: 分布 (1/80)	247
第162図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層母岩別資料7 (2/3)	250
第163図	第7次発掘調査資料	第VII層文化層母岩別資料7: 分布 (1/80)	251
第164図	縄文時代草創期～早期初頭の遺物 (1/2)	255	
第165図	第IV層文化層の石器群 (1/2)	257	
第166図	第V層文化層における遺構の配置 (1/200)	258	
第167図	礫全体接合配線 (1/200)	259	
第168図	第V層文化層の石器器種別分布状態(1) 細石刃、細石刃石核、同素材、削片、 細石刃石核調整剥片 (1/200)	260	
第169図	第V層文化層の石器器種別分布状態(2) 槍先形尖頭器、両面調整石器、尖頭器、彫器、搔器 削器、縦形削器、挟入石器、楔形石器、細部調整剥片、礫器、敲石 (1/200)	261	
第170図	第V層文化層の石器器種別分布状態(3) 石刃、石刃状剥片、石核、素材、剥片 (1/200)	262	
第171図	第V層文化層の石器母岩別資料接合配線 (1/200)	263	
第172図	第V層文化層の石器(1) 細石刃石核・原形 (3/4)	268	
第173図	第V層文化層の石器(2) 細石刃石核 (3/4)	269	
第174図	第V層文化層の石器(3) 細石刃石核素材、原形、稜付削片 (3/4)	270	
第175図	第V層文化層の石器(4) 打面形成削片 (3/4)	271	
第176図	第V層文化層の石器(5) 打面形成削片 (3/4)	272	
第177図	第V層文化層の石器(6) 打面形成削片、打面再生削片、調整剥片 (3/4)	273	
第178図	第V層文化層の石器(7) 細石刃石核素材 (3/4)	274	
第179図	第V層文化層の石器(8) 細石刃 (3/4)	275	
第180図	第V層文化層の石器(9) 細石刃 (3/4)	276	
第181図	第V層文化層の石器(10) 細石刃 (3/4)	277	
第182図	第V層文化層の石器(11) 細石刃 (3/4)	278	
第183図	第V層文化層の石器(12) 細石刃 (3/4)	279	
第184図	第V層文化層の石器(13) 細石刃 (3/4)	280	
第185図	第V層文化層の石器(14) 細石刃 (3/4)	281	
第186図	第V層文化層の石器(15) 槍先形尖頭器 (3/4)	282	
第187図	第V層文化層の石器(16) 尖頭器・両面調整石器 (3/4)	283	
第188図	第V層文化層の石器(17) 彫器・彫器搔器 (3/4)	284	
第189図	第V層文化層の石器(18) 彫器挟入石器・挟入石器 (3/4)	285	
第190図	第V層文化層の石器(19) 搔器 (3/4)	286	

第191図	第V層文化層の石器(20)	搔器 (3/4)	287
第192図	第V層文化層の石器(21)	削器・縦形削器 (3/4)	288
第193図	第V層文化層の石器(22)	削器 (3/4)	289
第194図	第V層文化層の石器(23)	削器 (3/4)	290
第195図	第V層文化層の石器(24)	削器 (3/4)	291
第196図	第V層文化層の石器(25)	挟入石器、楔形石器、細部調整剥片 (3/4)	292
第197図	第V層文化層の石器(26)	細部調整剥片 (3/4)	293
第198図	第V層文化層の石器(27)	細部調整剥片・細部調整石刃 (3/4)	294
第199図	第V層文化層の石器(28)	細部調整剥片 (3/4)	295
第200図	第V層文化層の石器(29)	細部調整剥片・細部調整石刃 (3/4)	296
第201図	第V層文化層の石器(30)	細部調整剥片 (3/4)	297
第202図	第V層文化層の石器(31)	細部調整剥片 (3/4)	298
第203図	第V層文化層の石器(32)	細部調整剥片 (3/4)	299
第204図	第V層文化層の石器(33)	石刃、細部調整剥片、細部調整石刃 (3/4)	300
第205図	第V層文化層の石器(34)	微細剥離痕を有する剥片、石刃、石刃状剥片、細部調整石刃 (3/4)	301
第206図	第V層文化層の石器(35)	石刃状剥片 (3/4)	302
第207図	第V層文化層の石器(36)	石刃、石刃状剥片、細部調整石刃 (3/4)	303
第208図	第V層文化層の石器(37)	石刃、石刃状剥片、微細剥離痕を有する剥片、細部調整石刃 (3/4)	304
第209図	第V層文化層の石器(38)	石刃、石刃状剥片、挟入石器、細部調整石刃 (3/4)	305
第210図	第V層文化層の石器(39)	石核 (3/4)	306
第211図	第V層文化層の石器(40)	石核 (3/4)	307
第212図	第V層文化層の石器(41)	石核 (3/4)	308
第213図	第V層文化層の石器(42)	石核 (3/4)	309
第214図	第V層文化層の石器(43)	石核 (3/4)	310
第215図	第V層文化層の石器(44)	石核 (3/4)	311
第216図	第V層文化層の石器(45)	石核 (3/4)	312
第217図	第V層文化層の石器(46)	石核 (3/4)	313
第218図	第V層文化層の石器(47)	石核 (3/4)	314
第219図	第V層文化層の石器(48)	石核 (3/4)	315
第220図	第V層文化層の石器(49)	礫器・打製石斧 (3/4)	316
第221図	第VI層L文化層における遺構の位置 (1/200)		317
第222図	礫接合配線 (1/200)		318
第223図	第VI層L文化層の石器ブロックの位置 (1/200)		319
第224図	第VI層L文化層の石器器種別分布状態 (1/200)		320
第225図	第VI層L文化層の石器母岩別資料接合配線 (1/200)		321
第226図	第VI層L文化層の石器(1)	ナイフ形石器 (3/4)	324
第227図	第VI層L文化層の石器(2)	ナイフ形石器 (3/4)	325
第228図	第VI層L文化層の石器(3)	ナイフ形石器 (3/4)	326
第229図	第VI層L文化層の石器(4)	ナイフ形石器 (3/4)	327
第230図	第VI層L文化層の石器(5)	槍先形尖頭器 (3/4)	328
第231図	第VI層L文化層の石器(6)	彫器、拇指状搔器、搔器 (3/4)	329
第232図	第VI層L文化層の石器(7)	削器・細部調整剥片 (3/4)	330
第233図	第VI層L文化層の石器(8)	楔形石器、微細剥離痕を有する剥片、細部調整剥片、石刃 (3/4)	331
第234図	第VI層L文化層の石器(9)	細部調整剥片、挟入石器、揉錐器、鋸歯状石器 (3/4)	332
第235図	第VI層L文化層の石器(10)	細部調整剥片・微細剥離痕を有する剥片 (3/4)	333
第236図	第VI層L文化層の石器(11)	細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片、挟入石器 (3/4)	334
第237図	第VI層L文化層の石器(12)	細部調整剥片・挟入石器 (3/4)	335
第238図	第VI層L文化層の石器(13)	石刃、石刃状剥片、細部調整石刃 (3/4)	336
第239図	第VI層L文化層の石器(14)	石刃・石刃状剥片 (3/4)	337
第240図	第VI層L文化層の石器(15)	石刃・石刃状剥片 (3/4)	338
第241図	第VI層L文化層の石器(16)	石刃・石刃状剥片 (3/4)	339
第242図	第VI層L文化層の石器(17)	石核・石核素材 (3/4)	340
第243図	第VI層L文化層の石器(18)	石核 (3/4)	341
第244図	第VI層L文化層の石器(19)	石核 (3/4)	342
第245図	第VI層L文化層の石器(20)	石核 (3/4)	343
第246図	第VI層L文化層の石器(21)	石核 (3/4)	344
第247図	第VI層L文化層の石器(22)	石核 (3/4)	345
第248図	第VI層L文化層の石器(23)	石核 (3/4)	346
第249図	第VI層L文化層の石器(24)	石核 (3/4)	347
第250図	第VI層L文化層の石器(25)	石核 (3/4)	348
第251図	第VI層L文化層の石器(26)	石核 (3/4)	349
第252図	第VI層L文化層の石器(27)	石核 (3/4)	350
第253図	第VII層文化層における遺構の位置 (1/200)		351
第254図	礫全体接合配線 (1/200)		352
第255図	第VII層文化層における石器ブロックの位置 (1/200)		353

第256図	第VII層文化層の石器器種別分布状態 (1/200)	354
第257図	第VII層文化層の石器母岩別資料接合配線 (1/200)	355
第258図	第VII層文化層の石器(1) ナイフ形石器 (3/4)	360
第259図	第VII層文化層の石器(2) 彫器削器・掻器 (3/4)	361
第260図	第VII層文化層の石器(3) 楔形石器・細部調整剥片 (3/4)	362
第261図	第VII層文化層の石器(4) 細部調整剥片、細部調整石刃、石刃 (3/4)	363
第262図	第VII層文化層の石器(5) 細部調整剥片、細部調整石刃、石刃、削器 (3/4)	364
第263図	第VII層文化層の石器(6) 石刃・石刃状剥片 (3/4)	365
第264図	第VII層文化層の石器(7) 石刃・石刃状剥片 (3/4)	366
第265図	第VII層文化層の石器(8) 石刃、石刃状剥片、微細剝離痕を有する剥片、石核 (3/4)	367
第266図	第VII層文化層の石器(9) 石核 (3/4)	368
第267図	第VII層文化層の石器(10) 石核 (3/4)	369
第268図	第VII層文化層の石器(11) 石核 (3/4)	370
第269図	第VII層文化層の石器(12) 石核 (3/4)	371

表目次

表1	第7次発掘調査資料石器器種別石材別点数	31
表2	第7次発掘調査資料石器器種別石材別重量	32
表3	第VI層L文化層第2号礫群 構成礫諸属性	101
表4	第VI層L文化層第3号礫群 構成礫諸属性	105
表5	第VI層L文化層第4号礫群 構成礫諸属性	109
表6	第VI層L文化層第5号礫群 構成礫諸属性	113
表7	第VI層L文化層第6号礫群 構成礫諸属性	118
表8	第VI層L文化層石器ブロック2 石器器種別石材別点数	143
表9	第VI層L文化層石器ブロック2 石器器種別石材別重量	143
表10	第VI層L文化層石器ブロック2 石器器種別石材別割合	143
表11	第VI層L文化層石器ブロック3 石器器種別石材別点数	147
表12	第VI層L文化層石器ブロック3 石器器種別石材別重量	147
表13	第VI層L文化層石器ブロック3 石器器種別石材別割合	147
表14	第VII層文化層第1号礫群 構成礫諸属性	222
表15	第VII層文化層第3号礫群 構成礫諸属性	225
表16	第VII層文化層石器ブロック1 石器器種別石材別点数	236
表17	第VII層文化層石器ブロック1 石器器種別石材別重量	236
表18	第VII層文化層石器ブロック1 石器器種別石材別割合	236
表19	第VII層文化層石器ブロック4 石器器種別石材別点数	239
表20	第VII層文化層石器ブロック4 石器器種別石材別重量	239
表21	第VII層文化層石器ブロック4 石器器種別石材別割合	239
表22	第V層文化層石器器種別石材別点数	265
表23	第V層文化層石器器種別石材別重量	266
表24	第V層文化層石器器種別石材別割合	267
表25	第VI層L文化層石器器種別石材別点数	323
表26	第VI層L文化層石器器種別石材別重量	323
表27	第VI層L文化層石器器種別石材別割合	323
表28	第VII層文化層石器器種別石材別点数	359
表29	第VII層文化層石器器種別石材別重量	359
表30	第VII層文化層石器器種別石材別割合	359

図版目次

図版1	1. 遺跡の現状
	2. 発掘調査風景
図版2	3. 調査区の層序 (B-6区) (東から)
	4. 調査区の層序 (C-7区) (北から)
図版3	5. 調査区の層序 (C-7区) (東から)
	6. 調査区の層序 (C-8区) (北から)
図版4	7. 調査区の層序 (C-9区) (東から)
	8. 調査区の層序 (全体) (東から)
図版5	9. 第VI層L文化層第2号礫群 (南から)
	10. 第VI層L文化層第2号礫群 (北から)
図版6	11. 第VI層L文化層第2号礫群 (東から)
	12. 第VI層L文化層第3号礫群 (南から)
図版7	13. 第VI層L文化層第3号礫群 (南西から)
	14. 第VI層L文化層第3号礫群 (南西から)
図版8	15. 第VI層L文化層遺物出土状況 (Y・Z-6~8区) (南から)
	16. 第VI層L文化層第4号礫群 (南から)

- 図版 9 17. 第VI層L文化層第4号礫群 (南から)
18. 第VI層L文化層第4号礫群 (北から)
- 図版10 19. 第VI層L文化層遺物出土状況 (W・X-6~9区) (東から)
20. 第VI層L文化層第5・6号礫群 (南から)
- 図版11 21. 第VI層L文化層第5・6号礫群 (南から)
22. 第VI層L文化層第5号礫群 (南から)
- 図版12 23. 第VI層L文化層第6号礫群 (南から)
24. 第VI層L文化層第6号礫群 (東から)
- 図版13 25. 第VI層文化層遺物出土状況 (B・C-7~9区) (南から)
26. 第VI層文化層遺物出土状況 (C-7~9区) (南から)
- 図版14 27. 第VII層文化層第1号礫群 (北から)
28. 第VII層文化層第1号礫群 (北から)
- 図版15 29. 第VII層文化層第1号礫群 (東から)
30. 礫群出土状況全景 (西から)
- 図版16 31. 遺物出土状況全景 (東から)
32. 完掘状況 (東から)
- 図版17 33. 遺物出土状況 (Y-6区) (北西から)
34. 遺物出土状況 (W-8区) (南から)
- 図版18 35. 遺物出土状況 (W-7区) (北から)
36. 遺物出土状況 (B-8区) (北西から)
- 図版19 37. 遺物出土状況 (C-9区) (南東から)
38. 遺物出土状況 (W-8区) (南から)
- 図版20 39. 遺物出土状況 (W-7区) (西から)
40. 遺物出土状況 (A-7区) (南から)
- 図版21 41. 発掘調査風景
図版22 42. 発掘調査風景
図版23 43. 発掘調査風景
図版24 44. 発掘調査風景
図版25 45. 表採の石器
46. 第V層文化層の石器
47. 第V層文化層の石器
- 図版26 48. 第V層文化層の石器
49. 第V層文化層の石器 (彫器、彫器挟入石器、挟入石器アップ)
- 図版27 50. 第V層文化層母岩別資料2・5
51. 第V層文化層母岩別資料8
- 図版28 52. 第V層文化層母岩別資料8
53. 第V層文化層母岩別資料9
- 図版29 54. 第V層文化層母岩別資料10
55. 第V層文化層母岩別資料11
- 図版30 56. 第V層文化層母岩別資料15
57. 第V層文化層母岩別資料16
- 図版31 58. 第V層文化層母岩別資料17
59. 第V層文化層母岩別資料18
- 図版32 60. 第V層文化層母岩別資料19
61. 第V層文化層母岩別資料20・21
- 図版33 62. 第VI層L文化層の石器 (石器ブロック2)
63. 第VI層L文化層の石器 (石器ブロック3)
- 図版34 64. 第VI層L文化層の石器 (石器ブロック外)
65. 第VI層L文化層母岩別資料1
- 図版35 66. 第VI層L文化層母岩別資料2
67. 第VI層L文化層母岩別資料4
- 図版36 68. 第VI層L文化層母岩別資料9
69. 第VI層L文化層母岩別資料10 (上: 個別分割、下: 全体)
- 図版37 70. 第VI層L文化層母岩別資料11
71. 第VI層L文化層母岩別資料12
- 図版38 72. 第VI層L文化層母岩別資料13
73. 第VI層L文化層母岩別資料14、15、16、17
- 図版39 74. 第VII層文化層の石器 (石器ブロック1)
75. 第VII層文化層の石器 (石器ブロック4)
- 図版40 76. 第VII層文化層母岩別資料3
77. 第VII層文化層母岩別資料6
- 図版41 78. 第VII層文化層母岩別資料7
79. 遺跡から御嶽山を望む

第 I 章 発掘調査の目的と経過

第 1 節 発掘調査に至る経緯

(1) 発掘調査の目的

國學院大學文学部考古学研究室では、考古学演習Ⅱ（考古学実習）の一環として1979年度から毎年度学術調査を実施している。これまでに新潟県中魚沼郡中里村壬遺跡をはじめ、山形県長井市北堂C遺跡、千葉県富津市森山塚古墳、東京都三宅島三宅村中郷遺跡、物見処遺跡の調査を行っている。

1987年度からは調査地の一つを長野県木曾開田高原に求め、旧石器文化ならびに縄文草創期文化の様相とその変遷等の解明を目的として、小馬背遺跡、西又遺跡の発掘調査を行ってきた。1989年度からは柳又遺跡A地点の発掘調査を継続して行なっている。

木曾御岳山の北東麓に位置する開田高原は、柳又遺跡群をはじめとした旧石器文化および縄文草創期文化を中心とする数多くの遺跡が残されている。文献のうえでも1911年には開田村菅沢付近採集の石鏃の紹介記事（人類学雑誌27-6）が松村瞭によって記されている。発掘調査は藤沢宗平ほか信州ローム研究会による1955年の古屋敷遺跡が端緒を切った。この調査で発見された大形の槍先形尖頭器等を主体とする石器文化の報告（信州ローム1）は、開田高原を旧石器文化ならびに縄文文化起源の研究フィールドとして重視することとなった。これに続き1959年から1962年にかけて、柳又遺跡調査会による柳又遺跡A・B地点の発掘調査が行われ、細石刃やナイフ形石器を伴う複数の旧石器文化とともに、「柳又ポイント」の通称で知られる有舌尖頭器が発見され、旧石器文化から縄文文化への移行過程の様相解明に一翼を担った。その後1968・1969年にかけて木曾教育会によって実施された小馬背・西又遺跡の発掘調査では、隆起線土石器に伴い、有舌尖頭器、槍先形尖頭器、片刃打製石斧等の縄文時代草創期前半の石器群が発見され、該期の研究に資料を提供している。

本学考古学研究室では、開田高原における考古学的調査を継続して行う方針を立て、1987年4月に遺跡の分布と現状を把握するための予備的な踏査が行ない、その最初の調査地として開田村西野2623番地に所在する小馬背遺跡を選定した。しかしながら、2年次にわたる調査の結果、遺物包含層は既に耕作によって大きな攪乱を受け、遺跡の遺存状態が壊滅的であることが判明した。また、並行して調査を進めていた西又遺跡でも同様の現状が確認され、この両遺跡の調査は1988年度をもって一応の区切りがつけられることとなった。一方、柳又遺跡については、この一帯は既に1979年の御岳山噴火降灰罹災に伴う土地改良工事や耕作等によって湮滅したものと考えられていたが、小馬背遺跡の第2次調査と並行して行われた周辺遺跡の踏査の際

に、柳又遺跡A地点の村上和幸氏所有の畑地に旧石器時代を中心とする遺物が散乱していることが発見され、それらが最近の深耕によるものであることが判明したため、急速同地点の試掘調査を行った。その結果、旧石器時代の遺物包含層は大きな攪乱を受けず保存されていることが判明し、同地点を新たな調査対象地点とする方針が定められた。

1989年に実施した第1次発掘調査では、旧石器時代の遺物包含層の遺存状態と基本層序を確認するとともに、細石刃を主体とする第V層文化層とナイフ形石器を伴う第VI層文化層の2面の文化層を検出するなどの成果を得た。続く1990年の第2次発掘調査では、第V層文化層において礫群・配石各1基が検出され、それに付随する2箇所の石器ブロックを確認した。第VI層文化層でも礫群1基とそれを中心に分布する石器ブロックが確認され、石器組成や剥片剥離技術等に関して良好な資料を得た。1991年の第3次発掘調査では、第V層文化層において第2次調査で検出した礫群が予想以上の広がりをみせており、合計7基の礫群が列状に配置された構造であることが判明した。また新たに配石1基を確認し、その周辺などから比較的まとまった石器群が検出された。1992年の第4次発掘調査では、第VI層中部に新たに第VI層M文化層を検出し、第VI層中部から下部に位置する従来の第VI層文化層を第VI層L文化層として捉え直した。加えて第VII層文化層も確認し、礫群2基と3箇所の石器ブロックが検出されるとともに、第VIII層以下が無遺物層であることが確認された。1993年の第5次発掘調査では、第4次調査区の北に調査区を設定して、第4次調査で確認された第VII層文化層の北側へのひろがり把握した。同時に従来A II地点と呼称されていた地点の一部で試掘を行い、A地点の基本層序第VI層に相当する層位からナイフ形石器等を発見し、包含層の遺存が確認された。なお、試掘を実施した地点はD地点と呼称することにした。続く第6次発掘調査では、第5次調査の際に試掘したV-16区を含む遺跡北東部に調査区を設定し、これまで安定して確認されることのなかった第V層より上位の層位で、点数はわずかであるが縄文時代草創期以降に編年される表裏縄文系土器群と隆起線文系土器群の層位的な出土を確認した。また、第V層以下の層位における遺物の包含も確認されたが、第1次調査から第5次調査までの調査範囲に比べて、石器群の分布が粗雑であることが判明した。第6次発掘調査では同時にB地点の一部を試掘したが、遺跡の南東端にあたり遺物包含がわずかに確認されたに過ぎない。

本書にまとめた第7次発掘調査は、第6次調査の成果を受けて遺物の分布の主体となる範囲に焦点を絞り、第1次調査～第3次調査で第V層まで発掘が進捗している範囲について、第VI層以下を発掘する計画を立てた。具体的には1995年6月8日から6月10日、本学小林達雄教授と宮尾亨助手が現地に出張し、発掘調査範囲と調査期間等について、関係諸機関ならびにA地点地主村上和幸氏との間で協議を行い、同年9月12日から9月21日までの10日間と決定した。

なお、本遺跡の発掘調査にあたっては、長野県教育委員会ならびに開田村教育委員会より御指導と御協力をいただいている。A地点の地主である村上和幸氏には調査の趣旨を御理解いた

第1節 発掘調査に至る経緯

だき、本年度の発掘調査を快諾していただいた。学校法人市邨学園理事長末岡熙章先生（73期院友）には、同学園開田高原研修センターを調査団の宿舎として提供していただいているばかりでなく様々な援助をしていただいた。嶽見旅館・たけみ商店には、調査団の食事、宿舎から調査地点までの移動等で御世話いただき、多大な御協力を頂戴している。遺跡の土壌分析には関しては、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を受け、橋本真紀夫・辻本崇夫の両氏には現地において試料採取の助言のみならず、作業をしていただいている。また、神村透先生、桐原健先生、樋口昇一先生をはじめ、激励に遠路御来駕いただいた見学者各位にもさまざまな御支援をいただいた。このたび本書を上梓するにあたり、改めて謝意を表する次第である。

（田村令子）

(2) これまでの発掘調査の概要

第1次調査の概要

1989年9月に実施された小馬背遺跡第2次調査の際に、柳又遺跡A地点において旧石器を含む石器の散布が認められたため、9月8日～12日に急遽同地点の現状を把握するための試掘調査が行われた。試掘調査の結果、上層部には攪乱が及んでいたものの、第V層以下の旧石器時代の遺物包含層は保存されていることが確認されたため、翌1989年8月27日～9月5日の十日間、柳又遺跡A地点の第1次発掘調査が実施された。発掘区域は1959年から62年にかけて樋口昇一・森嶋稔らが調査を行ったA I地点の東側の隣接地にあたる。調査区を1グリット2×2mとして計23グリットを設定した。グリットの名称は東から西へA・B列、南から北へA列5～16区・B列6～16区とし、その北側に位置するA-22区で地層の確認を行った。A-22区では旧地形が埋没谷状に落ち込み、耕作による攪乱を受けていないことが判明し、基本層序と層位名称を確定した。調査区は合計24グリット、調査面積は96㎡である。

発掘調査の結果、旧石器時代の2面の文化層が確認された。それらはそれぞれ細石刃を主体とする第V層文化層・ナイフ形石器を主体とする第VI層上部文化層として把握された。

第V層文化層は細石刃を主体とし細石刃75点・細石刃石核2点・同原形2点・同打面形成削片3点、他に器種として搔器・削器・細部調整剥片・石刃等が共伴することが確認され、主体となる細石刃はA・B-9・10区に集中して分布し、細石刃関係資料は特に西側のB列側に偏る傾向が窺われた。

第VI層文化層はナイフ形石器30点をはじめ、槍先形尖頭器・彫器・搔器・削器・細部調整剥片・石刃・石核・敲石等が出土した。それらに伴い、A・B-11～13区に中心をもつ礫群が検出され、剥片・破片類がそれらに付随するようにA・B-13・14区付近に集中する様相が明らかとなった。しかし、日程の都合から第VI層上層部の層位で調査を中断せざるを得ずに終わり第一次調査では第VI層上部文化層は不明確な状態であった。

またA-22区では第III層中から19点の縄文土器が出土したが、第IV層以下からは遺物が検出

されず、旧石器時代の遺構・遺物は A・B-15・16区付近を境として地形の傾斜する北側には分布していないことが確認された。なお、縄文時代の遺物包含層は広い範囲で攪乱を受け遺存していないが、耕作土の第 I 層中から有舌尖頭器 9 点、石鏃 3 点、石匙 1 点が得られ、A-5 区では縄文時代草創期と推定される土坑が 1 基検出された。

第 2 次調査の概要

第 V 層文化層における遺物分布状況と石器器種組成の把握と A・B-10~14区において検出された礫群および石器群のブロックの全容解明、第 V 層以下における文化層の有無の確認の 3 点を調査目的とする第 2 次発掘調査は、1990年 9 月 8 日~17日の10日間にわたり実施された。27グリット合計108㎡を調査区域としたが、日程と天候条件から第 VII 層以下の層位の調査には至らなかった。この調査では新たに第 VI 層文化層の存在が確認された。

第 V 層文化層の石器群には、細石刃 90 点、細石刃石核 4 点、同原形 1 点、同打面形成削片 3 点、稜付削片 3 点が新たに加わり、細石刃の形態学的特徴や細石刃の剥離技術とその工程が明確になった。本遺跡の第 V 層文化層にみられる細石刃剥離技術は、削片系の楔形細石刃石核を特徴とし、湧別技法と共通する技術工程的特質をもち、北方系細石刃文化との関連性を示す一方で、製作工程に定型的な削片の剥離を伴わない独特な楔形細石刃石核が存在する。加えて、細石刃の石材に玻璃質安山岩を多用する点に独自の様相を見せる。また、細石刃に共伴する石器群の器種組成がより詳細に把握され、搔器 7 点、削器 5 点、細部調整削片 21 点、石刃 20 点、石刃状削片 5 点、礫器 3 点、打製石斧 1 点の存在が明らかとなったが、細石刃の製作技術に湧別技法に代表される北方系細石刃剥離技術との系統的な繋がりが認められながら、器種組成上で荒屋型彫器が欠落している点が注意される。その他に両面調整の槍先形尖頭器 1 点が当該文化層に共伴するものと判断された。さらにこれらの石器群に伴う遺構として礫群・配石各 1 基が検出され、それぞれに付随して大きく 2 箇所の石器ブロックが形成されていることが明らかとなった。特に配石周辺では、細石刃とその関係資料が多数出土し、配石と細石刃製作とに何らかの関係が示唆された。細石刃文化に礫群や配石が共伴した例は全国的にも 30 数例にすぎず貴重な資料を提供するものである。

第 VI 層上部文化層は、遺物集中のピークが第 VI 層上部ではなく第 VI 層中位ないし下部に位置することが判明し、当該石器群を改めて「第 VI 層文化層」として捉え直した。検出された石器ブロックは、A・B-11・12区を中心として直径約 4 m の円形を呈する。遺物の総数は A・B-10~14区で、石器 51 点、削片 498 点、礫 1145 点の合計 1694 点である。器種別にみると、ナイフ形石器 13 点、槍先形尖頭器 2 点、彫器 2 点、搔器 2 点、削器 1 点、鋸歯状石器 1 点、揉錐器 1 点、細部調整削片 6 点、石刃 11 点、石核 10 点、敲石 2 点となり、ナイフ形石器を主体とする石器群であることには変わりはない。石刃を素材とした二側縁調整・部分調整を形態的な特徴とする。石器ブロックの中央に位置する礫群は、1084 個の礫から構成され、直径約 6 m の不整楕円形を

呈する。石器ブロックは、礫群の北側にあたるA・B-13・14区を中心に特に分布し、礫群を挟んで対向する位置に存在する石核と剥片の接合が認められた。石核や敲石は特に礫群の周辺に集中し、礫群の周囲で剥片生産や石器製作が行われていた状況を把握できた。

第3次調査の概要

第3次調査はV～Y-11区において検出された第1号礫群とその礫群に付随して細石刃および完形資料を含む石器ブロックの平面的な広がりを把握し、第V層文化層における遺構と遺物の分布状況、およびその石器組成と細石刃剥離技術の実態をさらに詳しく究明することを主たる目的として、1991年8月27日～9月5日の10日間にわたり実施された。調査区域として遺物の広がり予想された礫群の南側に新たに30グリット、合計120㎡が設けられた。

第IV層文化層に帰属する石器群には槍先形尖頭器1点、彫器5点、搔器2点、削器4点、細部調整剥片2点、石刃・石刃状剥片9点等、合計26点の石器がある。そして、石器石材に開田高原を含む長野県南西部に大きな原産地のない珪質頁岩を多用する特徴がある。珪質頁岩は、開田高原の旧石器時代や縄文時代の各遺跡では、あまり見られない石材である。この珪質頁岩を用いた石器製作技術には、大形石刃を折断技法によって二ないし三分割し、それらを素材として定型的な彫器を作り出すと同時に、同様の素材によって縦型削器や搔器をも製作する整った石刃技法が窺える。石器組成のうえでもこのような定型的な彫器は高い割合で存在し、当該文化層の特徴となっている。現在までにこのような石器群の類例は、長野県西南部を含む中部地方南部では見い出せない。石器製作技術からみる限り、北海道樽岸遺跡の石器群に類似するが編年的・系統的な位置づけは今後の研究課題である。さらにこの第IV層文化層に前後する第V層文化層の北方系削片系細石刃文化や、いわゆる神子柴・長者久保文化、有舌尖頭器文化との関連は、旧石器時代最終末期から縄文時代草創期にかけての石器文化の系統・編年研究に重要な資料を提供するものである。

第V層文化層に関しては、第1号礫群の全体的構造と石器ブロックの平面的な広がりの把握が一目的であったが、遺物・遺構の広がりが予想以上であることが明らかとなった。V～Y-7～11区で7基の礫群が列状に確認された。また、V・W-5・6区では第2号配石と細石刃関連資料が検出され、配石と細石刃生産との関連性が第2次調査に続いて示唆された。調査全体では細石刃関係資料134点を新たに加えて合計313点となっている。特に削片系楔形細石刃石核とその関係資料は、両面調整技術による細石刃石核素材や細石刃石核原形等を加え、その製作工程の全容を明らかにする資料を得た。それらの多くは玻璃質安山岩製である。同時に行った統計的検討によって、黒曜石製の細石刃に対して玻璃質安山岩製の細石刃は長幅比が小さく、幅広であることが判明した。細石刃に共伴する器種には搔器4点、削器9点、彫器1点、細部調整剥片35点、槍先形尖頭器4点、石刃14点、石刃状剥片8点、礫器1点等があり、また槍先形尖頭器の資料増加と彫器の存在が注意される。しかし出土した彫器1点は形態や石材の点か

ら判断して荒屋型彫器とは異なり、また彫器の器種組成に占める割合がきわめて低いことも改めて確認された。

第 4 次調査概要

A・B-11・12区を中心に広がる第VI層文化層の石器ブロックおよび礫群の全容解明と第VII層以下の文化層の確認を目的に第4次調査は1992年8月27日～9月6日の11日間にわたり実施された。調査区はA～C・Z-10～14区の20グリット、合計80㎡である。

調査深度は初めて第VII層以下に及び、一部第X層上部まで掘り下げられた。第VI層以下が未調査であったC-12・13区の第VI層中部において礫群1基と石器ブロック1箇所が新たに検出され第VI層M文化層と呼称することとなり、さらに第VI層中部から下部に位置し、従来第VI層文化層と呼称していた文化層を第VI層L文化層と改称した。また、第VII層上部において新たに礫群2基と石器ブロック3箇所が把握され、第VII層文化層と命名した。なお、第VII層下部以下からは遺構・遺物が検出されていない。この第4次調査において柳又遺跡A地点における縄文時代草創期から旧石器時代第VII層文化層までの編年が、層位的出土に基づいて提示された。なお、第4次調査によって新たに発見された文化層の概要は以下のとおりである。

第VI層M文化層はナイフ形石器1点、石刃3点、細部調整石刃1点、剥片12点の石器群で構成される石器ブロック1ヶ所に57点の礫で構成され、小規模な礫群が伴っている。

第VII層文化層は、ナイフ形石器11点、彫器削器1点、搔器3点、細部調整剥片18点、楔形石器2点、石刃・石刃状剥片23点、石核・石核素材11点、敲石1点、剥片・碎片567点等の石器群で構成される。C-10区を中心とする石器ブロック1、C-14区を中心とする石器ブロック2、C-12区を中心とする石器ブロック3の3ヶ所の石器ブロックと、C-10区を中心とする構成礫287点の第1号礫群、C-14区を中心とする構成礫144点の第2号礫群の2基の礫群がある。

ナイフ形石器を主体とする文化層であるが、同じナイフ形石器を主体とする第VI層L文化層のように槍先形尖頭器は組成していない。ナイフ形石器は玻璃質安山岩製の小形な不定形の剥片素材の鋭利な縁辺を刃部として残し、二側縁加工によって切出形に調整したものが主体である。石刃生産における剥片剝離は、単設打面石核を用い、作業面を固定して徐々に打点を打面奥へと後退させていく点に特徴があり、一定の長さの石刃・石刃状剥片が意識されている。また、石器石材はチャートを主体とするが、玻璃質安山岩が第VI層L文化層以降には見られないような高い割合で消費され、逆に第VI層M文化層や第VI層L文化層に比べて黒曜石の利用頻度が低いという傾向が見られた。以上の特徴から、本文化層は近接するC地点の第V層文化層に該当するものと推測され、南関東の武蔵野台地での立川ローム層第VI層下部・第V層の石器群に対比される可能性をもつといえる。

第 5 次調査概要

第4次調査の調査区域の北側A～C・Z-15～16区について、第4次調査で提示された第VII

第1節 発掘調査に至る経緯

層文化層の広がり、特にC-14区を中心とした石器ブロック2、第2号礫群の広がりについて確認することを主な目的とし第5次調査は1993年9月13日～22日の10日間にわたり実施された。また、現地形において、西から東へ傾斜の強くなっている北東部分への遺物の分布のひろがり、層序の確認を行うためにV-16区の試掘を行った。調査区域は合計9グリッド、面積36㎡である。第5次調査の結果、A～C・Z-15～16区では、第V層文化層の細石刃2点、石刃状剥片1点、槍先形尖頭器1点、削器2点、石核1点、敲石1点と構成礫54点の小規模な礫群1基、第VI層L文化層のナイフ形石器1点、槍先形尖頭器1点、石刃1点、細部調整剥片1点、第VII層文化層の搔器1点、ナイフ形石器1点、石核1点が、それぞれ検出されている。しかし、各文化層とも石器ブロックとして把握できるような石器群の集中は見られなかった。特に第4次調査でC-14区を中心に確認され、C-15区以北に広がるのが予測された第VII層文化層の石器ブロック2や第2号礫群については、C-15区以北には広がらないことが明らかになった。

同時に遺跡北東部分への遺物の広がりを確認する目的で試掘されたV-16区では、従来大部分の調査区で削剝されていた第V層より上位の層位が安定的に遺存している状況が確認された。特に第II層中からは、土器破片が1点出土し、当該区を中心とする部分での土器群の存在を注意させることになった。

第5次調査では、A地点の調査と同時にこれまで樋口・森鳴らの報告でA II地点とされる地点の一部に試掘を実施し、遺存状態やA地点の文化層との関わりを検討した。調査範囲はイ区・ロ区とした2グリッド、面積8㎡である。調査はA地点の基本層序第VI層に相当する深度まで行われ、両面調整石器1点、槍先形尖頭器1点、ナイフ形石器3点、石刃・石刃状剥片10点、細部調整剥片1点、削器1点、敲石3点、台石1点を検出し、柳又遺跡群の一つとして新たにD地点と呼称することにした。

第6次発掘調査の概要

第6次発掘調査は1994年9月6日から9月15日までの10日間にわたり実施した。第5次発掘調査において第V層より上位の層位が安定した遺存状態を示していたV-16区を含む遺跡北東部について、各文化層の広がり、特に第V層より上位の層位に包含される遺物の広がりを確認するため、U～X-16・17区の8グリッド、面積32㎡を対象に発掘調査を行った。また、同時に第5次調査から開始した周辺遺跡の遺存状態の確認をする作業として、B地点の一部で試掘を行った。

調査の結果、良好に遺存していた第II層から第IV層にかけて、土器破片43点、石鏃3点が出土している。特に土器破片は縄文時代草創期から早期に位置づけられる表裏縄文系土器群と隆起線文系土器群の層位的な出土が確認されたことが特筆される。これらの土器群に石鏃は共伴しているが、有舌尖頭器は検出されていない。さらに第V層以下の旧石器時代の文化層につい

ては、過去5年のこれまでの調査区に比べ散漫な遺物の分布が確認され、わずかに削片系の細石刃石核1点の出土は注目されるが、遺物数は剥片・碎片を含む石器・礫をあわせて144点過ぎない。これらは遺跡の範囲を考えるうえで参考になる出土状況であろう。なお、B地点の試掘結果もまた、遺跡の北東端を推定するようわずかな遺物の検出にとどまるものである。

(宮下治枝)

第2節 第7次調査の経過

(1) 第7次調査の方針と経過

概要

第7次調査は1995年9月12日から9月21日までの10日間にわたり実施した。調査範囲は第1次調査、第2次調査、第3次調査のそれぞれで第V層ないし第VI層上部まで発掘が終了し、第V層文化層、第VI層L文化層の石器群や礫群を確認しているC-7~9区、A・B、W~Z-6~9区の計27グリッド、面積108㎡である。今回の調査では第VI層以下を発掘精査し、第3次調査で存在が予見されている当該範囲の第VI層L文化層の石器群や礫群の全容を明らかにすることが第一の目的であった。さらに第4次調査で確認されている第VII層文化層石器ブロック1の南東部のひろがりを確認し、第VII層文化層の全容を解明することも問題とされた。

発掘調査は考古学演習II履修生31名のほか、本学史学科ならびに本学大学院、信州大学、東京大学からの特別参加生が加わり、総勢55名で行われた。調査期間中は台風の接近などに伴って悪天候となる日数が多く、発掘調査の実質的な日数は5日間に満たない。そのため予定していた調査が遂行できるかが危ぶまれたが、有志が連日早朝5時から氷点下に冷え込んだ中で発掘を行い、初期の計画どおり第VII層まで発掘を進め、当該範囲における第VI層以下での遺物の包含を確認した。その結果、当該範囲において新たに第VI層L文化層の石器ブロック2か所、礫群5基を検出したほか、第4次調査で確認された第VII層文化層の第1号礫群と石器ブロック1とについて南東部のひろがりを確認し、新たに礫群1基、石器ブロック1か所を確認した。

発掘調査日誌

9月12日(晴) 参加者は8時30分に本学本館玄関前に集合。バスとワゴン車に分乗して9時に出発。14時20分頃宿舎である市邨学園開田高原研修センターに到着。発掘器材を準備。

9月13日(晴のち曇) 草刈り等の整備を行い、調査区を設定。埋め戻し土を除去し、第1次調査~第3次調査の発掘終了面を確認。

9月14日(雨) 雨天のため調査中止。開田村立考古博物館を見学。その後、木曾郡町村会埋蔵文化財調査室の新谷和孝氏を講師に迎え、「木曾における考古学研究最新成果」を受講。

9月15日(雨) 雨天のため調査中止。飯田市教育委員会の下平博行を講師に迎え、「伊那に

第2節 第7次調査の経過

おける考古学研究最新成果」を受講。

9月16日（雨）雨天のため調査中止。長野県教育委員会の丸山敏一郎氏を講師に迎え、「信州における考古学研究最新成果」を受講。

9月17日（雨のち晴）雨天のため午前中は調査中止。天候の回復に伴って、午後から調査開始。調査区全域の精査。石器や礫を検出。

9月18日（晴）久々の快晴となり、ほぼ調査区全域で第VI層までの精査終了。石器や礫の出土状況の写真撮影や図面作成を行い、遺物の取り上げ。さらに第VII層の精査。

9月19日（晴時々曇）早朝5時から第VII層を精査を進め、石器や礫を検出。写真撮影や図面作成を行い、遺物の取り上げ。土壌の自然科学的分析のためパリノ・サーヴェイ株式会社の橋本真紀夫・辻本崇夫の両氏来跡。

9月20日（晴）前日同様早朝5時から調査を行い、第VII層の精査。C-7区の一部のみ第IX層まで精査し、土壌分析の試料採取終了。写真撮影や図面作成等の作業を若干残す。

9月21日（晴）早朝5時から残務処理。寒暖計は-6℃を記録。終了後、発掘器材を撤収、宿舎として利用した市邨学園開田高原研修センターの清掃。11時には発掘参加者は貸し切りバスに乗り込み、開田村を後にした。10日間にわたる日程を終了した。

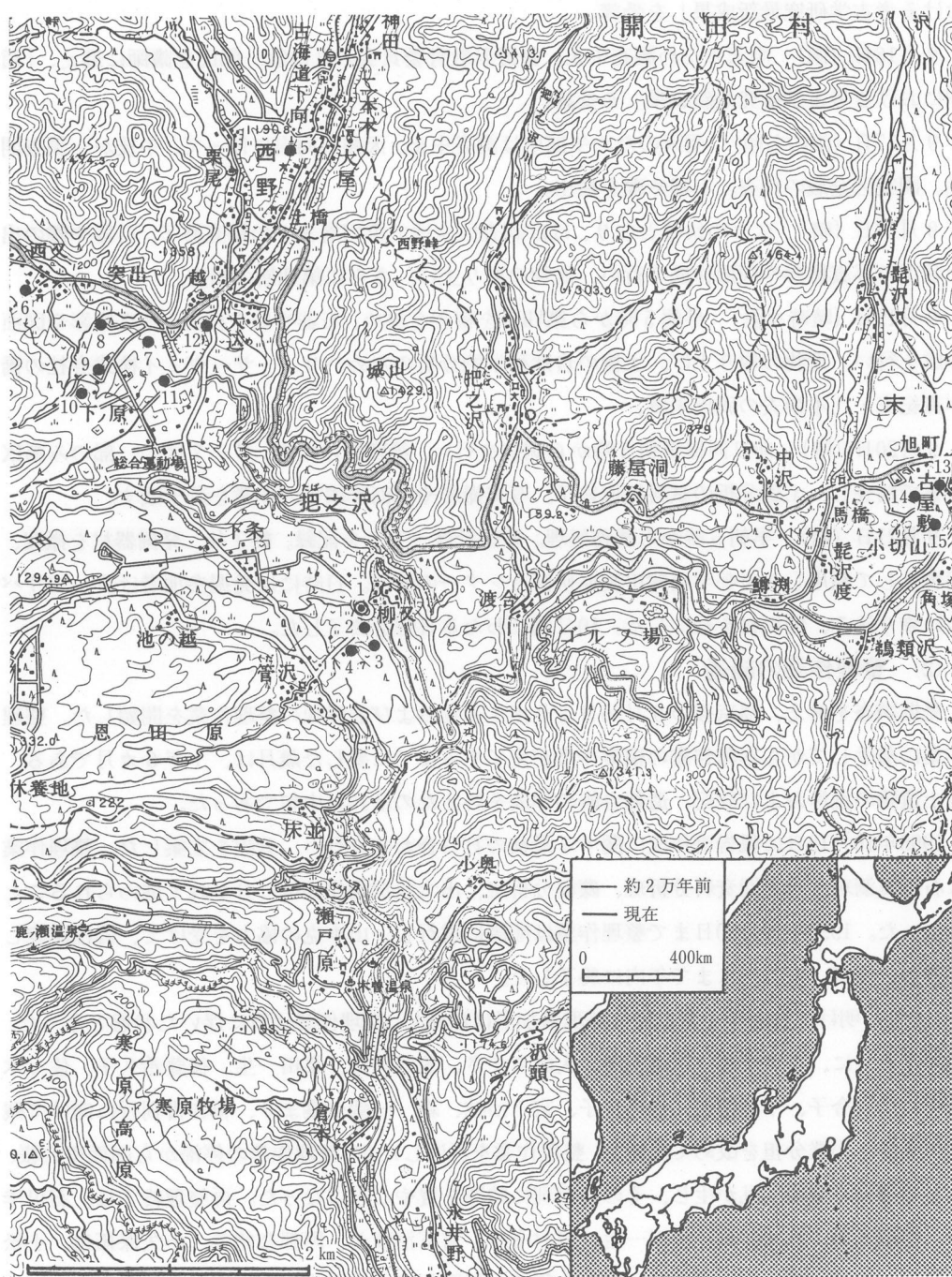
(2) 整理作業の経過

発掘調査を終え、帰京後の9月26日より出土遺物および記録類の整理作業を開始した。整理作業に着手してから本報告書の編集作業が完了するまでに要した歳月は、1年6カ月である。出土遺物の洗浄および註記、遺物台帳の作成を終えたのは10月中旬であった。

1995年10月12日に報告書作成に関する最初の打ち合わせを行い、分担を立案した。整理作業は石器実測班、母岩別資料分析班、礫群分析班、出土状況図作成班に分かれて進められることになった。1995年12月30日まで整理作業は順調に進行し、山本克の協力を受けて、器種認定した石器の実測、トレースまで年内に終了した。

しかし、明けて1996年1月以降に整理参加者は激減し、整理作業は宙に浮いた状態となった。1996年6月に、石川季彦、岩越宏典、大堀あずさ、笠井洋祐、栗田一生、後藤希久子、佐々木裕輝、田村令子、千葉博俊、松島悦子、宮下治枝、森一欽が集まり、報告書刊行に向けて残務の確認と作業分担を改めて確認し、整理作業を再開したが、整理作業の停滞から図面や台帳、そして遺物の整理混乱が生じ、その再整理に時間を費やることになった。再整理終了後、石川季彦、岩越宏典、笠井洋祐、栗田一生、田村令子、宮下治枝が、阿部奈緒美、小久保拓也、小松崎弘展、田村覚、谷地亜希子の協力を得て、挿図作成、表作成、写真撮影などの実務にあたり、1997年1月には報告書本文の執筆分担を決め、断続的に本文の執筆と読み合わせを繰り返した。3月には編集作業に入り、印刷所への入稿、校正を経て、3月中の本書の刊行に到った。

(栗田一生)



1. 柳又遺跡A地点 2. 柳又遺跡C地点 3. 柳又遺跡B地点 4. 柳又西遺跡 5. 小馬背遺跡
 6. 西又II遺跡 7. 下ノ原1遺跡 8. 下ノ原2遺跡 9. 下ノ原3遺跡 10. 下ノ原4遺跡
 11. 下ノ原5遺跡 12. 越遺跡 13. 古屋敷遺跡A地点 14. 古屋敷遺跡B地点 15. 古屋敷遺跡C地点

第1図 柳又遺跡群の位置と周辺の遺跡(1/5000)

第II章 開田高原と柳又遺跡

第1節 柳又遺跡の位置

(1) 開田高原の地理と環境

長野県木曾郡開田村は長野県の南西部に位置し、西側は岐阜県大野郡高根村と接し、長野県と岐阜県の県境にあたる。その一帯、開田高原は御岳山（標高3067m）の北東麓に位置し、北・東・西側を山地に囲まれている。その平均標高は約1100mで、高原性の盆地である。開田高原の南側は西野川の開折谷によって三岳村へと通じている。西野川は開田高原をほぼ北から南へ向かって貫流しており、この地域の地形を東西に分割する役割を果たしている。さらに西側の地域は西野川の支流である冷川によって南分に二分されており、北側の地域を下の原、南側の地域を恩田原という。西野川は開田村に水源を発し、末川も同様に開田村の北方から始まる。両河川は共に支流を順次合流させながら、柳又の集落の南側、三岳村との村境付近で合流し、さらに三岳村で大滝川と合流したのち、木曾福島町で木曾川に合流することになる。

開田高原の地質の生成要因として挙げられるのは、主にその南西方向に位置する御岳山の火山活動である。この御岳山東山嶺の基盤は、美濃帯の中・古生代層と花崗岩・花崗斑岩、そして鮮新から下部更新統の地蔵峠火山岩類・玄武岩類である（植村ほか編 1988）。

御岳山の基盤である古生代層の岩石としては、礫岩・砂岩・粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩などが挙げられる。次に中生代層の岩石としては、礫岩・角礫岩・砂岩・粘板岩などの堆積岩と、石英斑岩・上松苗木型花崗岩などの火成岩類がある。地蔵峠火山岩類・玄武岩類は、第四紀はじめ頃の先御岳火山活動時代の火山岩であり、その時期の堆積物には地蔵嶺礫層・川合礫層があり、火山岩として地蔵嶺礫層には、地蔵峠火山岩類が、その上をおおったり、とりこんだりする形で存在する。これらの地質の形成時期から第四紀更新世中頃までの火山活動期が、先御岳活動期と呼ばれるものである。その当時、この付近は海拔約1100～1500メートルの凹凸のある緩やかな丘陵性の高原であったものが、その後、飛驒山地から木曾山地の急激な上昇活動にともない、その時の泥流により地蔵峠火山岩類堆積面が開析される。そして、約80万年前の更新世中期に、美濃帯及びその西側の基盤となる濃飛流紋岩類との断層に火口を開いたのが御岳山である（島田 1982）。御岳山は、現在まで数万年程度の時間幅で、2回にわたる活動期と静穏期を交互に繰り返してきた。この2回の御岳山活動期は、古期御岳火山・新时期御岳火山と称される。そしてそれぞれの活動期は、古期御岳火山を第1期、新时期御岳火山を第2～4期と更に分けられる。この第1期から第4期までの各活動期に噴出された火山噴出物が、御岳テフラ層と言われるものである（小林ほか 1977、竹本ほか 1987、植村ほか編 1988）。

かつて、いわゆる「信州ローム」と呼ばれたこれらの御岳山起源の火山噴出物は、下位より古期・中期・新时期ロームと区分されていた。近年では御岳の火山活動期が古期・新时期に大別されたことを受け、下位から古期御岳テフラ層・新时期御岳下部テフラ層・新时期御岳中部テフラ層・新时期御岳上部テフラ層と称されている（小林ほか 1977）。

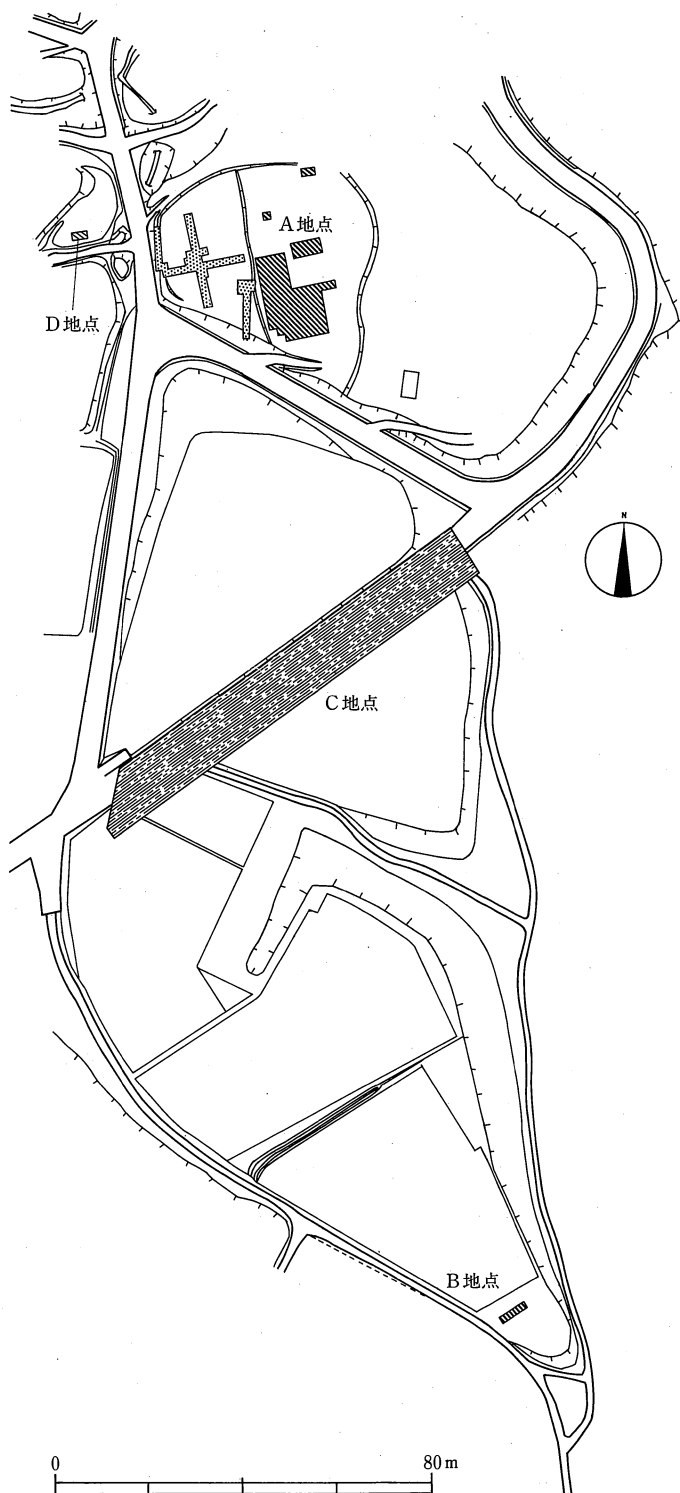
第1期は、火山活動活発化により、安山岩の溶岩やスコリア・軽石などを交互に噴出し、海拔3500mほどの大成層円錐火山を形成していた。この活動期の末期において、大規模な山体崩壊による和村泥流と呼ばれる堆積物が木曾川沿いを流下、倉越原溶岩流とともに木曾川流域の地質年代の標識となっている。第2期は、第1期以後約10万年という活動休止期間に、第1期に形成されていた古期御岳火山帯が大きく浸食作用を受けた後、約8万年前に始まった。前述した通り、第2期からは新时期御岳火山の活動である。継母岳火山群が、新时期御岳下部テフラを噴出した。他の時期の噴出物がスコリア主体であるのに対して、この時期に限り軽石（パミス）が主体となる。この噴出物は堆積し、それぞれPm-I'・Pm-I・Pm-II'・Pm-II・Pm-III'・Pm-III軽石層と呼ばれ、木曾火山灰、鬼界・葛原火山灰層、黒石原軽石層、阿蘇4火山灰などを挟み、その上位に福島埋没土層を含んで新时期御岳下部テフラ層を形成している。また、この時期に木曾川に沿って流下した土石流が木曾川の中・下流域に、木曾谷層と呼ばれる厚い砂礫層を形成した。第3期は約6万年前の、摩利支天火山群の活動による降下火砕物の堆積物の噴出、複輝石安山岩質の噴出物による成層火山の形成が見られる。パミス主体の第2期とは違い、千本松・三岳・屋敷野・笹川・小木曾の各スコリアを含む。それらの層は、大山関金軽石層・大山倉吉軽石層などを挟んでいる。摩利支天火山群の末期に、火山体の一部に大規模な岩屑なだれが発生し、木曾川沿いに土石流が流れ下り、34,000～45,000年前の火山噴出物と見られる木曾川泥流堆積物を形成した。第4期は、比較的短期間の浸食期を経て、山頂部にほぼ南北に並ぶ現在の四の池・一の池・二の池・三の池・五の池にあたる火口群が順に活動し、安山岩などを噴出した。これらの噴出物が堆積、始良Tnや柳又・開田・境峠の各テフラ層などを挟み込むように新时期御岳上部テフラ層を形成している。この新时期御岳上部テフラ層中においての年代測定値として、開田テフラ層の中の開田キャンプ火砕流堆積物にC-14年代測定値>32,000y.B.P.という年代が得られている（竹本ほか 1987）。

また、新时期御岳火山の第2期～第4期における活動期は、関東地方におけるテフラ層と対比した場合、それぞれ第2期は下末吉ローム期（約9万年～6万5千年前）、第3期は下末吉ローム期後半（約6万5千年～5万5千年前）、第4期は武蔵野ローム期から立川ローム期（約5万5千年～2万年前）に比定されている（竹本ほか 1987）。しかし第4期については、武蔵野ローム期から立川ローム期と対比した場合、木曾川泥流堆積物の年代測定値との関係から再検討の必要があると言えよう。御岳山は、2万年前に新时期御岳火山の活動が停止した後、死火山とされていたが地獄谷付近において1979年10月に有史以来初めて噴火した。（田村令子）

(2) 柳又遺跡の位置

柳又遺跡群は木曾川支流の西野川の右岸に形成された河成段丘の縁辺部に並ぶように位置し、時期的にも相互に関連の深い一つの遺跡群を形成している(第1図)。柳又遺跡群の東側には、木曾川水系に属する西野川が流れている。西野川は藤沢川・西又川・冷川・末川等の支流を集めながら開田高原を二分し、三岳村で大滝川にそそぎ、木曾福島で木曾川に合流する。この西野川は開田高原をほぼ北から南へ向かって貫流しており、この地域の地形を東西に分割する役割を果たしている。さらに西側の地域は西野川の支流である冷川によって南分に二分されており、北側の地域を下の原、南側の地域を恩田原という。A地点、B地点、C地点、柳又遺跡からなる柳又遺跡群は、恩田原の東北隅一帯の柳又原と呼ばれる地域にある。

柳又A地点は西野川によって形成された比高差約50mの急峻な段丘崖線から西に約75m隔てた台地上、標高1123.900m(最高点)に位置しており、現河床面との比高差約70mに達する。A地点の付近には西野川に向かい緩やかに傾斜する起伏の少ない地形が広がっている。その北側には西から東に向かって沢が流れ、南側には小支谷



第2図 遺跡周辺と発掘調査区域(1/1600)

が入り、舌状台地状に区画されている。現在は、裾部を取り囲むように村道2-8号線が施設され、台地上のほぼ中央を南北に通る堀切のような段差と小溝によってさらに東西に区切られている。國學院大學文学考古学研究室による第1次～第6次の調査区域は西側の高い畑地の中にある。

なお、1959～62年にかけて発掘が行われたA I地点（樋口・森嶋 1959）は西側に隣接するが、その正確な位置関係は確認されていない。他にA I地点の西側を通る道路の向かい側にA II地点、北東約45mの位置にA III地点と区別されているが、いずれも詳細な位置は不明である。しかし、第5次調査の際にA I地点西側の道路の向かい側A II地点の一部については、試掘を実施し、A地点の基本層序と対応する層序と文化層が確認されており、柳又遺跡群の様相の把握に努めている。

柳又遺跡B地点は、A地点の150m程南側に位置し、A地点と連続した台地上にあり、小川と崖にはさまれた狭い台地の縁辺に位置する点でA地点と立地条件は類似する。第6次調査においては、周囲を未舗装の農道で囲まれた台地の南端部で試掘を実施し、その遺存状況や文化層の確認が行われた。

このB地点からさらに小さな沢を隔てた西側の台地上に柳又西遺跡が近接して存在している。また、A地点とB地点との中間にはC地点があり、A地点を取り囲むように施設されていた村道2-8号線を台地東側部分から直線的に延伸する改良工事にともない、1990年に開田村教育委員会・柳又遺跡C地点発掘調査団が発掘調査を実施した（青木・内川・高橋1993）。

開田高原には、柳又遺跡群をはじめとする古屋敷遺跡・小馬背遺跡・西又遺跡等の数多くの遺跡が残されている。開田村内においては、現在までに48遺跡（文化庁編 1983、神村・山下1986）の存在が確認されている。

（宮下治枝）

第2節 第7次発掘調査の区域

（1）発掘調査区域の設定

本学の柳又遺跡A地点における発掘調査は、1989年から実施され、すでに7年目を迎えている。調査年次によっては一部区域で上層の発掘と下層の発掘というかたちで、同一区域に重複した場合もあったが、調査面積は304㎡に達している。調査年次別の発掘区域（第4図）とその面積は以下のとおりである。

第1次でA-5～16、B-6～16、A-22区の24グリッド（面積96㎡）、第2次でA・B-10～14、C-7～14、Z～T-11、T・U-28区の27グリッド（面積108㎡）、第3次でZ～V-5～10区の30グリッド（面積120㎡）、第4次でA～C、Z-10～14区の20グリッド（面積80㎡）、第5次でA～C、Z-15～16区の9グリッド（面積36㎡）、第6次でX～U-16・17区の8グリッ

ド（面積32m²）。

これらの調査区域は、すべて第V層まで発掘が終了している。また、A～C-10～16区は第VIII層まで発掘を終了している。第7次調査は、第1次調査、第2次調査、第3次調査の発掘区域と部分的に重複するC-7～9区、A・B、W～Z-6～9区の計27グリッド、面積108m²の調査区を設定した。なお、B・C-9区は、第4次調査において確認された第VII層文化層石器ブロック1あるいは第1号礫群と接し、その南東部分のひろがり予想されるグリッドである。また、W～Z-6～9区は第3次調査において第VI層L文化層の石器が若干確認されているグリッドに該当する。

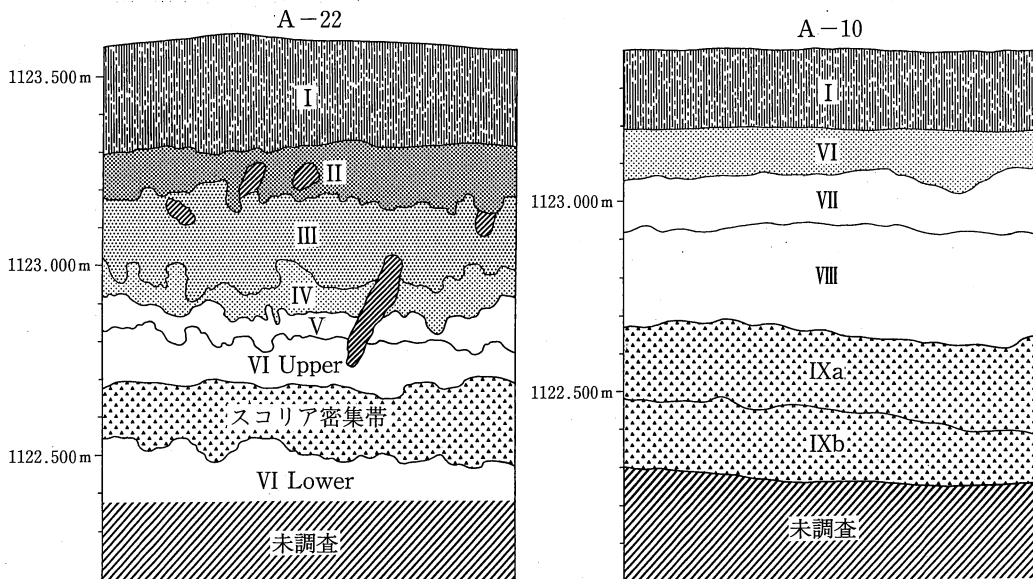
第7次の発掘調査区域は過去5年の設定に準じている。第2次調査の時に設けられた基準杭No.1～6に基づいている。磁北に対してN-12°23'25"-Eの傾きをもつ南北軸と、これに直交する東西軸にしたがってグリッドを配置している（第2図）。1グリッドは2×2mである。また、標高原点もこれまでと同様に、A地点の立地する台地西端部に施設されている水準点（標高1125.700m）から遺跡内に原点移動し、標高1125.700mに設定した。（岩越宏典）

(2) 基本層序

本遺跡の基本層序は、第1次調査で確認したA-22区と第2次調査で確認したA-10区とで土層観察したものに基づいており、以下に示すとおりである（第3図）。

第I層：表土（耕作土）。層厚約20～30cm。

第II層：黒褐色土層。白色粒子を微量に含む。層厚はA-22区で約15cm。



第3図 遺跡の基本層序(1/20)

第III層：暗茶褐色土層。白色粒子を多量に含み、下部には青灰色スコリアを含む。層厚はA-22区で約20cm。

第IV層：暗褐色土層。第III層と第V層の漸移層である。白色粒子と赤色・青色スコリア（径2～3mm）を多量に含む。層厚はA-22区で約10cm。

第V層：暗黄褐色のソフトローム層。第IV層より小粒の赤色、青色、白色スコリアを含む。色調は下半部がより明るい。層厚はA-22区で約10cm。

第VI層：暗黄褐色のハードローム層。スコリア（径10～15mm）を多量に含み、赤色スコリアは第V層に比べて大きい。部分的にクラック帯が認められる。層厚はA-22区で約60cm。A-10区で約20cm。A-22区では、この層の中位に固くしまった青灰色スコリアの密集帯が挟まれており、上下に分層することができる。この場合には、上部を第VIUpper層、下部を第VILower層とする。ただし、台地上部平坦部分にあたるA-B-10～14区では、このスコリア密集帯は認められず、分層することはできない。

第VII層：明黄白色のハードローム層。青灰色スコリア（径1～5mm）を多量に含む。第VI層よりも色調が明るく、粘性があって軟質である。層厚はA-10区で約10cmである。

第VIII層：スコリアを多量に含むローム層。第VII層と第IX層の漸移層である。赤色・青色・青灰色スコリア（径1～8mm）を多量に含み、固くしまる。A-10区で約30cmである。

第IX層：層厚は約120～150cmのスコリア堆積層。性状と層厚から判断して御岳第2スコリア層[S-2]（木曾谷第四期研究グループ1967）に同定される。非常に固く、A-10区では約40cmを掘り下げたに過ぎないが、最上部には次の2層に細分された。

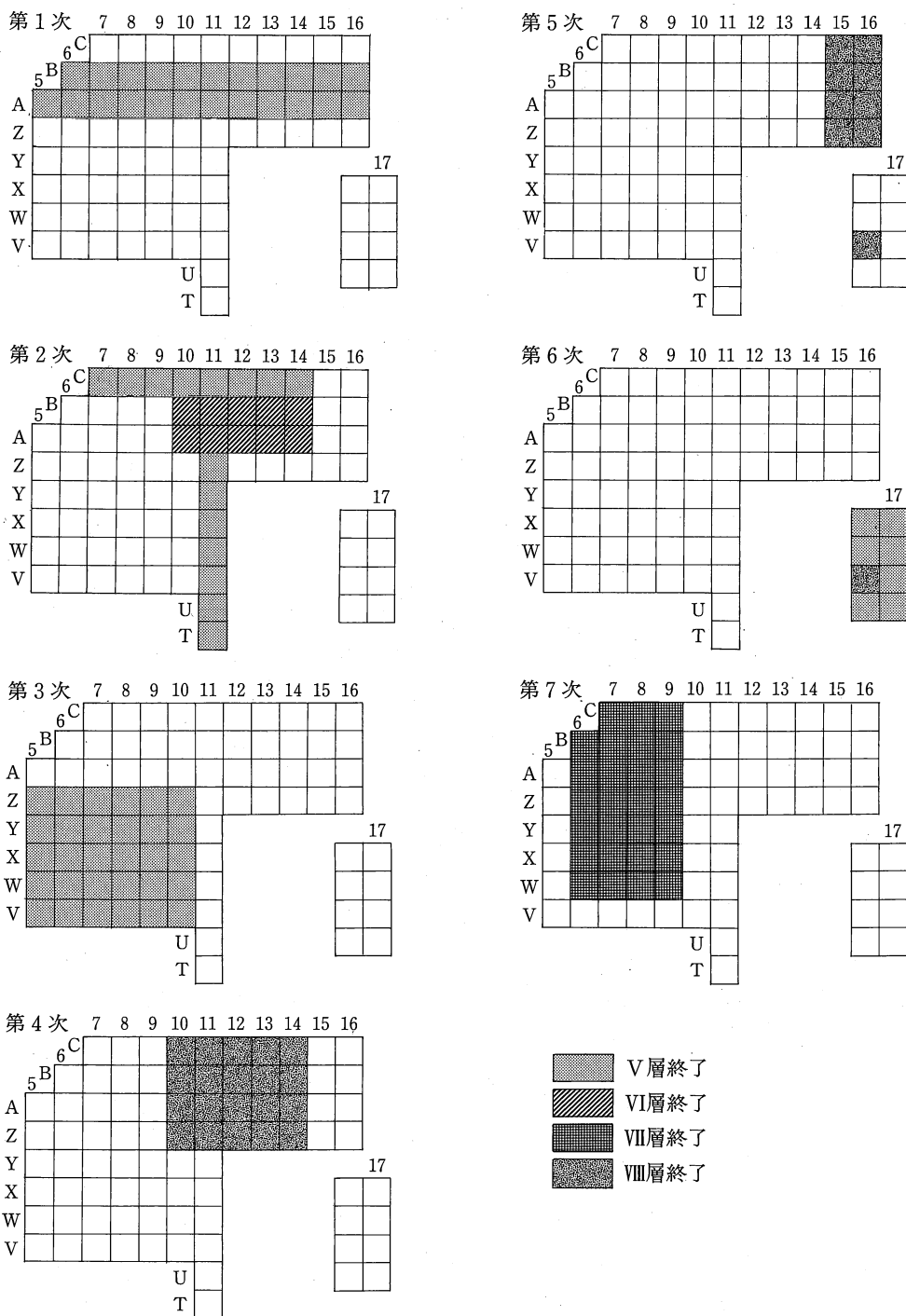
第IX a 層：細粒の青灰色スコリア（径1～10mm）を主体として、赤色スコリア（径1～8mm）と微量の白色スコリア（径1～4mm）を含む。層厚は約20cm。

第IX b 層：赤色スコリア（径1～15mm）を主体として、青灰色・白色スコリア（径3～15mm）を含む。層厚は約20cm。

(3) 調査区層序と遺跡の微地形

第1次調査～第7次調査の発掘区域は、大部分が台地頂部の平坦地に位置する。そのため畑地として開墾され、A-22区、T-11区、T・U-28区、U～X-16・17区を除く調査区では、第V層上部より上位の土層は削剝された状態となっている。第1次調査（小林編 1990）のA-22区周辺は旧地形が埋没谷状に落ち込んでおり、耕作の影響が少なく土層が攪乱を受けずに厚く整然と堆積しており、第VI層下部までの基本層序を確認した。続く第2次調査（小林・谷口編 1992）でA-10区を対象に第IX層までの基本層序を確認した。また、地形の傾斜の著しい第5次調査（小林・宮尾編 1995）の発掘区域Z-15区付近、および第6次調査の発掘区域X～U-16・17区では、T-11区、A-22区、T・U-28区、V-16区の各グリッドで確認されていたように、第I層から第IV層までが良好に遺存している状態が確認され、そしてまた、

第2節 第7次発掘調査の区域



第4図 各次の調査区と調査深度

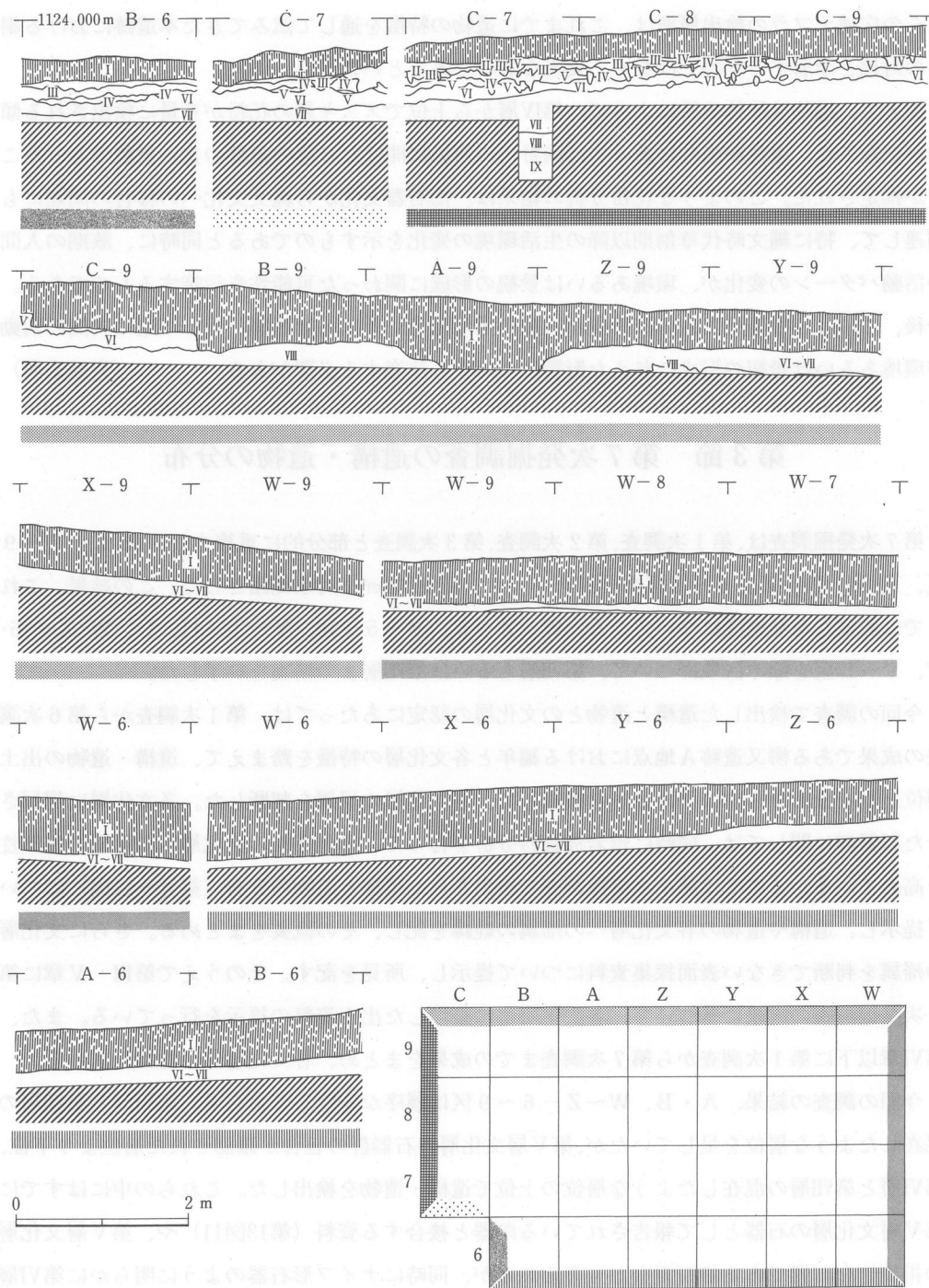
第IV層を細分し得る所見を得ている（永峯・宮尾編 1995）。

第7次調査の発掘区域C-7~9区、A・B、W~Z-6~9区は、第1次調査、第2次調査、第3次調査（永峯・谷口編 1993）においてC-7~9区は第V層まで、A・B、W~Z-6~9区は第VI層上部までを発掘が終了している区域である。第7次調査の調査深度は第VII層まで及んでいるが、層序が安定しておらず、特にA・B、W~Z-6~9区では第VI層と第VII層が混合した状況である。第4次発掘調査でもZ-10~15区付近に同様の各層位の乱れが指摘（谷口・宮尾編 1994）されているが、より南側の今回の発掘区では、W~Z-6~9区のみならず、A・B-6~9区でも同様の傾向が把握された。比較的層序が安定しているC-7~9区でも各層位は安定せずに、ブロック状に観察される部分が多く、調査区壁面に設定した土層断面でようやく確認できる程度である（第5図）。しかしながらC-7~9区の土層断面では、同時に第V層より上位の層位も一部ながら残存している状態が観察された。第V層より上位の層位に関しては、前述のようにこれまでも傾斜の強い場所で、ないし旧地形が埋没谷状の場所で遺存している傾向がある。C-9区北面土層断面の各層位がほぼ水平であるのに対して、C-7~9区西面土層断面に見られる南へ向かっての緩やかに傾斜する各層位のようにすから判断する限り、同区域についても地形的な要因で第V層より上位が遺存していた可能性が考えられる。

今回の発掘区の層序全体に関連して、想定される得る微地形は、これまでの調査で明らかのように東側の西野川に向かって、あるいは南側の小支谷へ向かって傾斜が下っている。B~W-6区の第VI層あるいは第VI層と第VII層の混在層位の上面において、東西方向の比高差が約40cmのあり、B-6、C-7~9区の第VI層あるいは第VI層と第VII層の混在層位の上面において、南北方向の比高差が約40cmある。比較的層序が安定しているC-7~9区と同層位の上面は、東西方向に対してほぼ水平であることを併せて考えると、このような傾斜は巨視的に見た場合、ちょうど現地形の傾斜に一致するものであり、旧地形に関して現地形を参照することが可能であるともいえる。ただし、このようにして想定され得る旧地形は、あくまで調査区域についてのみ該当する見解であり、西野川の河川開析深度を考慮した景観ではない点には注意する必要がある。また、このような傾斜の強い旧地形のありようが、A・B、W~Z-6~9区に観察される各層位の乱れ、特に第VI層と第VII層の混在するような層位の形成に関わった可能性があるが、予測を越えるものではない。

なお、今回の調査ではC-7区の一部を第IX層まで精査し、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力で土壌の自然科学分析用試料を採集している。分析結果は、付編を参照されたいが、本遺跡の石器群の編年の位置づけ、他遺跡、あるいは他地域とを対比する際に重視される広域テフラのATが、C-7区で第VII層下部にピークをもって検出されたことが特筆される。結果、柳又遺跡A地点では第VII層文化層の包含層準よりも下位にATが存在し、これまでに確認されているすべての文化層はAT降灰以後に位置づけられることが判明した。さらに表裏縄文系土器

第2節 第7次発掘調査の区域



第5図 発掘調査区域の層序(1/40)

群の検出されている第II層の上部から中部にかけては、K-Ahの存在も指摘されている。これらの広域テフラの検出層準は、これまでに遺物の特徴を通して試みてきた本遺跡における編年の対比と矛盾するものではなく、妥当なものであるといえよう。

加えて、植物珪酸体分析によって、第IV層から上位でススキ属の花粉が多量に検出される傾向が把握され、遺跡が当時としては西野川の河原に開けた日照の条件の良い景観であったことが推定された。このような花粉分析の結果は、旧石器文化から縄文文化への移行の問題にも関連して、特に縄文時代草創期以降の生活環境の変化を示すものであると同時に、該期の人間の活動パターンの変化が、環境あるいは景観の形成に関わった可能性を示唆するものである。今後、このような環境あるいは景観が人間の生活環境に及ぼした影響、そして逆に人間の活動が環境あるいは景観の形成に与えた影響についても注意する必要がある。(岩越宏典)

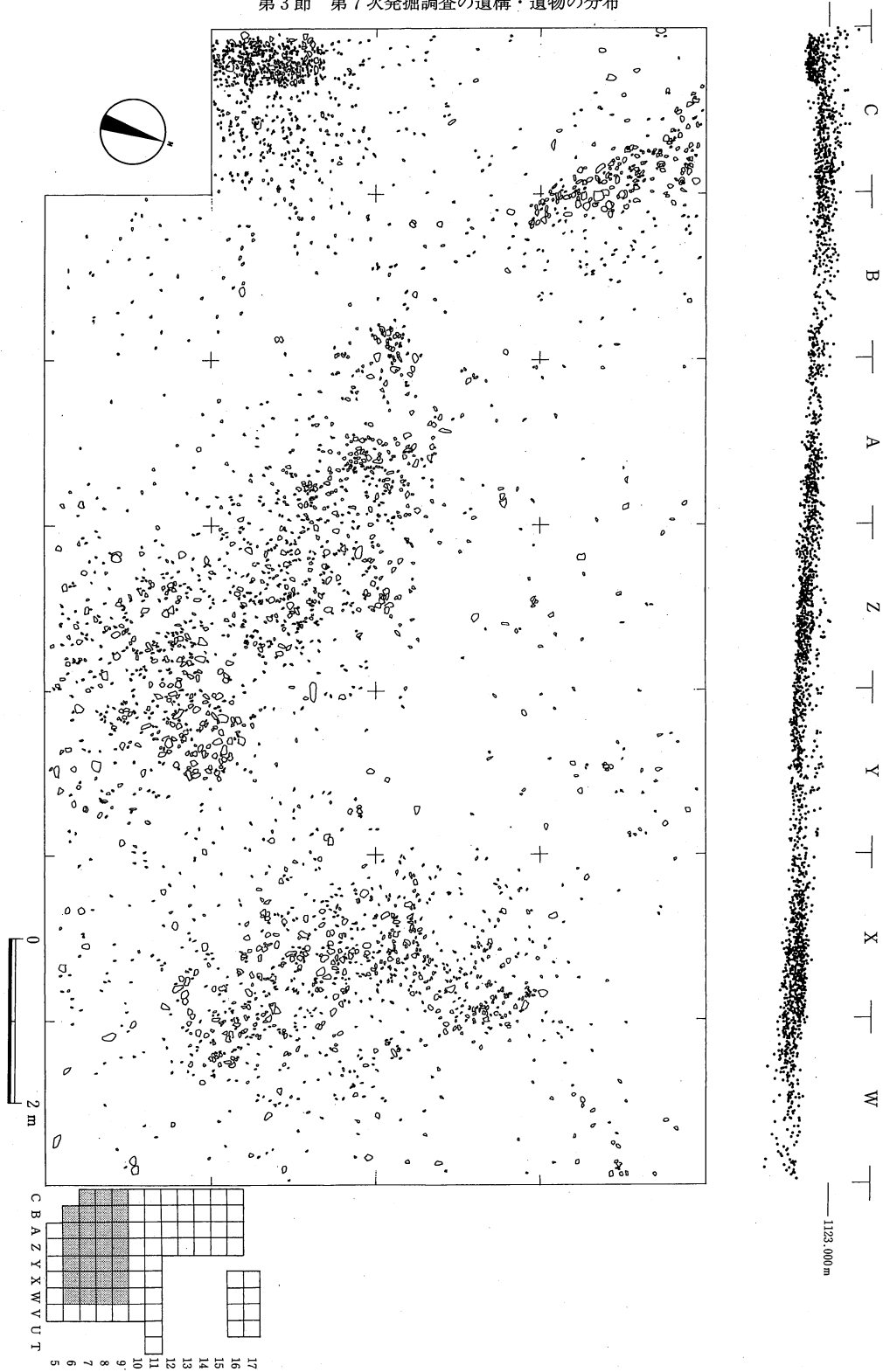
第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布

第7次発掘調査は、第1次調査、第2次調査、第3次調査と部分的に重複する区域、C-7~9区、A・B、W~Z-6~9区の計27グリッド、面積108m²を対象範囲とした。この結果、これまでに設定した発掘区について、A、W~Z-5、V-5~10、Y~T-11、U、W・X-16・17、V-17区を除く区域について、第VII層あるいは第VIII層まで精査を終了した。

今回の調査で検出した遺構と遺物との文化層の認定にあたっては、第1次調査から第6次調査の成果である柳又遺跡A地点における編年と各文化層の特徴を踏まえて、遺構・遺物の出土層位と垂直分布ならびに平面分布を検討して、各文化層の帰属を判断した。各文化層に帰属させた石器群に関しては、同時に母岩別資料分析を行って、それぞれの文化層への帰属の蓋然性を高めている。ここでは第7次発掘調査で検出された遺構と遺物の分布(第6~11図)について提示し、遺構や遺物の各文化層への帰属の経緯を記し、その概要をまとめる。さらに文化層の帰属を判断できない表面採集資料について提示し、所見を記す。そのうえで第III~V章に第7次発掘調査の成果に基づいて、各文化層毎に整理した出土資料の提示を行っている。また、第VI章以下に第1次調査から第7次調査までの成果をまとめ、各文化層毎に総括している。

今回の調査の結果、A・B、W~Z-6~9区は層序が安定しておらず、第VI層と第VII層の混在したような層位を呈していたが、第V層文化層の石器群の包含が確認された層位より下位、第VI層と第VII層の混在したような層位の上位で遺構・遺物を検出した。これらの中にはすでに第V層文化層の石器として報告されている削器と接合する資料(第13図11)や、第V層文化層の指標的な石器である細石刃なども含まれるが、同時にナイフ形石器のように明らかに第VI層L文化層に帰属する石器群が多数ある。これらの石器群の大部分は検出層位と石器の特徴から第VI層L文化層に帰属させ、その分布のまとまりは、A・Z・Y-6・7区の石器ブロック2

第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布



第6図 第7次調査における礫の出土状況(1/80)

とW・X-6～8区の石器ブロック3として把握した(第7図)。

また、後述するように今回の調査で検出された遺構である礫群は、いずれも第VI層L文化層に帰属する石器群の分布する層準よりも下位に位置しており、第VI層L文化層に帰属するもので、A・B-7・8区の第2号礫群、A、Y、Z-6～8区の第3号礫群と第4号礫群、W・X-6～8区の第5号礫群と第6号礫群として把握した(第6図)。

一方、C-7～9区では、特にC-9区付近において第4次調査で確認された第VII層文化層第1号礫群ならびに石器ブロック1の南側部分へのひろがりを示す礫や石器の分布がある(第6・7図)。ひろがり方は第4次調査報告に際しての推定したものと若干異なっているが注意される。また、C-7区付近では土壌の自然科学分析の資料採取に際して一部第IX層まで精査した箇所でも多数の礫や石器が検出されている。これらを第VII層文化層第3号礫群ならびに石器ブロック4として把握している(第6・7図)。

これらの遺構・遺物の分布は今回の調査区設定にあたって、これまでの発掘調査の成果を考慮して除外したA、W～Z-5、V-5～10区に向かってもひろがっており、今後課題を残すことになった。柳又遺跡A地点の調査は、第7次調査をもって一応の区切りとするが、これらの範囲にまで遺構・遺物の分布がひろがる可能性が判明していることを明記しておきたい。そしてまた、第VII層文化の石器ブロックはいずれもC-7～14区に位置し、すでに第4次調査報告(谷口・宮尾編 1994)で指摘されているように、すべて発掘区域外以東へとひろがりをもっている点には注意が必要である。

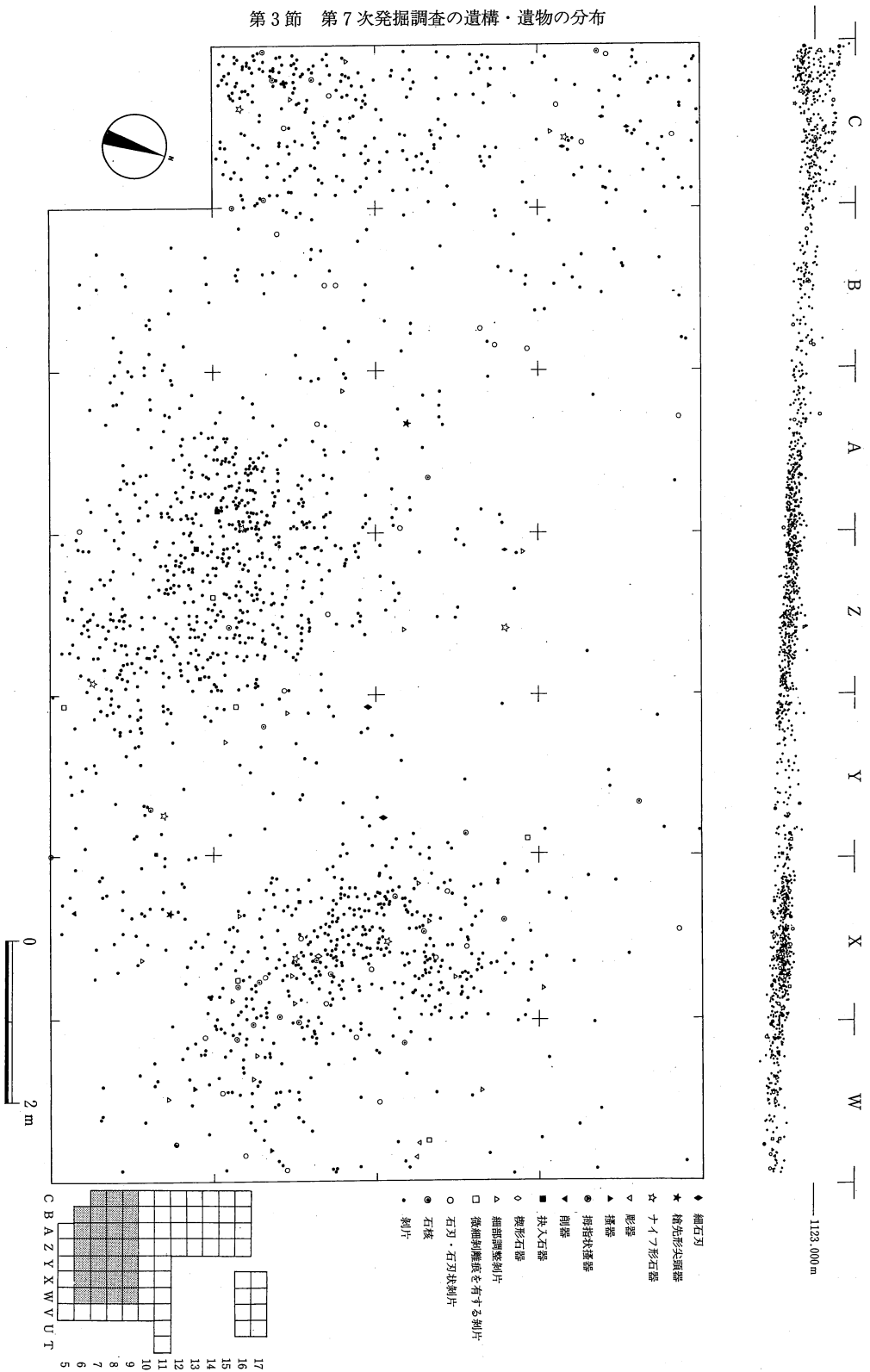
(1) 礫群の位置と検出層位

第7次発掘調査で出土した礫は3427点である。礫の分布は調査区ほぼ全域にわたっているが、W・X-6～8区、A、Y、Z-6～8区、A・B-7・8区、B・C-8・9区、C-7区にそれぞれまとまりをもつ礫群が把握された(第6図)。

W・X-6～8区、A、Y、Z-6～8区、A・B-7・8区にそれぞれまとまりをもつ礫群の出土層位は、いずれも基本層序として分層してある第VI層と第VII層の混在する層位の上位である(第9図)。

これらのうち、W・X-6～8区に関しては、第V層ないし第VI層上面まで発掘深度の達していた第3次調査において、第V層文化層の第2号礫群、第3号礫群が確認された区域(第8図)に該当し、後述するように第V層文化層の指標的な石器である細石刃などが出土した区域であり、当初は第V層文化層の第2号礫群、第3号礫群の一部と推測していた。しかし、整理分析の結果、第3次発掘調査で検出された第V層文化層の第2号礫群や第3号礫群と、今回検出されたW・X-6～8区の礫群に挟まれるように石器群の分布の集中が存在し、これらの石器群が第VI層L文化層に特徴的なナイフ形石器を含むことが判明した(第6～8図)。このように第VI層L文化層の石器群の分布のまとまりの下位に存在するW・X-6～8区の礫群を、第

第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布



第7図 第7次調査における石器の出土状況(1/80)

V層文化層の第2号礫群や第3号礫群と区別し、第VI層L文化層に帰属する礫群と判断した。なお、W・X-6～8区の礫群は構成礫の石材と接合状況とから第5号礫群と第6号礫群の2基に分けられる。

また、A、Y、Z-6～8区とA・B-7・8区にそれぞれまとまりを有する礫群についても、出土層位とW・X-6～8区にまとまりをもつ礫群との構成礫の接合状況から、第VI層L文化層に帰属する礫群と判断される。なお、A、Y、Z-6～8区にまとまりを有する礫群に関しては、構成礫の石材と接合状況とから第3号礫群と第4号礫群の2基に分けられる。そして、A・B-7・8区の礫群は第2号礫群とした。

一方、B・C-8・9区、C-7区にそれぞれまとまりを有する礫群の出土層位は、第VI層下部から第VII層上部にかけてのやや広範にわたる(第9図)。

B・C-8・9区にまとまりを有する礫群に関しては、第4次調査において確認された第VII層文化層第1号礫群の南東部延長に位置し、出土層位も一致することから第VII層文化層第1号礫群の一部と判断し、第7次調査の報告にあたって、第4次調査で報告してある範囲と一体化させて報告する。なお、第VII層文化層第1号礫群の南東部のひろがり方は、第4次調査報告において推定した環状にはならず直線的なひろがり方を示している。

C-7区にまとまりを有する礫群は、土壌の自然科学分析の資料採取に際して一部第IX層まで精査した箇所特に集中した礫群で、構成礫の石材や接合状況を見るとむしろ第VI層L文化層の礫群との関係も示唆されるが、文化層の異なる礫群間にまたがる構成礫の接合については、すでに第4次調査報告でも明らかであり、出土層位を重視して第VII層文化層の礫群と判断した。

(2) 石器ブロックの位置と検出層位

第7次発掘調査で出土した剥片・破片を含む石器は1679点である。剥片・破片を含む石器群の分布は、W・X-6～8区、A・Z・Y-6・7区、B・C-8・9区、C-7区にそれぞれ集中したまとまりが把握された(第7図)。

W・X-6～8区、A・Z・Y-6・7区に分布する石器群の検出層位は、A・B、W～Z-6～9区の層序は安定しておらず、いずれも基本層序として分層してある第VI層と第VII層の混在する層位の上位であるが、第V層文化層の石器群の包含が確認された層位より相対的に下位に該当する。

これらの中にはすでに第V層文化層の石器として報告されている削器と接合する資料(第13図11)や第V層文化層の指標的な石器である細石刃なども含まれるが、同時にナイフ形石器のように明らかに第VI層L文化層に帰属する石器群が多数ある。

これらの石器群について、第2次調査、第3次調査で検出された第V層文化層の石器群の分布を参照すると、第7次調査で検出されたナイフ形石器を含む石器群の分布は、第V層文化層の石器群の分布とは異なることが理解される(第7・8図)。また、第2次調査、第3次調査で

検出された石器群とともに垂直分布のまとまりを西面投影してみた場合、北面投影では判然としない第2次調査、第3次調査で検出された第V層文化層の石器群のまとまりと、第7次調査で検出された第VI層L文化層に特徴的なナイフ形石器を含む石器群のまとまりとの間に若干の間層が認められる(第11図)。そして、第7次調査において検出された第V層文化層に特徴的な石器は、西面に投影した石器群の垂直分布のうえでは第2次調査、第3次調査で検出された第V層文化層の石器群のまとまりに含まれることが理解される。

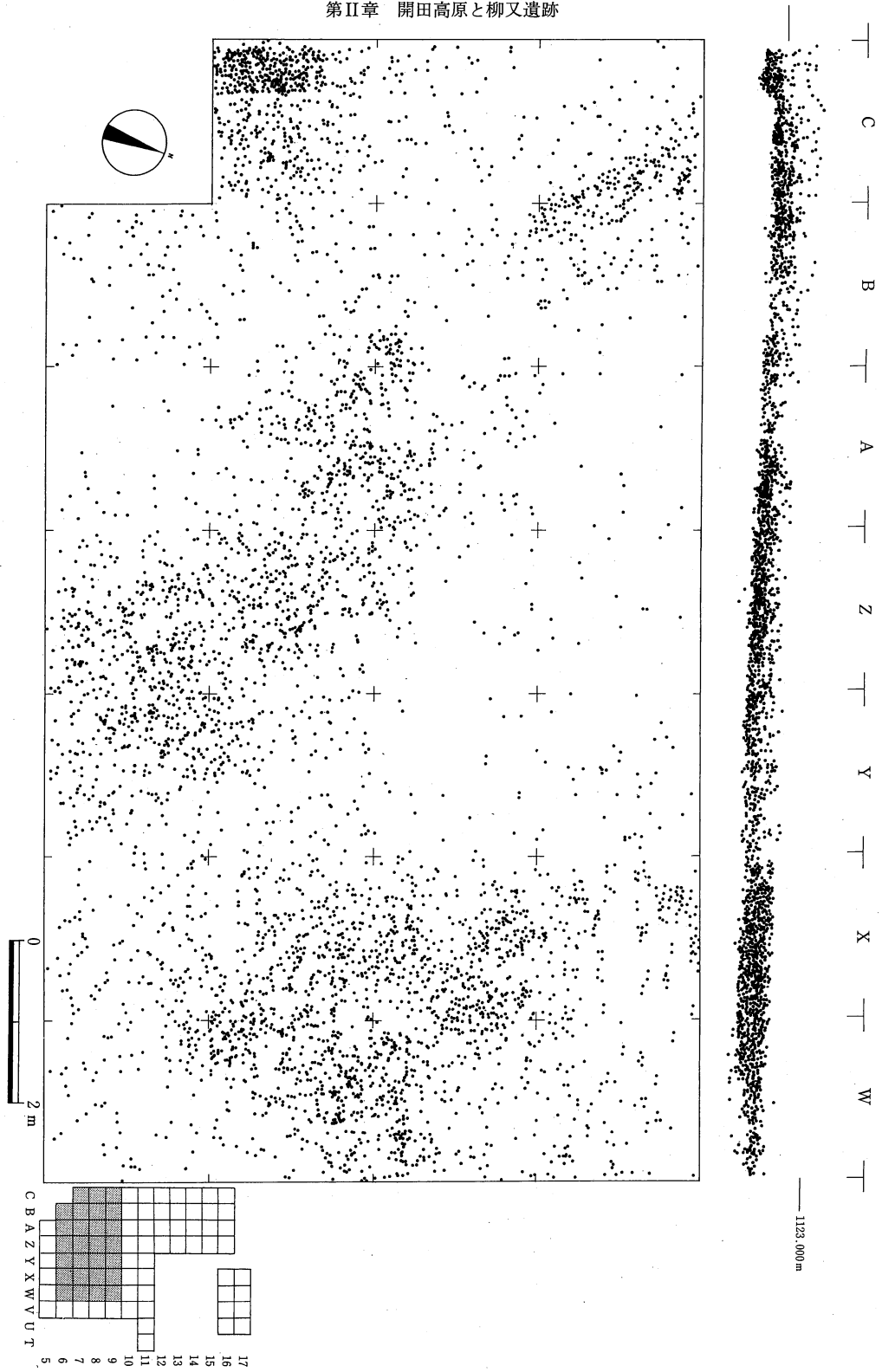
以上のような石器群の垂直分布のまとまりを重視し、第2次調査、第3次調査で検出された第V層文化層の石器群のまとまりに含まれる第7次調査で検出された石器群は第V層文化層に帰属するものと判断し、間層を挟んで下位に分布する石器群のまとまりを第VI層L文化層に帰属するものと判断した。なお、このようにして第V層文化層の石器群のまとまりに含まれた石器の中には、特にX・W-8区で検出された大形の石刃のように、これまでに第V層文化層の石器群で認められていないものもあるが、石器群の垂直分布上のまとまりを重視し、第V層文化層に帰属するものと判断した。

また、第VI層L文化層に帰属する石器群については、平面的な分布のまとまりから、A・Z・Y-6・7区を石器ブロック2と、W・X-6~8区を石器ブロック3とした。これらの第VI層L文化層の石器ブロックは、それぞれ当該文化層に帰属する前述の礫群と重複するように存在する。すなわち、石器ブロック2は第3号礫群と第4号礫群とを覆うように分布する石器群のまとまりであり、石器ブロック3は第5号礫群と第6号礫群とを覆うように分布する石器群のまとまりである。このような第VI層L文化層における石器ブロックと礫群の有機的な関係は、A・B、Z-10~14区で確認されている石器ブロック1と第1号礫群との間でも指摘(小林・谷口編 1992)されており注意される。

一方、B・C-8・9区、C-7区にそれぞれ集中したまとまりが把握された石器群の出土層位は、第VI層下部から第VII層上部にかけてのやや広範にわたる。

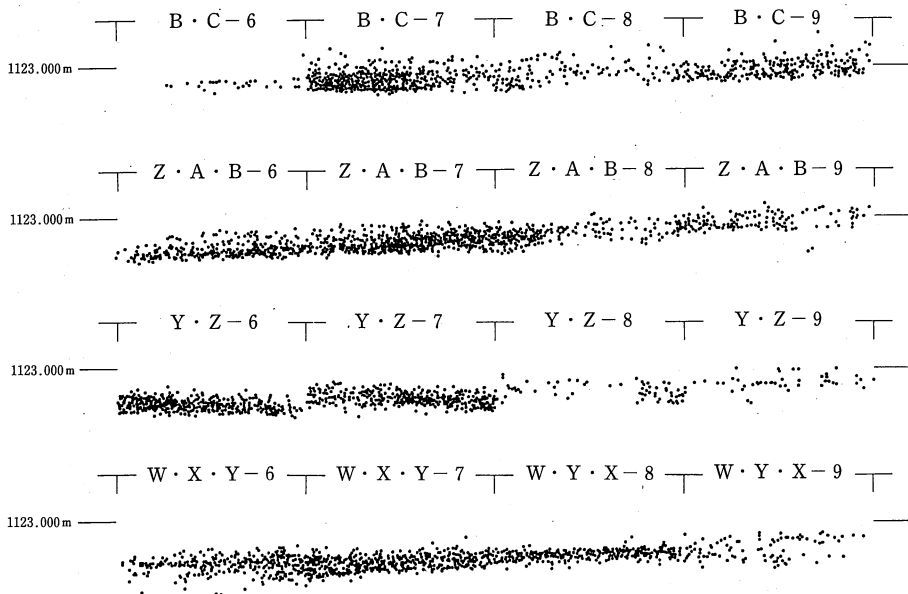
B・C-8・9区にまとまりを有する石器群の分布は、すでに触れた第VII層文化層第1号礫群と同様に第4次調査において確認された第VII層文化層石器ブロック1の南側に位置し、出土層位も一致することから第VII層文化層石器ブロック1の一部と判断し、第7次調査の報告にあたって、第4次調査で報告してある範囲と一体化させて報告する。しかし、第4次調査で確認したC-10・11区を中心とした部分に比して、B・C-8・9区の石器群の分布はまばらであり、石器器種の組成や石器石材の組成が貧弱であることが注意される。

そして、土壌の自然科学分析の資料採取に際して一部第IX層まで精査した箇所を中心に分布するC-7区にまとまりを有する石器群の分布についても出土層位を重視して、第VII層文化層に帰属するものと判断し、新たに石器ブロック4として把握した。石器ブロック4もまた、石器ブロック1のB・C-8・9区部分と同様に石器器種の組成や石器石材の組成が貧弱であり、

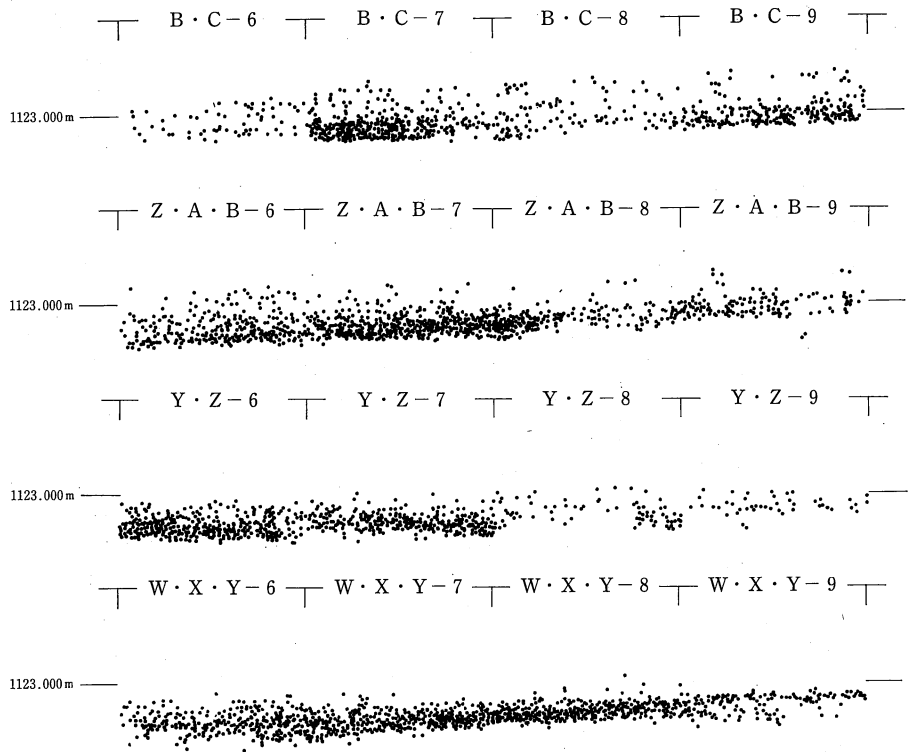


第8図 第1～3・7次調査における礫の出土状況(1/80)

第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布



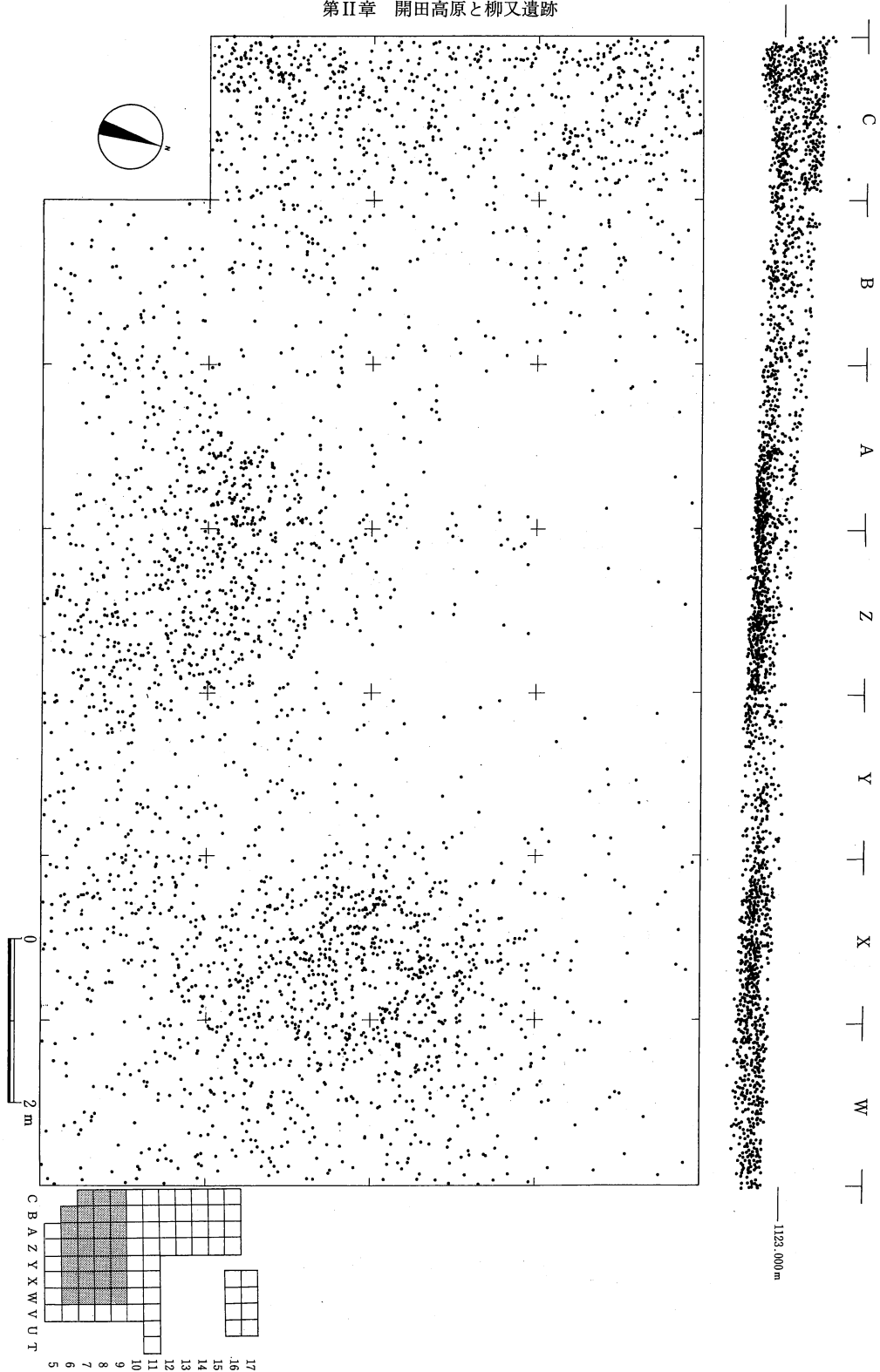
第7次発掘調査の礫



第1～3・7次発掘調査の礫

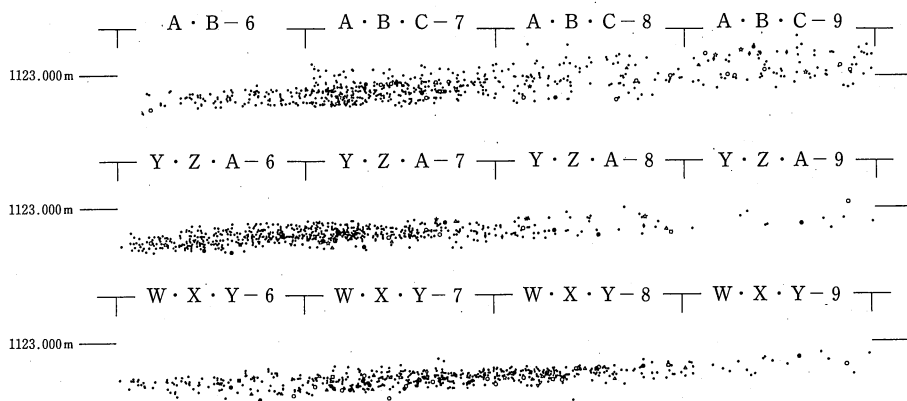


第9図 第1～3・7次調査における礫の出土状況(1/80)

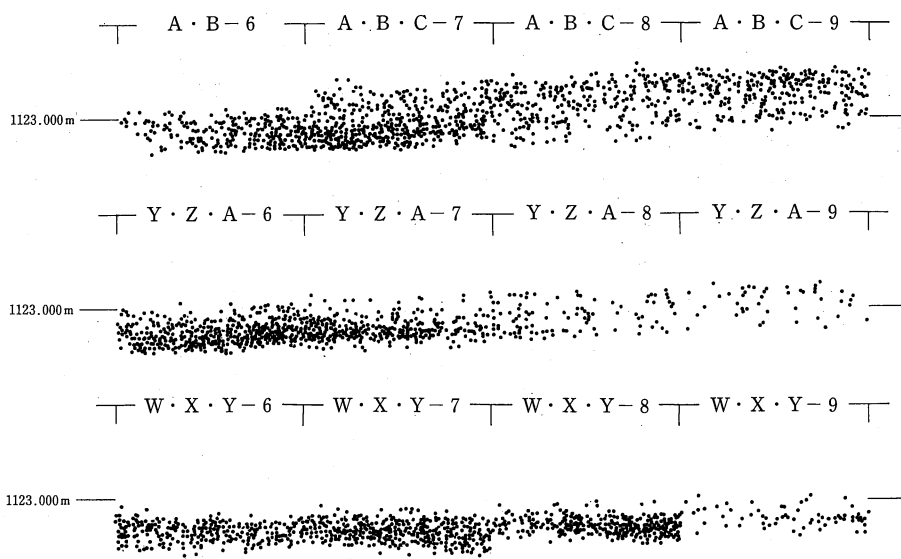


第10図 第1～3・7次調査における石器の出土状況(1/80)

第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布



第7次発掘調査の石器



第1～3・7次発掘調査の石器



第11図 第1～3・7次調査における石器の出土状況(1/80)

第VII層文化層の石器群については、第7次調査の成果は乏しい観がある。

なお、これらの第VII層文化層の石器ブロックもまた、第VI層L文化層の石器ブロック同様に当該文化層に帰属する礫群とそれぞれ重複するような位置で形成されることが特徴的である。なお、これらの第VII層文化層の石器ブロックもまた、第VI層L文化層の石器ブロック同様に当該文化層に帰属する礫群とそれぞれ重複するような位置で形成されることが特徴的である。すなわち、石器ブロック1と第1号礫群、石器ブロック4と第3号礫群の関係である。しかしながら両文化層の石器ブロックと礫群の関係には相違も認められる。

第VI層L文化層の石器ブロックそれぞれは、小規模な礫群を2基つつ覆うように石器群が分

布しているために、それぞれの石器ブロックは礫群に対して、ほぼ同規模・同形状に形成されている状況が読み取れ、また、相対的に上位に位置しているといえる。一方、第VII層文化層の石器群と礫群とは、ほぼ同位で検出される傾向があり、また規模や形状も異なる。ただし、礫群を構成する大形の礫に着目すると、それらは石器群の下位に集中しており、このような大形の礫を基軸に判断すれば、相対的に石器ブロックが礫群の上位に形成されているといえよう。

(千葉博俊)

(3) 表面採集資料

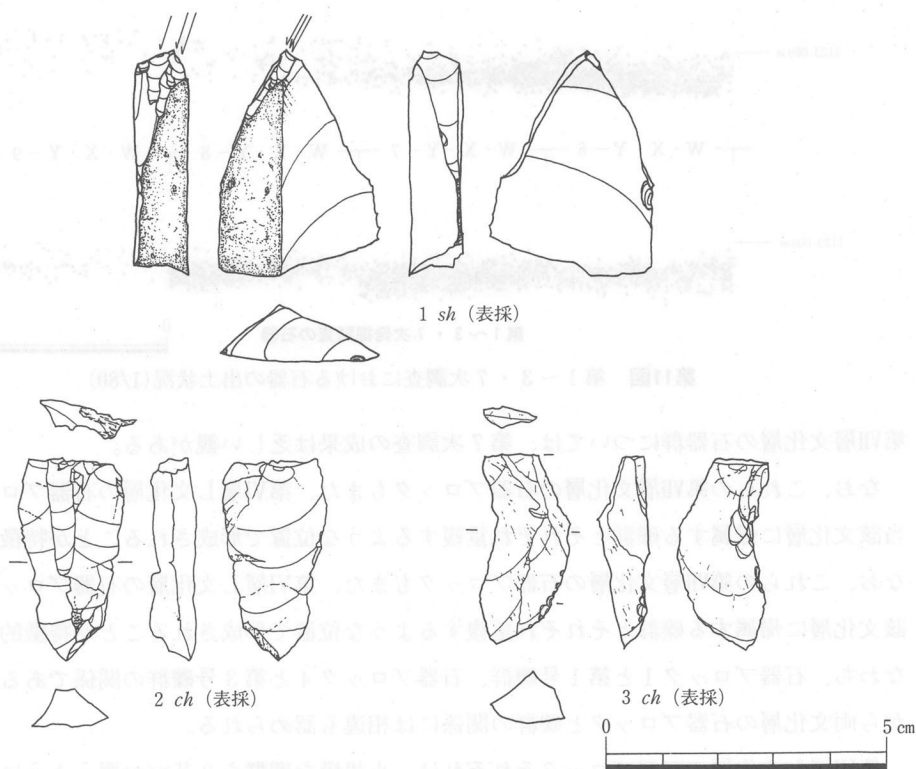
第7次調査で表面採集された資料31点のうち、石器器種を認定した3点について、文化層の帰属を判断する根拠がないため、ここに項を設けて報告し、参考に資することにする。

彫器 (第12図1) 背面に原礫面を残す厚手の石刃状剥片の折断した下端部を素材とする。素材石刃端部に施された樋状剥離面から交叉するように彫刀面が作出される。珪質頁岩製。

石刃 (第12図2) 打面は節理に沿って剥離した平坦な単剥離面で打面調整はないものの微細な頭部調整が見られる。背面の剥離面はいずれも本石刃と同一方向の剥離である。チャート製。

細部調整剥片 (第12図3) 縦長剥片の背面右側縁と腹面右側縁の一部に連続的な比較的平坦な剥離が施されている。剥片の打面は平坦な単剥離面で打面調整や頭部調整は認められない。剥片端部はヒンジフラクチャー状を呈する。チャート製。

(笠井洋祐)



第12図 第7次発掘調査資料 表採の石器 彫器、石刃、細部調整剥片 (3/4)

第3節 第7次発掘調査の遺構・遺物の分布

表1 第7次発掘調査資料石器器種別石材別点数

単位=点

文化層	器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	珪質 頁岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	ホルン フェルス	黒色緻密 安山岩	総計
第V層 文化層	石核	8	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	石刃・石刃状剥片	7	0	1	0	0	0	0	0	0	8
	細石刃	0	5	2	0	0	0	0	0	0	7
	細部調整剥片	6	0	1	0	0	0	0	0	0	7
	微細剥離痕を有する剥片	2	0	0	1	0	0	0	0	0	3
	槍先形尖頭器	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	彫器	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	削器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	搔器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	抉入石器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	彫器抉入石器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
剥片・碎片	308	3	16	1	3	3	0	0	0	334	
文化層計		332	9	24	2	3	3	0	0	1	374
第VI層 L文化層	石刃・石刃状剥片	14	2	2	0	0	0	0	0	0	18
	細部調整剥片	12	4	0	0	0	0	0	0	0	16
	石核	12	0	0	0	0	0	0	0	0	12
	ナイフ形石器	4	4	0	0	0	0	0	0	0	8
	微細剥離痕を有する剥片	4	4	0	0	0	0	0	0	0	8
	抉入石器	3	2	0	0	0	0	0	0	0	5
	搔器	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	楔形石器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	拇指状搔器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	剥片・碎片	801	111	11	2	0	1	0	0	0	926
文化層計		851	129	13	2	0	1	0	0	996	
第VII層 文化層	石刃・石刃状剥片	6	0	1	0	0	0	0	0	0	7
	石核	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	ナイフ形石器	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	細部調整剥片	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	搔器	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	剥片・碎片	256	3	18	12	0	0	1	2	0	292
文化層計		271	3	20	12	0	0	1	2	0	309
総計		1454	141	57	16	3	4	1	2	1	1679

第II章 開田高原と柳又遺跡

表2 第7次発掘調査資料石器器種別石材別重量

単位 = g

文化層	器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	珪質 頁岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	ホルン フェルス	黒色緻密 安山岩	総計
第V層 文化層	石核	320.44	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	320.44
	石刃・石刃状剥片	27.86	0.00	3.99	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	31.85
	細石刃	0.00	1.28	0.42	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.70
	細部調整剥片	62.06	0.00	5.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	67.12
	微細剥離痕を有する剥片	84.45	0.00	0.00	5.27	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	89.72
	槍先形尖頭器	0.00	0.00	3.53	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3.53
	彫器	41.52	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	41.52
	削器	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	47.30	47.3
	搔器	0.00	9.27	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	9.27
	挟入石器	0.00	0.00	18.74	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	18.74
	彫器挟入石器	0.00	0.00	64.83	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	64.83
剥片・破片	1348.85	11.92	7.68	0.22	13.54	2.12	0.00	0.00	0.00	1384.33	
文化層計	1885.18	22.47	104.25	5.49	13.54	2.12	0.00	0.00	47.30	2080.35	
第VI層 L文化層	石刃・石刃状剥片	171.00	10.76	22.87	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	204.63
	細部調整剥片	190.93	21.87	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	212.80
	石核	627.08	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	627.08
	ナイフ形石器	8.31	8.75	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	17.06
	微細剥離痕を有する剥片	34.85	4.41	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	39.26
	挟入石器	24.17	3.48	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	27.65
	搔器	22.60	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	22.60
	楔形石器	0.00	8.24	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	8.24
	拇指状搔器	0.00	1.24	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.24
	剥片・破片	3242.68	68.21	9.57	0.09	0.00	0.60	0.00	0.00	0.00	3321.15
文化層計	4321.62	126.96	32.44	0.09	0	0.60	0	0	0	4481.71	
第VII層 文化層	石刃・石刃状剥片	50.40	0.00	1.64	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	52.04
	石核	143.66	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	143.66
	ナイフ形石器	2.52	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.52
	細部調整剥片	22.92	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	22.92
	搔器	0.00	0.00	15.80	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	15.80
	剥片・破片	621.28	4.33	30.66	2.82	0.00	0.00	0.18	5.12	0.00	664.39
文化層計	840.78	4.33	48.10	2.82	0.00	0.00	0.18	5.12	0.00	901.33	
総計	7047.58	153.76	184.79	8.40	13.54	2.72	0.18	5.12	47.30	7463.39	

第Ⅲ章 第Ⅴ層文化層

第1節 概要

第Ⅴ層文化層はソフトロームの第Ⅴ層中に包含された細石刃を主体とする文化層であり、特に第Ⅴ層の精査に主眼のあった第1次調査、第2次調査、第3次調査の成果に基づいて具体的な内容が論じられている。第7次調査の発掘区C-7~9区、A・B、W~Z-6~9区は、第1次調査、第2次調査、第3次調査の発掘区と重複しており、すでに包含層位の調査を終了しているため、今回の調査での第Ⅴ層文化層に関わる成果は、わずかな資料の追加にとどまる。また、礫群や配石などの遺構も確認されていない。

第7次調査で新たに追加された資料は、石器40点、剥片・碎片334点、礫1305点、合計1679点である。石器の内訳は、稜付の細石刃1点を含む細石刃7点、槍先形尖頭器2点、搔器1点、削器1点、彫器1点、彫器挟入石器1点、挟入石器2点、細部調整剥片7点、微細剥離痕を有する剥片3点、石刃・石刃状剥片8点、石核8点である。

これらの資料は、出土層位では第Ⅵ層L文化層の石器群と同じであるが、第Ⅴ層文化層の主体をなす細石刃を含む点に注意し、第1次調査、第2次調査、第3次調査の出土資料とともに検討した平面分布と垂直分布とに見られる第Ⅴ層文化層の石器群のまとめりと、第Ⅵ層L文化層の石器群のまとめりととの相違に基づいて分離したもので、同時に母岩別資料分析によって蓋然性を高めている。母岩別資料はこれまでに報告されている6つの母岩別資料に新たな接合資料を追加したほかに、7つの母岩別資料を新たに追加している。

なお、今回の調査では、細石刃剥離工程に関わる新たな資料は追加されていない。また、これまでに指摘されているように本遺跡では削片系細石刃石核が存在する一方で、荒屋型彫器は欠落しているが、第7次調査を終え依然として欠落したままである。

ところで今回の調査成果の中で、W・X-8区から出土した大形の石刃を素材とするチャート製彫器1点、玻璃質安山岩製彫器挟入石器1点、玻璃質安山岩製挟入石器1点は注意を要する石器であろう。これまでの調査でこのような大形の石刃を素材とする石器は、第Ⅴ層文化層の石器群には含まれておらず、むしろ第Ⅳ層文化層の石器群に見られる特徴である。しかしながら、第Ⅳ層文化層の石器群が珪質頁岩を主要石材とするのに対して、今回発見された石器の使用石材はチャートや玻璃質安山岩であり、また、これらの石器は観察所見のうえで素材石刃の剥離にあたって打面調整や頭部調整がわずかにしか認められず、その打面が大きいという特徴があり、打面調整や頭部調整が顕著に見られ打面の小さな第Ⅳ層文化層の大形石刃とは、剥離技術上大きく異なっているため、第Ⅳ層文化層の大形石刃とは異なる石刃と判断した。そのう

えて、これらの石器の検出層位を再度検討し、これまで確認されている第V層文化層の石器群の下位に位置することから第V層文化層に帰属するものと判断した。

なお、第V層文化層に帰属する礫1305点については、それらがすべて微細な礫碎片であるうえに明確な分布のまとまりを持たない、すなわち礫群として把握できないものであったので、今回の報告では特に分析をしていない。(後藤希久子)

第2節 石器

第7次調査の結果、第V層文化層に帰属する資料として石器40点、剥片・碎片334点の合計374点が新たに追加された。本節における資料点数および提示資料は、第7次調査における検出資料のみに限定している。

(1) 石器器種組成と石器石材

石器器種組成

第7次調査の結果、第V層文化層に帰属する資料として石器40点、剥片・碎片334点の合計374点が新たに追加された。石器の器種別内訳は、細石刃7点、槍先形尖頭器2点、搔器1点、削器1点、彫器1点、彫器挟入石器1点、挟入石器2点、細部調整剥片7点、微細剥離痕を有する剥片2点、石刃・石刃状剥片7点、石核8点となっている(表1・2)。

これまでの調査で第V層文化層は細石刃を主体とする石器群と考えられているが、今回の発掘区は第2次調査や第3次調査の発掘区と重複し、すでに本来的な遺物包含層の調査が終了しているためにわずかな資料の追加にとどまっている。なお、細石刃剥離工程に関わる資料の追加はなく、細石刃自体が7点出土しているに過ぎない。また、荒屋型彫器は依然として欠落したままである。その中でW・X-8区から出土した大形の石刃を素材とする彫器、彫器挟入石器、挟入石器、各1点が特筆される。これまでの調査でこのような大形の石刃を素材とする石器は、第V層文化層の石器群には含まれておらず、むしろ第IV層文化層の石器群に見られる特徴である。

これらの石器については、石器器種組成の点からこれまでに第V層文化層に帰属する石器群の中ではわずかな点数しか確認されていない彫器である点で注意される。たしかに第IV層文化層の石器群でも大形石刃を素材として彫器が作られているが、それらが大形石刃を折って、二ないし三分割した断面に彫刀面を設けるのに対して、今回の調査で出土した彫器は、いずれも大形の石刃の端部に彫刀面を設ける点で相違する。

大きさを無視した場合、今回出土した彫器のうち1点は、挟入石器と複合する点で特徴的である。そして、残るもう1点の挟入石器とともに、これまで第V層文化層では確認されていない石刃素材という点で異彩を放っている。しかしながら、素材石刃の剥離技術に注目した場合、

第2節 石器

今回発見されたこれらの大形石刃には打面調整や頭部調整がほとんど認められないこと、その打面が大きいことが、打面調整や頭部調整が顕著に見られ、かつ打面の小さな第IV層文化層の大形石刃とは大きく異なる。これらは点数のうえでわずかではあるが、後述する石器石材や出土状態と合わせて、第V層文化層に帰属するものと判断している。

石器石材

今回新たに追加された石器の石材別内訳では、チャートが332点と最も多く、玻璃質安山岩24点、黒曜石9点と続く。石器器種と照らしてみた場合、細石刃は黒曜石製5点、玻璃質安山岩製2点、槍先形尖頭器は玻璃質安山岩製2点、搔器1点は黒曜石製、削器1点は黒色緻密安山岩製、彫器1点はチャート製、彫器挟入石器1点は玻璃質安山岩製、挟入石器は玻璃質安山岩製1点、チャート製1点、細部調整剥片はチャート製5点、黒曜石製1点、玻璃質安山岩製1点、微細剥離痕を有する剥片は珪質頁岩製1点、チャート製1点、石刃・石刃状剥片、石核はすべてチャート製である(表1・2)。

当該文化層における石器の使用石材に関して、過去の調査報告でも述べられているように(永峯・谷口編 1993、谷口・宮尾編 1995、永峯・宮尾編 1996)、石器石材と石器器種には一定の相関関係が認められ、今回の調査で検出された石器群でも同様の傾向が窺える。ところで石器器種組成で注意した大形の石刃を素材とするそれぞれ1点を数える彫器、彫器挟入石器、挟入石器は、石器石材のうえではチャート製1点と玻璃質安山岩製2点とから構成され、第V層文化層で一般的といえる。これらに対して、文化層の帰属を巡って候補に挙がった第IV層文化層の大形石刃を主体とする石器群が珪質頁岩を多用していることから、石材選択の面からも第V層文化層に、これらの石器を帰属することは妥当であろう。(笠井洋祐)

(2) 石器

ここでは石器39点を提示し、器種別に記述する。本文中の石器番号は図中の文化層別の通し番号であり、石器それぞれの各種計測値は巻末にまとめた出土グリッド登録番号順に配列した石器計測一覧を参照されたい。

細石刃 (第13図1～7)

細石刃は7点出土した。石材別内訳は黒曜石製5点、玻璃質安山岩製2点である。7点のうち完形例はなく、すべて意図的な折断加工が認められる。これらについて第3次調査(永峯・谷口編 1993)で提示された基準に従い部位を分類した。1～3は頭部、4～7は末端部である。折断方向は7のみ腹面→背面で、ほかはすべて背面→腹面である。4は正面右側縁に連続的な微細な剥離がみられる。また7は稜付の細石刃である。

槍先形尖頭器 (第13図8・9)

槍先形尖頭器は2点出土した。石材は共に玻璃質安山岩製である。

8は基部を折損している。裏面の調整は比較的細かい調整が施されているが、背面の調整は

大きな剝離面が残されており、横断面形も三角形状を呈している。先端部には右上から裏面方向に小さな種状剝離が見られる。9は縦長剝片を素材とし、打面を基部に残置している。先端部は折損している。背面の調整は大きな剝離が施されるのみで、素材の一部が残され、裏面の調整は周縁部に施されている。

搔器 (第13図10)

黒曜石製のものが1点出土。縦長剝片を折断し、その折断部と端部とに急斜度調整した複刃搔器である。刃部は正面観が弧状を呈するが、端部側に比べて折断部に作られた刃部の方が広い。側縁部の調整は右側縁の一部に施されているのみである。

削器 (第13図11)

削器は黒色緻密安山岩製の大型の縦長剝片を素材としたもの1点がある。上半部分と下半部分とに割れていた資料が接合したもので、下半部分は第3次調査において既に報告されている資料(永峯・谷口編 1993)である。調整は左右二側縁に急斜度の刃部を作出している。素材の背面を構成する剝離面は求心的であり、一部原礫面が残されている。打面は左横方向からの単剝離面打面である。

彫器 (第15図14)

彫器にはチャート製のもの1点(14)の他に、事項に分けた抉入石器と複合した玻璃質安山岩製のもの1点(12)が出土した。チャート製の14は大型の石刃を素材とし、端部に彫刀面が設けられている。腹面側へ断ち割るように加撃した面を彫刀面作出の打面とし、背面側へ一条の種状剝離をなして、彫刀面とする(図版26-49)。彫刀面には素材石刃背面の稜から調整が施されており、結果断面形が素材石刃の背面の稜へ向かってより鋭利になっている。なお、素材石刃の背面を構成する3枚の剝離面は、いずれも主要剝離面と同方向からの剝離を示している。また石刃剝離は、比較的ひろい背面側からの加撃で作られた複剝離面打面によるが、打面調整や頭部調整は認められない。

彫器抉入石器 (第13図12)

玻璃質安山岩製の大型石刃を素材とし、端部に彫刀面が設けられている。彫刻刀面は背面を構成する剝離面から腹面へと抜ける一条の種状剝離である。素材石刃のほぼ対向する両側縁に急斜度の調整が施されて抉入部をなす。抉入部は、素材石刃背面から見て右側縁では深く1か所あり、左側縁では深いものと浅いものと2か所ある。素材石刃両側縁の深い抉入部の対向する範囲では、調整剝離の稜と背面を構成する剝離を稜とが、肉眼でも明確に分かるほど摩耗しており(図版26-49)、石器の使われ方と関わって注意される。なお、素材石刃の背面を構成する剝離面は、いずれも主要剝離面と同じ方向からの剝離である。また、石刃剝離の複剝離面打面にはわずかに打面調整が認められるが、打面自体が分厚い。

挟入石器（第13図12・13、第16図22）

挟入石器は彫器と複合する1点（12）を含めて3点出土した。玻璃質安山岩製2点（12・13）は、いずれも大形の石刃を素材とする点で異色である。残る1点（22）はチャート製である。

13は素材石刃の端部側下半が背面→腹面方向に折断して失われている。彫器と複合する12に比べ若干小形ともいえるが石材が共通する。12と同様に素材石刃のほぼ対向する左右両側縁に急斜度の調整で挟入部が作出されている。素材石刃の端部側下半が欠落しているため判然としないが、素材石刃背面から見た右側縁の挟入部は浅く欠落した端部側へと続くようで12の素材石刃背面から見た左側縁とよく形態が似ている点が注意される。挟入部の調整剥離の稜は明瞭に摩耗している。また12ほどは明瞭ではないが素材石刃両側縁の挟入部の対向する範囲では、素材石刃の背面を構成する剥離面の稜も摩耗している。なお、素材石刃の背面を構成する剥離面は対向する上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。13の素材石刃の打面は複剥離面打面であるが、打面調整や頭部調整は認められない。

22はチャート製の縦長剥片を素材とする。端部側下半部は腹面→背面方向に、素材剥片背面から見た右側縁は節理に沿って折損している。左側縁に小さく挟入部を作出している。背面を構成する剥離面は主要剥離面と同方向からの剥離を示す。打面は単剥離面打面である。母岩別資料16に属する。

細部調整剥片（第15図15～18・20・21、第16図23）

細部調整剥片は、チャート製5点、黒曜石製1点、玻璃質安山岩製1点の合計7点出土した。

15はチャート製の幅広の剥片である。右側縁に連続的な微細な細部調整が施されている。打面は右横方向からの単剥離面打面で、微細な頭部調整が観察される。

16はチャート製の縦長剥片である。右側縁から末端部にかけて微細な細部調整が施されている。打面は複剥離面打面であり、打面調整が並列に施されている。

17はチャート製の石刃状剥片で、上部と下部がいずれも背面→腹面方向に折断されている。細部調整は右側縁に連続的に施されているが、上部と下部が折断されているためどの程度の範囲にまで調整が行われていたかは明らかではない。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。

18はチャート製の石刃で、下部が腹面→背面方向に折断されている。背面には原礫面が残されている。右側縁から末端にかけて斜めに微細な細部調整が連続的に施されている。打面は背面方向からの単剥離面打面である。

20はチャート製の小形の縦長剥片で、上部は背面方向から折損している。断面形状が三角形を呈する稜のたった剥片である。背面を構成する剥離面は対向する上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。細部調整は正面上部の稜上から連続的に施されている。

21は玻璃質安山岩製の石刃で、上半部は細部調整の後に背面→腹面方向に折断されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離を示している。細部調整は右側縁はまず断続的に背面に施され、引き続き腹面にも断続的に施されている。左側縁は腹面のみ調整であるが、連続的に施されている。腹面への調整は槍先形尖頭器状の平坦剥離である。そのため、槍先形尖頭器と関連する資料である可能性がある。

23はチャート製の幅広の分厚い剥片を素材とする。細部調整は下端から右側縁の下半部にかけて腹面→背面方向に連続的に施されている。打面は原礫面を利用している。母岩別資料18に属する。

微細剥離痕を有する剥片 (第15図19、第16図24)

微細剥離痕を有する剥片は、珪質頁岩製1点、チャート製1点の合計2点出土した。

19は珪質頁岩の石刃を素材としている。上半部は腹面→背面方向に、下部は背面→腹面方向に折断している。背面を構成する縁辺に沿った剥離面は正面右側縁下部を除き、いずれも腹面と同じ方向からの剥離によるものである。正面右側縁には断絶的ではあるが微細な剥離痕が見られる。

24はチャート製の不定形剥片である。左側縁には背面→腹面方向に断続的ではあるが微細剥離痕が観察される。母岩別資料18に属する。

石刃・石刃状剥片 (第17図25～31)

長さが幅の2倍以上で二側縁がほぼ平行する定型的な縦長剥片で、同一方向あるいは対向する平行な剥離によって背面に側縁と平行する数条の稜が残されているものを石刃と定義し、剥離方向が不定のものや折断もしくは折損した部分的なものを石刃状剥片とする。石刃・石刃状剥片は合計7点出土した。石材別内訳はチャート製6点、玻璃質安山岩製1点である。

25はチャート製の石刃状剥片で、下半部は腹面→背面方向に折損している。背面の左側縁は節理面となっている。打面は右側縁方向からの単剥離面打面である。

26はチャート製の石刃である。背面を構成する面は、縁辺と平行する中央の稜によって構成される2面からなっている。打面は右側縁方向からの単剥離面打面である。

27は玻璃質安山岩製の石刃で、下部は背面→腹面方向に折損している。背面を構成する面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は背面方向からの単剥離面打面である。

28はチャート製の石刃状剥片で、上半部と下半部で折断され、それが接合している。背面を構成する剥離面は、対向する上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。また両側縁には原礫面が残されており、板状の石核であったと予想される。打面は左横方向からの単剥離面打面である。

29・30・31はそれぞれチャート製の石刃状剥片である。29・31は下部が背面→腹面方向に、

第2節 石器

30は腹面→背面方向に折断されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ方向からの剥離によるものである。打面は29は節理面、30は左横方向からの単剥離面打面、31は背面方向からの単剥離面打面である。

石核（第17図～第20図32～39）

石核は8点出土した。石材はすべてチャート製である。

32はチャート製の単設打面石核である。打面は原礫面である。図上の正面から右側縁にかけてを作業面としている。

33はチャート製の複設打面石核である。下面、左右両側面には大きく原礫面が残る。上面は節理面である。作業面は正面と裏面に位置し、正面の剥離面から90°打面転位が行われていることがわかる。母岩別資料5に属する。

34はチャート製の単設打面石核である。正面を作業面とし、その他の面はすべて原礫面、節理面である。剥離面から90°打面転位が行われていることがわかる。母岩別資料5に属する。

35はチャート製の単設打面石核である。作業面は正面に位置し、その他の面は分割に利用した節理面が多く残る。作業面を構成する剥離面から90°打面転位が行われていることがわかる。上面の打面は正面方向からの単剥離面打面で、右側縁は節理面を利用した打面である。上からの剥離は石刃もしくは石刃状の縦長剥片が連続して剥離されている。母岩別資料8に属する。

36チャート製の単設打面石核である。作業面は正面で、分割に利用した節理面を打面とし幅広の剥片が連続して剥離されている。その他の面はすべて素材分割に利用された節理面で構成されている。母岩別資料8に属する。

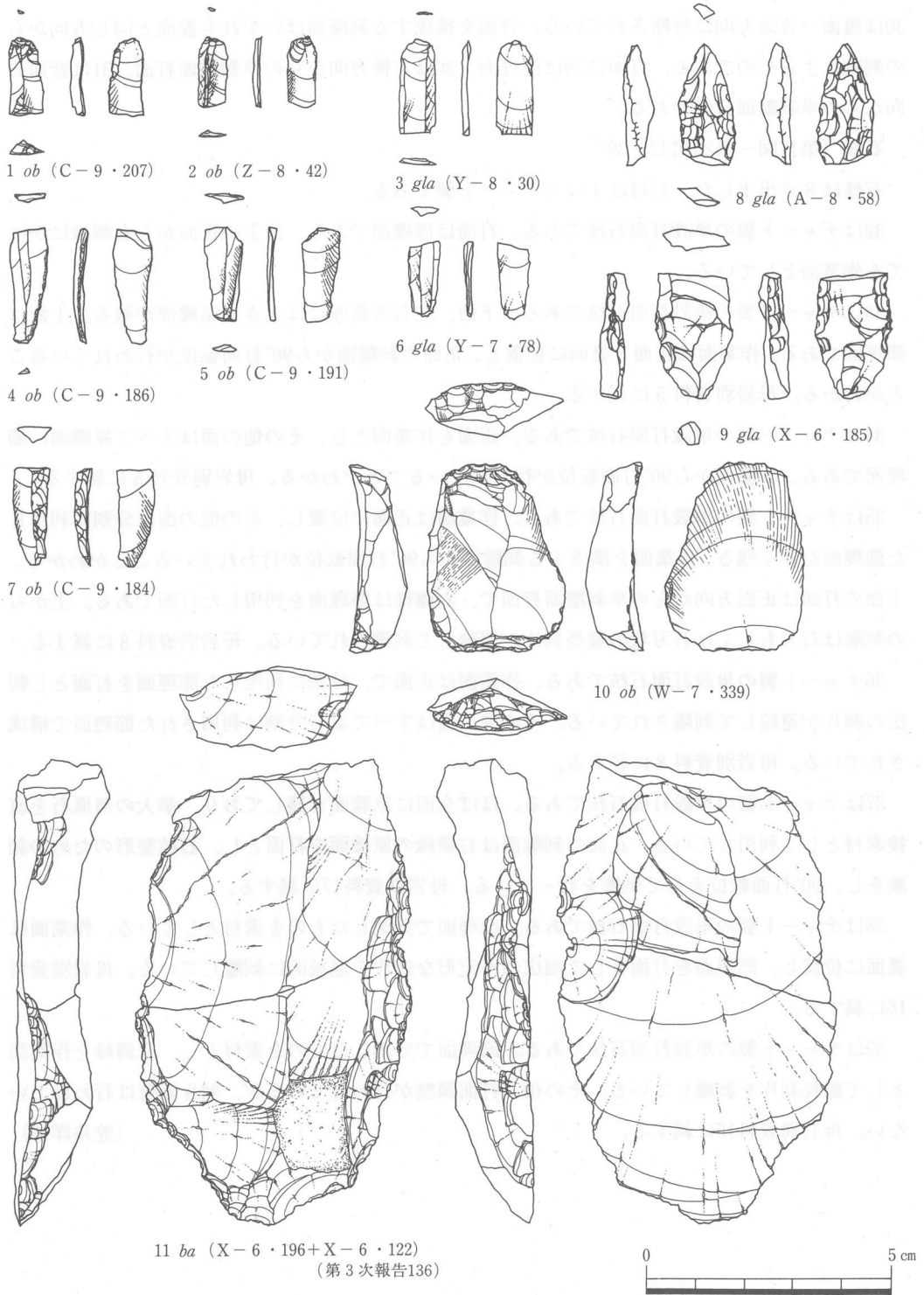
37はチャート製の単設打面石核である。ほぼ全面に原礫面を残しており、拳大の河原石を直接素材として利用している。正面の剥離面は右側縁の原礫面を打面とし、石核整形のための剥離をし、90°打面転位をして剥離を行っている。母岩別資料17に属する。

38はチャート製の単設打面石核である。節理面で分割したものを素材としている。作業面は裏面に位置し、節理面を打面として幅広の不定形な剥片を連続的に剥離している。母岩別資料16に属する。

39はチャート製の単設打面石核である。節理面で分割したものを素材とし、右側縁を作業面として縦長剥片を剥離している。その後、打面調整が行われているが、剥片剥離は行われていない。母岩別資料15に属する。

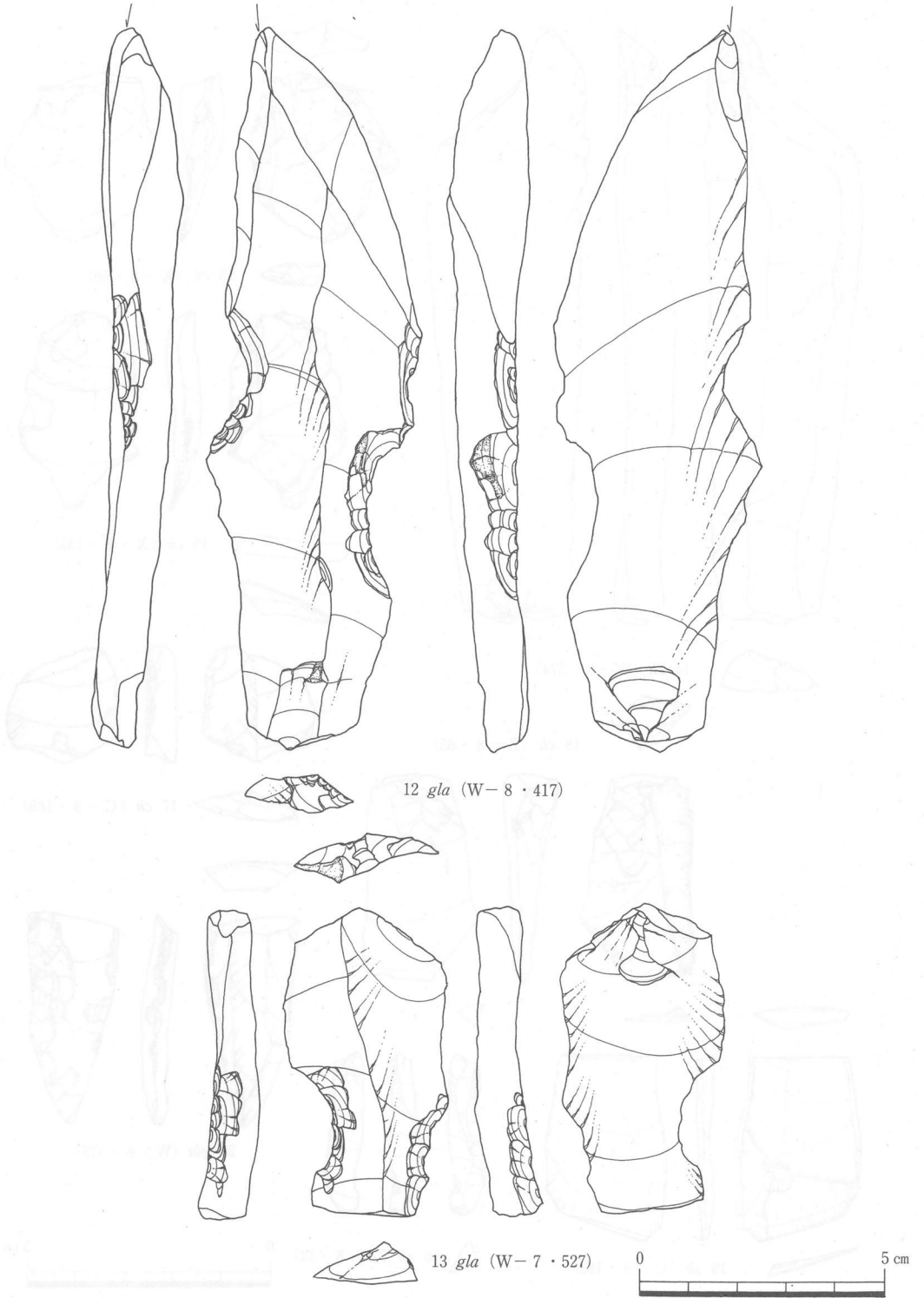
（笠井洋祐）

第三章 第V層文化層

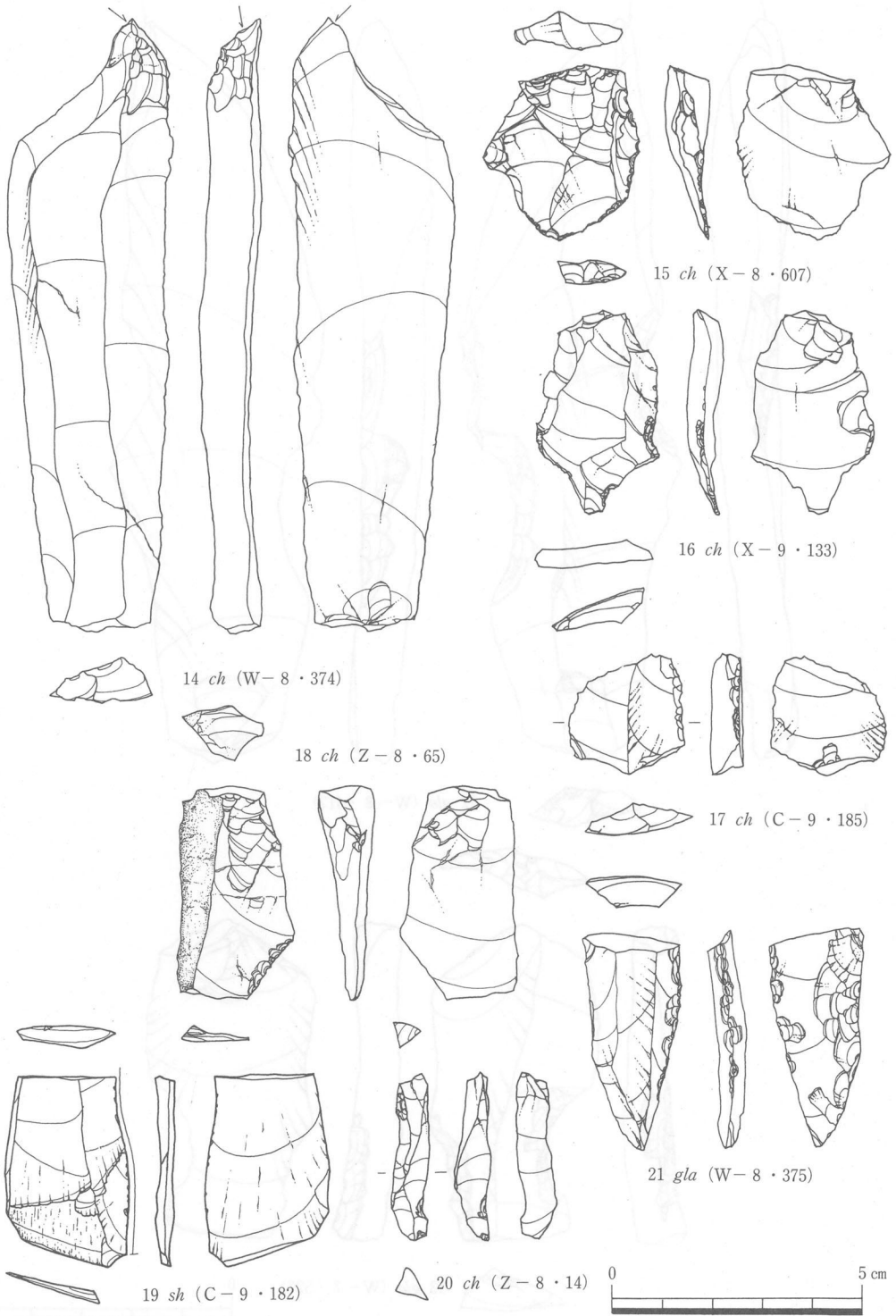


第13図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(1)細石刃、槍先形尖頭器、搔器、削器(3/4)

第2節 石器

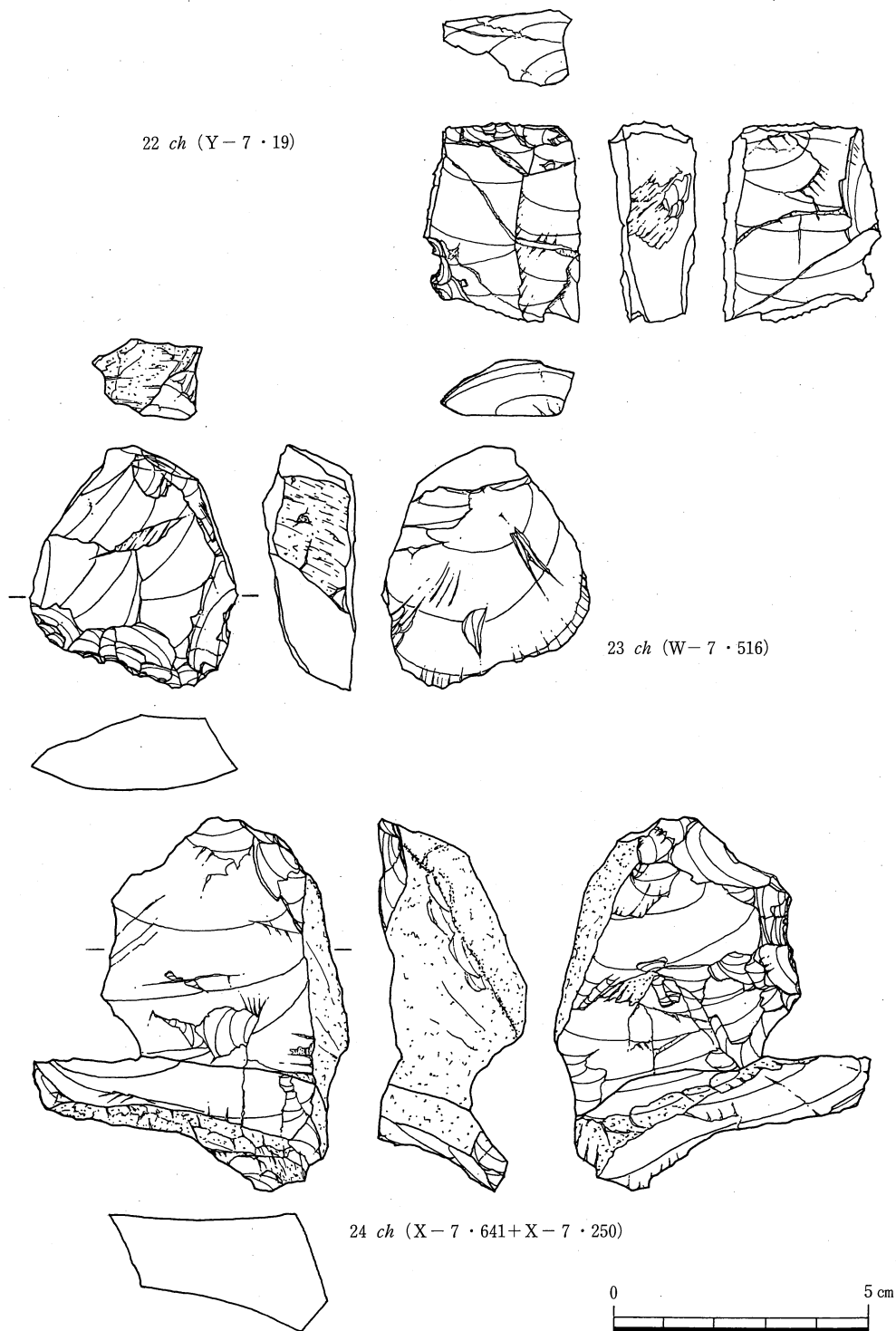


第14図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(2)彫器抉入石器・抉入石器(3/4)



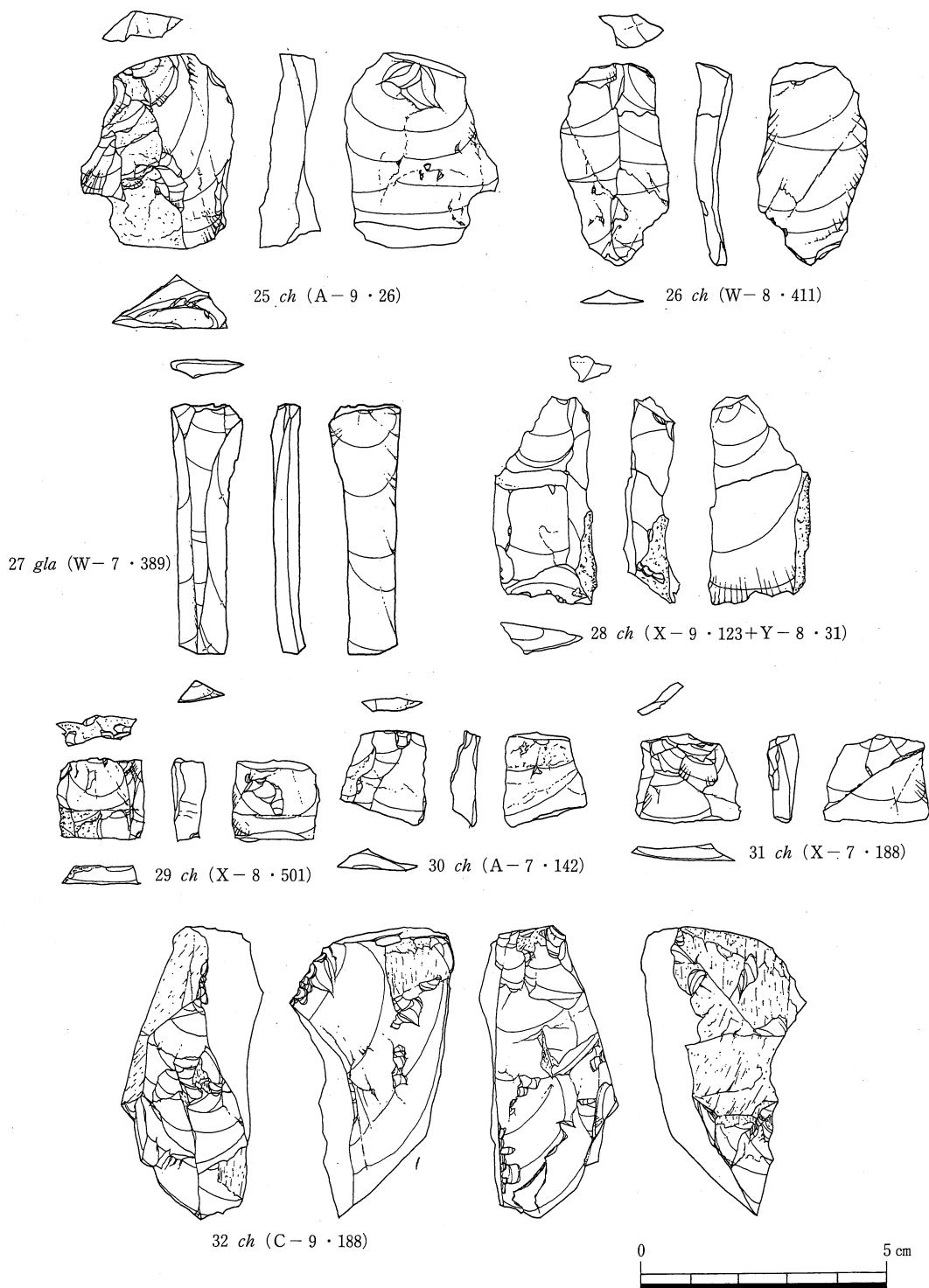
第15図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(3)彫器、細部調整剥片、微細剝離痕を有する剥片(3/4)

第2節 石器



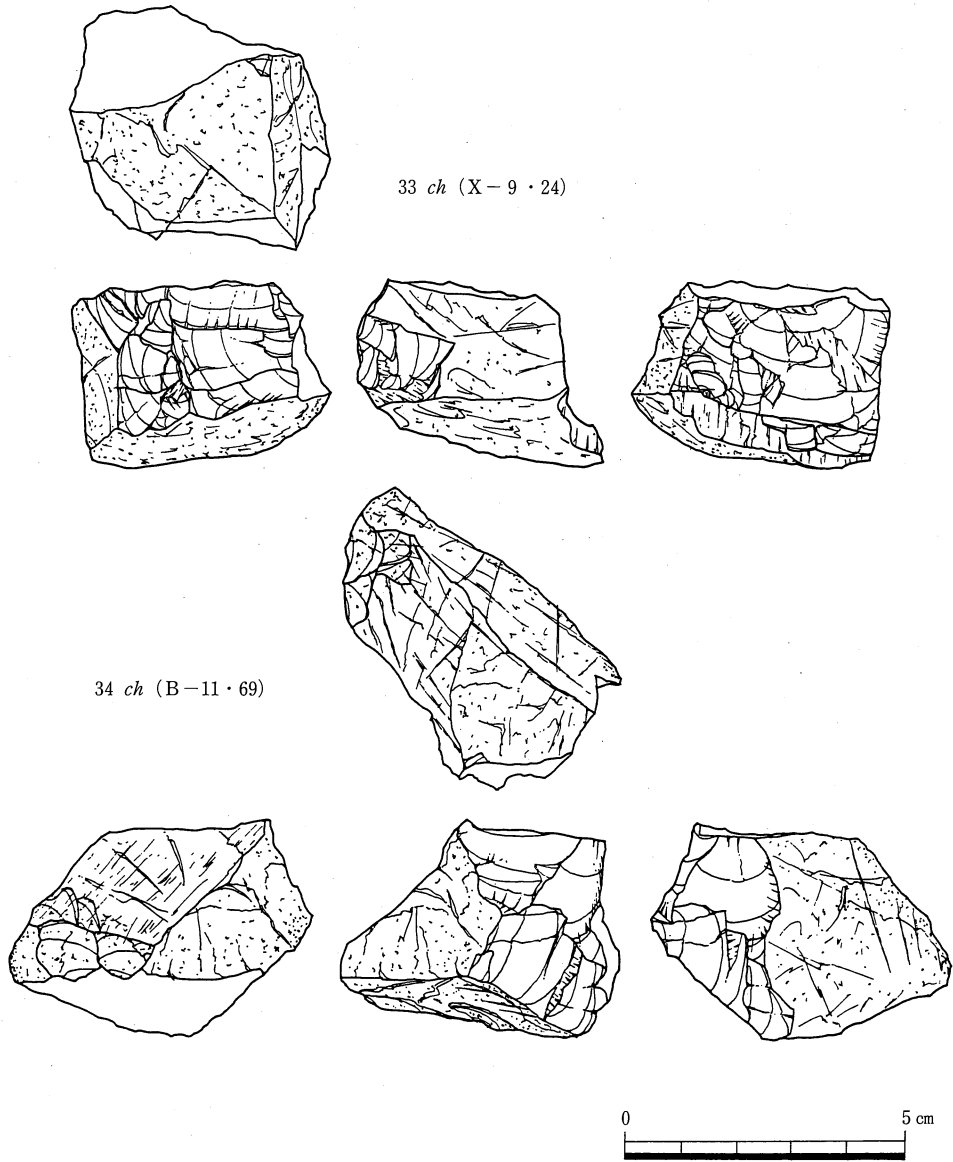
第16図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(4)抉入石器、細部調整剥片、微細剝離痕を有する剥片(3/4)

第三章 第V層文化層



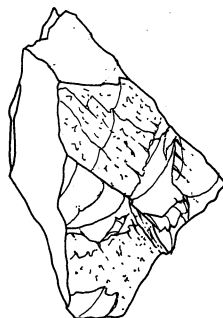
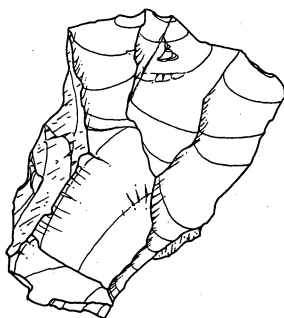
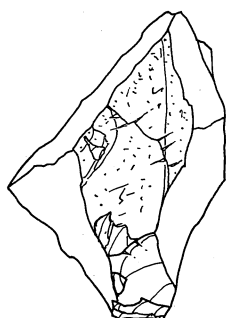
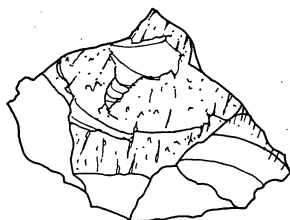
第17図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(5)石刃、石刃状剥片、石核(3/4)

第2節 石器

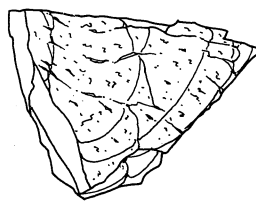
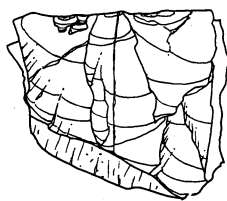
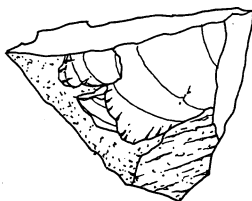
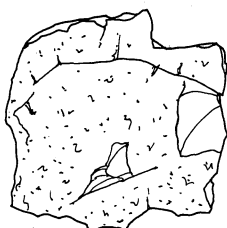


第18図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(6)石核(3/4)

35 ch (Y-6・308b)

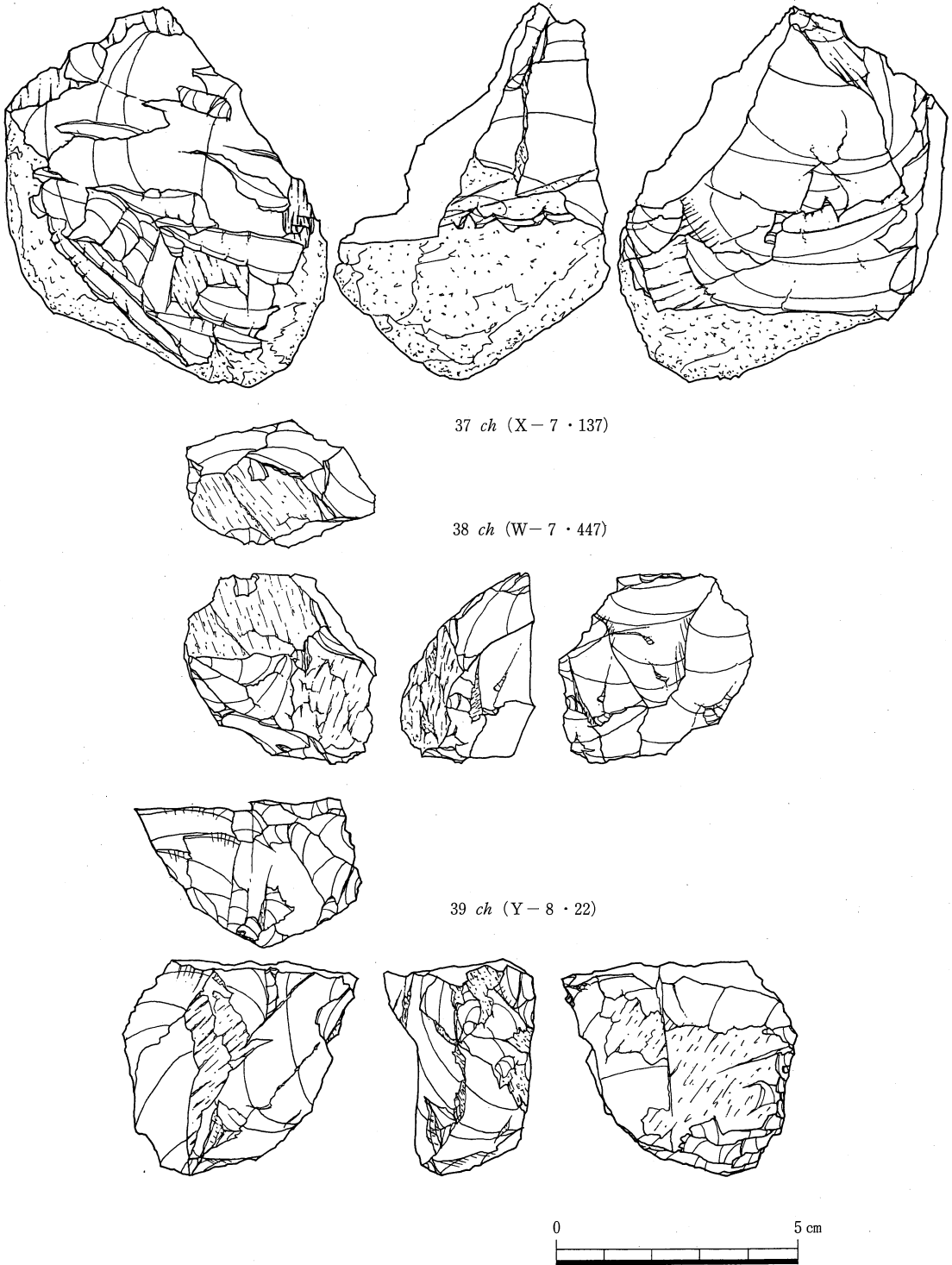


36 ch (X-7・128)



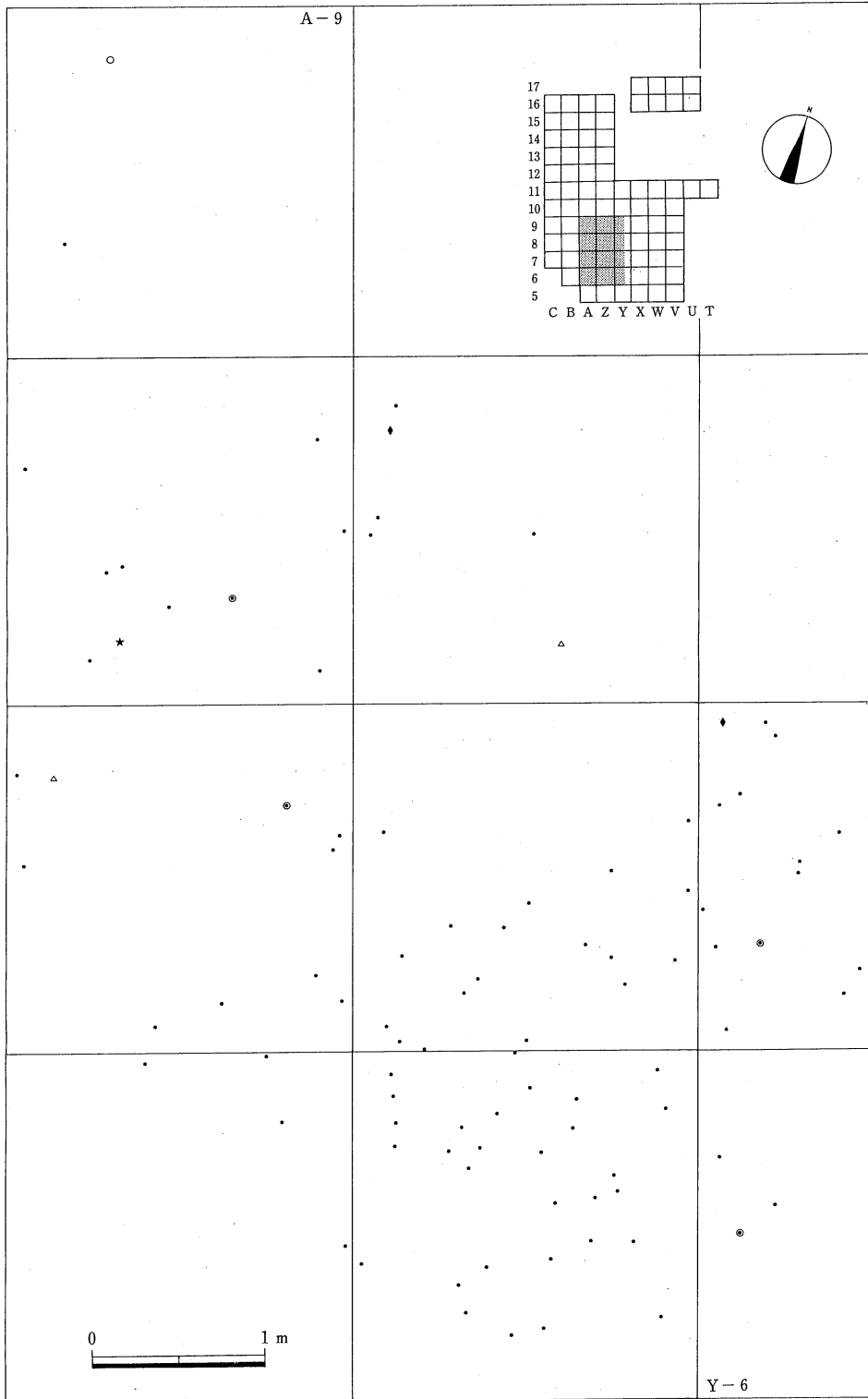
第19図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(7)石核(3/4)

第2節 石器



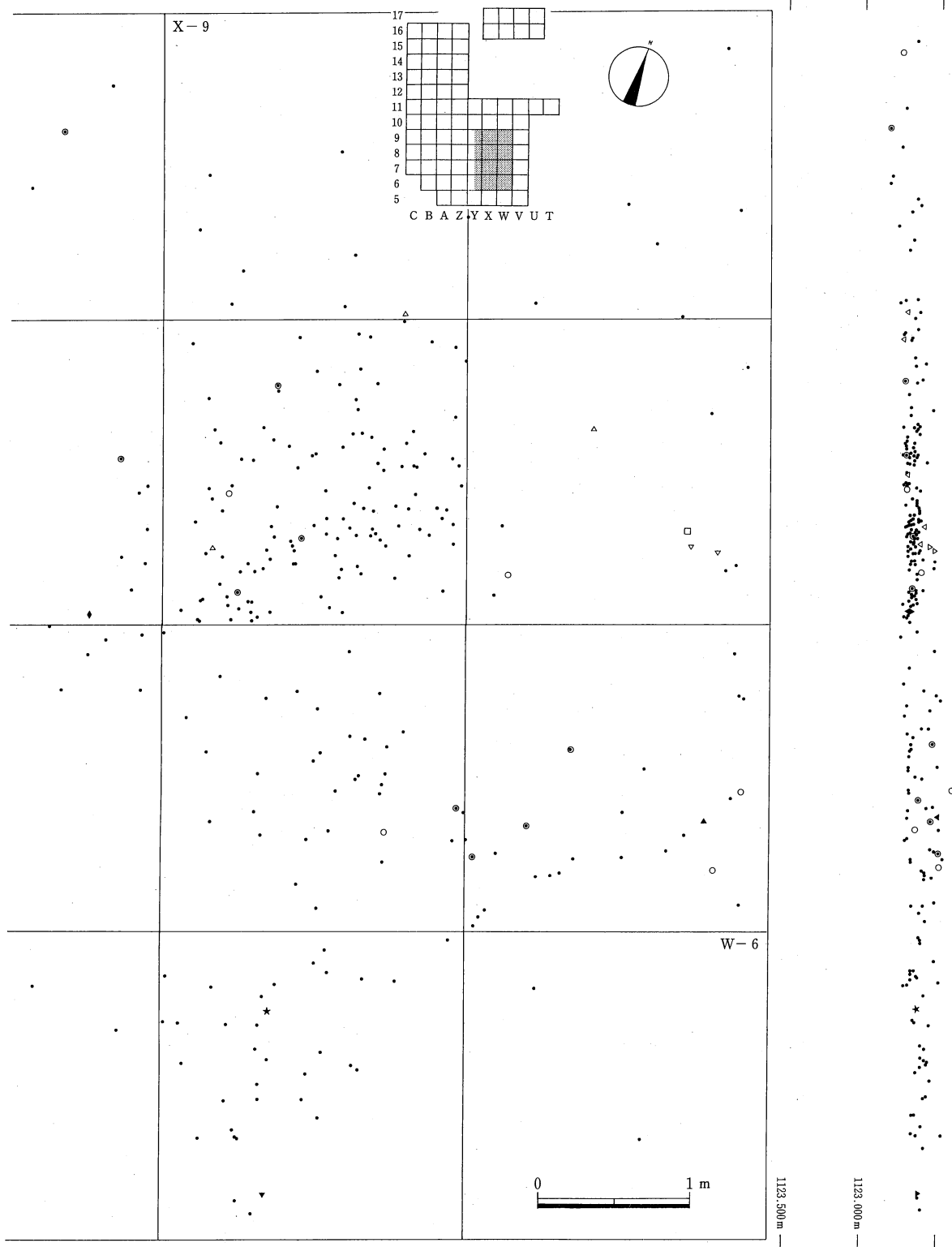
第20図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器(8)石核(3/4)

第三章 第V層文化層



第21図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器 分布(A、Y、Z列)(1/40)

第2節 石器



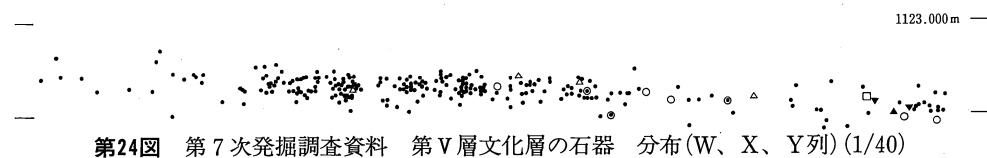
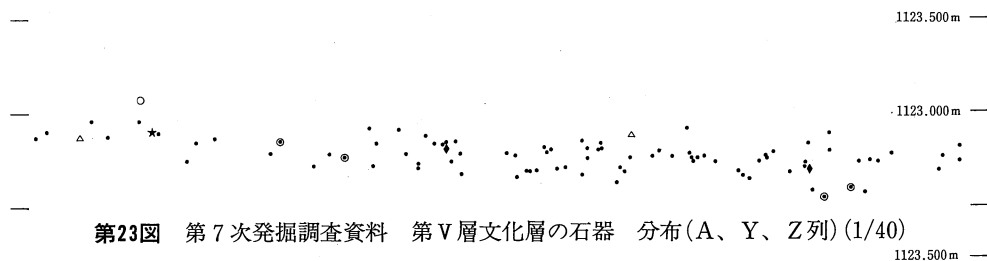
第22図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器 分布(W、X、Y列)(1/40)

第3節 石器群の分布状態

今回の発掘区C-7~9区、A・B、W~Z-6~9区は、第1次調査、第2次調査、第3次調査の発掘区と重複しており、すでに包含層位の調査を終了しているため、第V層文化層に関わる成果は、わずかな資料の追加にとどまる。これらの資料は、出土層位では第VI層ないしは第VI層土と第VII層土の混在層で検出されており、第VI層L文化層の石器群と同じであるが、第V層文化層の主体をなす細石刃を含む点に注意し、第1次調査、第2次調査、第3次調査の出土資料とともに検討した平面分布と垂直分布とに見られる第V層文化層の石器群のまとまりと、第VI層L文化層の石器群のまとまりとの相違に基づいて分離したもので、同時に母岩別資料分析によって蓋然性を高めている。

以上のような検討を経て明らかになった第7次調査における第V層文化層の石器群は、石器40点、剥片・碎片334点である(第21図~第25図)。第V層文化層に関しては、第2次調査報告書(小林・谷口編 1992)、第3次調査報告書(永峯・谷口編 1993)で概ねの石器群の分布傾向が整理されている。

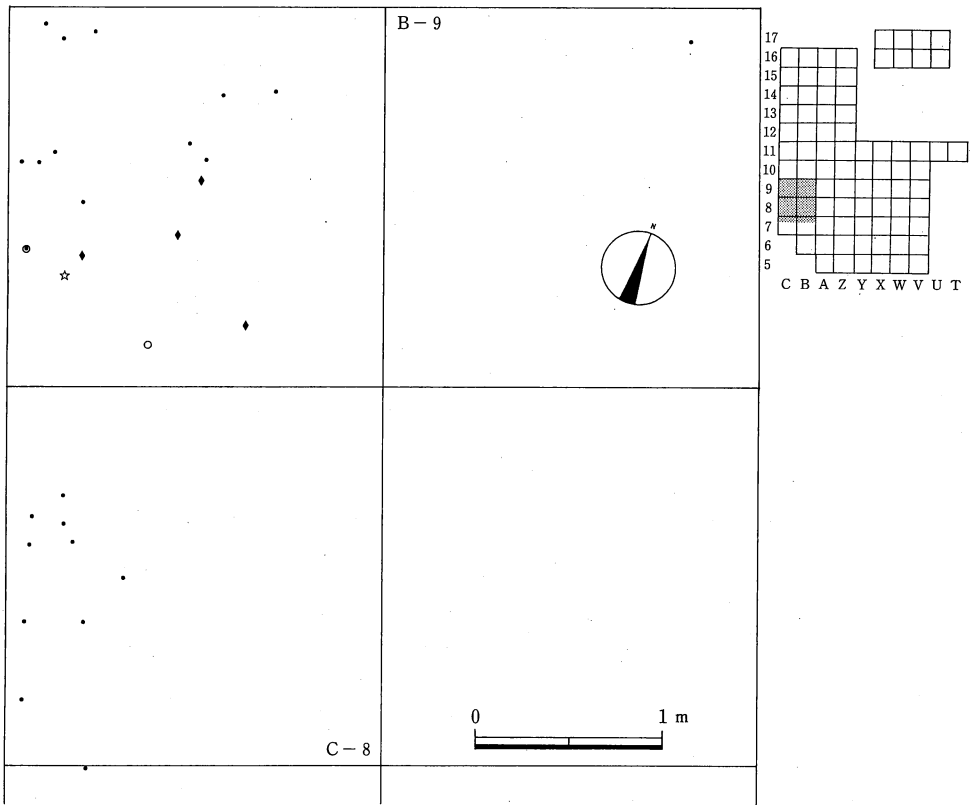
特に石器器種組成の主体をなす細石刃と細石刃石核・同原形・打面形成削片等の細石刃剥片剥離工程関係資料は第1号配石の位置するC-10・11区およびその南側のC-8・9区付近と、第2号配石の位置するV・W-5・6区周辺に集中的に分布しており、配石との関連が示唆される。また、第2号礫群・第3号礫群では重複する範囲に石核と剥片・碎片の集中が認められており、礫群との関連も注意されている。その他の石器器種、あるいは剥片・碎片についても同様の関連性が認められ、あたかも細石刃と細石刃石核・同原形・打面形成削片等の細石刃剥片剥離工程関係資料の分布をとりまくように分布がひろがる傾向が確認されており、これらを



第3節 石器群の分布状態

石器ブロックとして把握することも可能であろう。しかしながら第V層文化層に関しては、上記のような石器群の分布の粗密はあるものの、発掘区全域にほぼ絶え間なく石器群の分布が続いているうえ、石器群の密な分布の部分がいずれも未発掘の調査区外へとひろがっているため、現状では石器ブロックを設定していない。

ところで今回の調査においてW・X-7・8区で発見された彫器1点、彫器挟入石器1点、挟入石器1点は、これまでに第V層文化層の石器組成中に見られなかった石器群として特筆される。これらはいずれも大形の石刃を素材としており、特に彫器挟入石器と挟入石器は玻璃質安山岩製である点でも共通する。これらの石器については、これまでに柳又遺跡A地点では第



第25図 第7次発掘調査資料 第V層文化層の石器 分布(B・C列) (1/40)

IV層文化層に珪質頁岩を主要な石材とする大形石刃石器群の文化層が確認されており、それらとの関係が考慮された。しかしながら、第IV層文化層の大形石刃を主体とする石器群とは使用石材の点で共通するものがなく、また石器の観察所見うえで、今回検出された彫器や彫器挟入石器の彫刀面が素材石刃の端部に設けられているのに対して、第IV層文化層の石器群に組成する彫器は大形石刃を二ないし三分割して断口面に彫刀面を設けており素材石刃の扱いに違いがある。同時に今回検出された大形の石刃は素材石刃の剝離にあたっての打面調整や頭部調整が認められず、その打面が大きい、第IV層文化層の大形石刃は打面調整や頭部調整が顕著に見られ、その打面の小さな点で大きく異なっている。そのため、第IV文化層の大形石刃とは異なる石刃と判断した。また、彫器、彫器挟入石器、挟入石器の検出層位を再度検討し、これまで確認されている第V層文化層の石器群の下位に出土位置があたることから第V層文化層に帰属するものと判断した。

(宮下治枝)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

母岩別資料分析によって、これまで第V層文化層の母岩別資料14個を報告している。今回の調査では既報告の母岩別資料のうち、6つの母岩別資料(2、5、8、9、10、11)に接合事例や同一母岩資料を追加したほかに、新たに7つの母岩別資料(15、16、17、18、19、20、21)を報告する。

なお、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)で第V層文化層母岩別資料13とした資料について、第7次調査の出土資料について行なった平面分布と垂直分布とに基づく文化層の分離と母岩別資料分析との結果から、文化層の誤認定であると判断し、第V層文化層から第VI層L文化層へ帰属文化層を変更し、既報告の第V層文化層母岩別資料13を欠番としたうえで、第VI層L文化層母岩別資料9と改めた。そのために第V層文化層の母岩別資料については、通し番号で21までが付されているが、把握している母岩別資料の個数は20個になる。

(1) 母岩別資料2 (第26~28図)

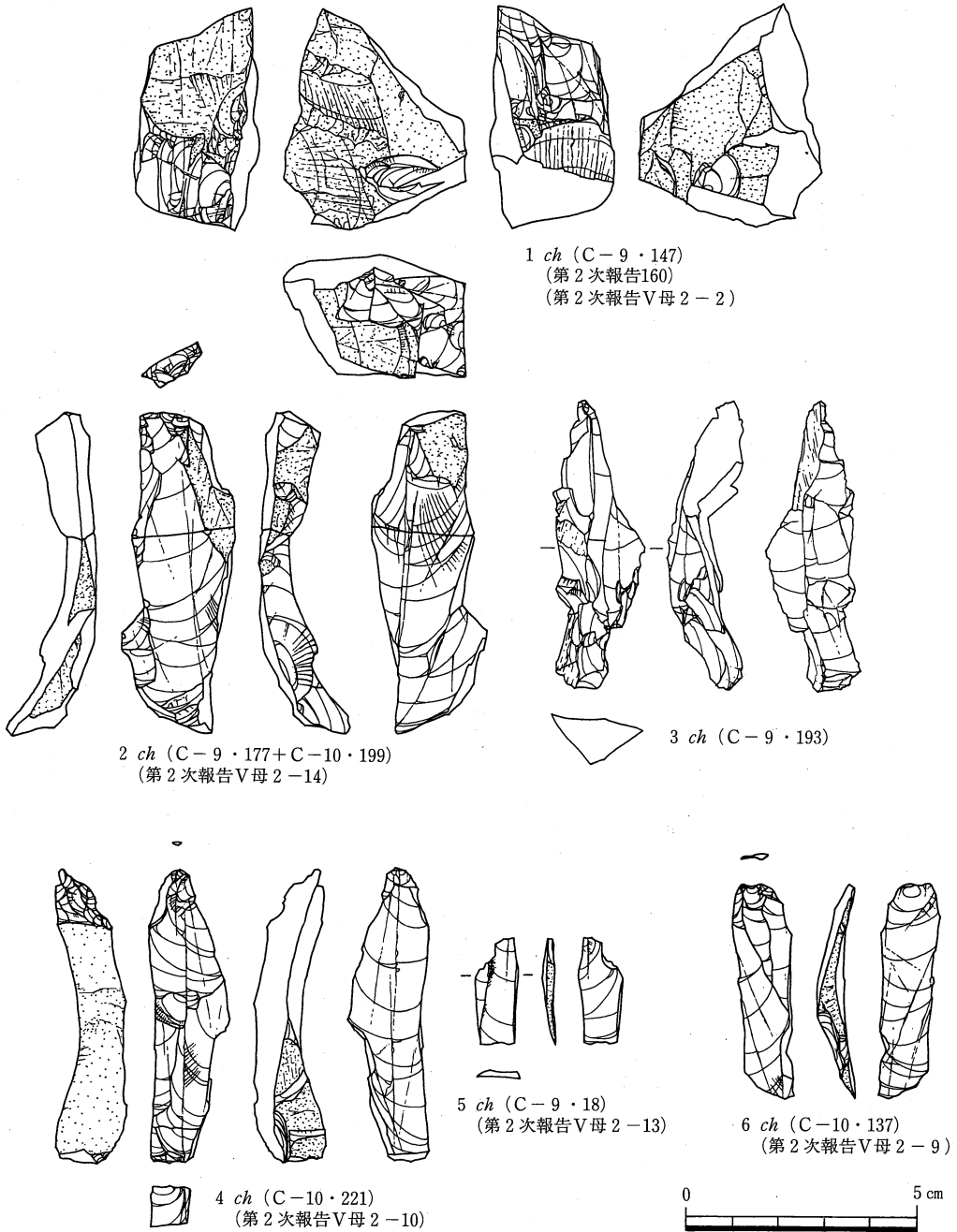
石材 チャート

石質 緻密かつ均質で脂肪光沢を持つ。割れ口は貝殻状断口を示すが、同一方向の節理が多数あり、部分的板状に破碎する場合がある。色調は褐色を呈する。

素材 厚さ3cm程度の板状の角礫を素材としたと思われる。

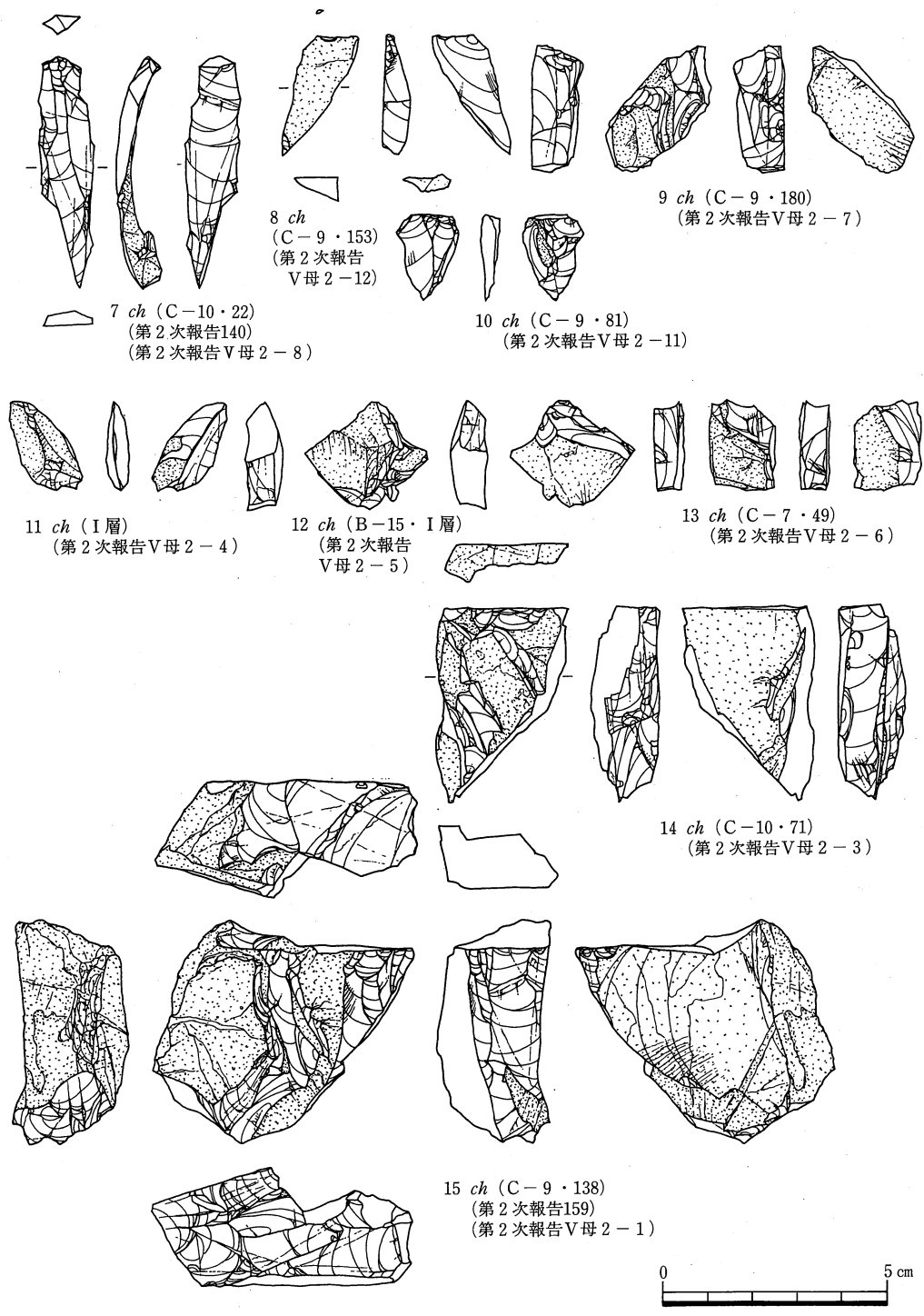
資料 剥片14点、石核15点を掲載する。1、2、4~15が第2次調査で報告(小林・谷口編 1992)された資料であり、今回の調査で接合の把握された資料は3のみである。3は頭部が節理にそって破碎しているがその形態は、狭長な縦長剥片である。

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術



第26図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料2(1)(2/3)

第三章 第V層文化層



第27圖 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料2(2)(2/3)

接合資料と剥片剥離工程 接合資料と復元される剥片剥離工程は、第2次調査報告(小林・谷口編 1992)で詳細に論じられている。今回の調査で確認された3は、頭部が節理にそって破碎しているが、形態から見て2、4~7のような狭長な縦長剥片と同様であり、これらを剥片剥離を目的とした一連の工程のなかに位置づけられよう。

分布 第2次調査報告(小林・谷口編 1992)で示されているようにC-7~9区に分布し、接合関係のその中で完結する。今回追加した資料である3についてもC-9区出土であり、その傾向を逸脱するものではない。

(後藤希久子)

(2) 母岩別資料5 (第29~30図)

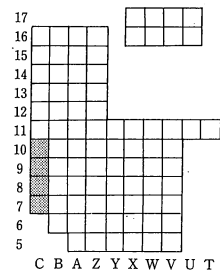
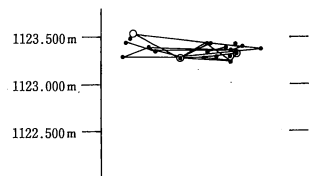
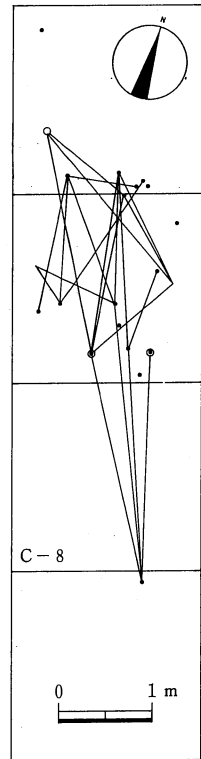
石材 チャート。

石質 緻密かつ均質で脂肪光沢のある石器製作に比較的適している材質で、割れ口は貝殻状断口を呈する。色調は青灰色、灰色、茶色が縞状をなしている。

素材 河原石を分割した状態の石塊を素材としたものと思われる。

資料 石核3点、削器3点、搔器1点、細部調整剥片2点、石刃状剥片1点、剥片24点の総数34点の資料であるが、第2次調査報告(小林・谷口編 1992)の資料を除き、第7次調査で確認された相互には接合しない2例の接合資料、剥片・碎片4点、石核2点を掲載する。1・2は節理面で折断した碎片である。1の平坦な原礫面が打面である。4・5もそれぞれ平坦な原礫面を打面とする剥片である。3と6は石核でほぼ全面に原礫面が多く残り、打面も原礫面を使用している。

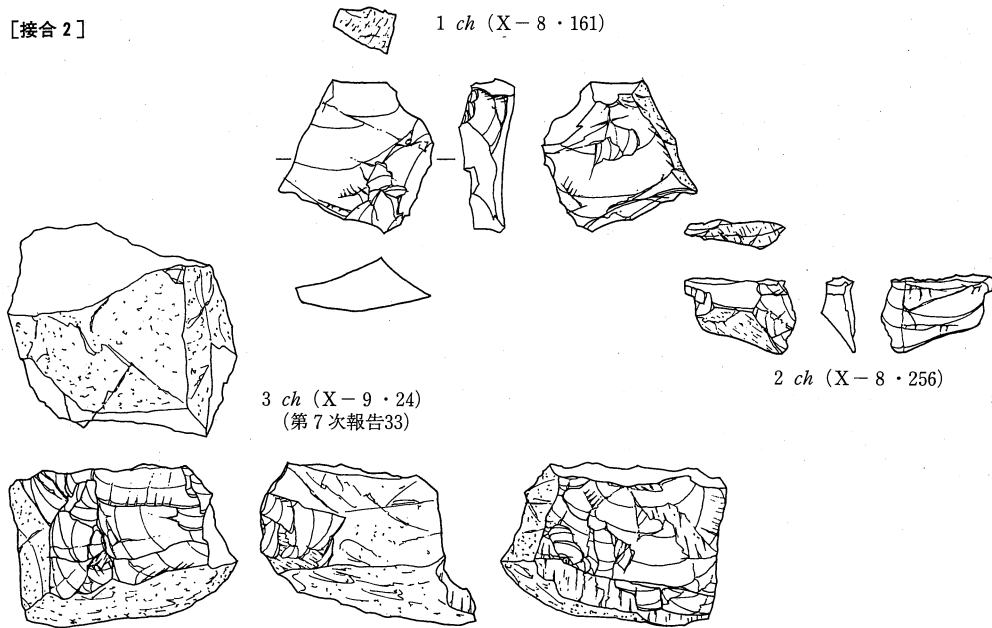
接合資料と剥片剥離技術 1~3の3点からなる接合2と、4~6の3点からなる接合3とに分かれ、相互には接合しない。既報告の接合資料を接合1としているわけであるが、接合1とも今回報告した接合2、接合3それぞれは接合しない。



第28図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料2:分布(1/80)

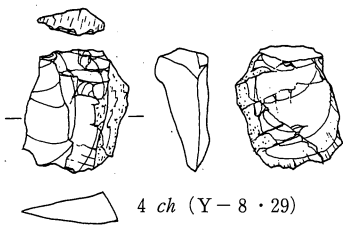
第三章 第V層文化層

[接合 2]

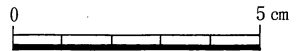
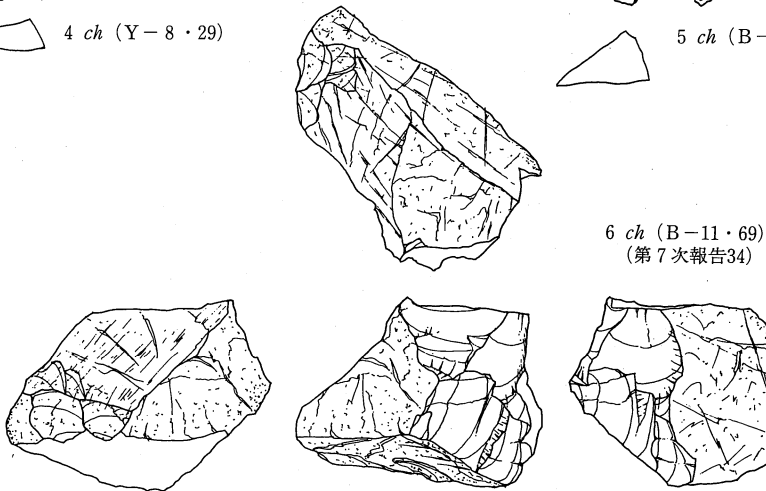
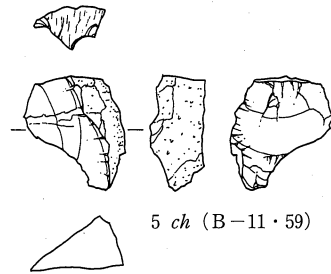


[接合 3]

個体A



個体B



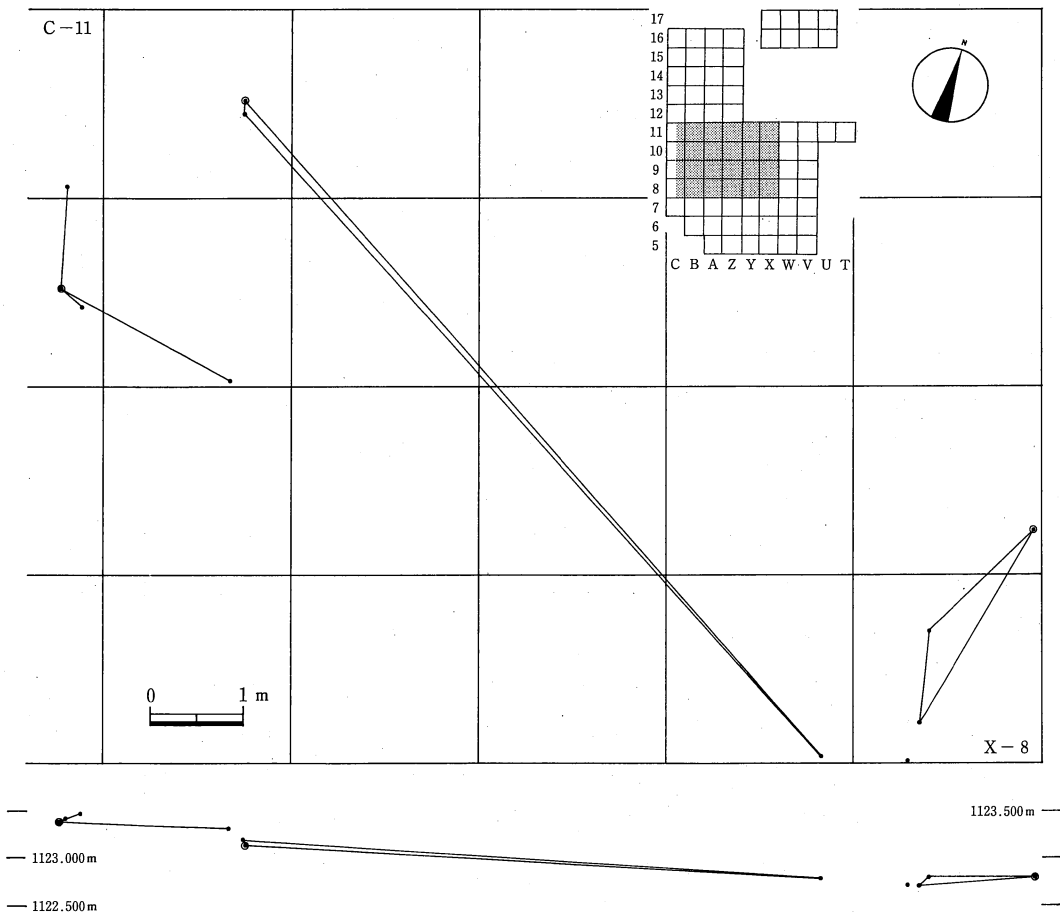
第29圖 第7次發掘調查資料 第V層文化層 母岩別資料5 (2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

〔接合2〕 剥片1+2は石核3の正面と接合する。石核3のほぼ全面には原礫面が残されていること、剥片1+2の背面ならびに石核3の作業面が90°加撃方向の異なる剥離面で構成されていることから判断して、目的的な打面形成は行わず、剥離角の得られる面に対して剥片剥離を行っているようすが窺える。

〔接合3〕 剥片4は背面側が剥片5+石核6と接合し、剥片5は腹面側で石核6と接合する。そこで剥片4の接合面を石核6からの剥離面ではなく個体分割面と判断し、剥片4（個体A）と剥片5+石核6（個体B）とは異なる剥片剥離工程であると考えた。しかしながら、剥片4の剥離された石核は確認されていない。

分布 第2次調査（小林・谷口編 1992）ではB-10区、C-10・11区を中心として分布することが明らかにされている。今回新たに得られた資料のうち、接合2はX-8・9区に分布し第3号礫群と重なる。接合3はB-10区で出土した個体BとY-8区で出土した個体Aとで



第30図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料5：分布(1/80)

分布が大きく異なる。このような分布の相違は接合資料から判断される個体分割単位に分かれており、分割された個体毎に剥片剥離作業の場の違いがあることを示している。また、相互に接合しない第2次調査報告分の接合資料の分布や、今回報告の2例の接合資料それぞれの分布もそれぞれに相違しており、同一母岩の扱われ方と場の選択を考えるうえで示唆的である。その背景には特定の間人が剥片剥離工程の進行にしたがって作業の場を移した場合と、個体分割したものを複数の人間で分配した場合が想定されるが、接合資料の不十分さからどちらかに限定することはできない。

(岩越宏典)

(3) 母岩別資料 8 (第31～35図)

石材 チャート。

石質 緻密かつ均質で良質のチャートである。割れ口は貝殻状断口をなす。色調は全体的に赤褐色を呈し、部分的に青灰色の縦縞を含む。

素材 河原石を節理面に沿って二分割した状態の石塊を素材とし、その大きさは、分割面を上面とした場合直径15cm、高さ9cm程のものと推定される。

資料 石核3点、石刃2点、細部調整剥片2点、剥片78点の総資料数85点で、そのうち第7次調査出土の資料は石核2点、剥片23点の計25点で、大部分は第3次調査で報告(小林・谷口編 1993)されているが、今回の調査で確認された接合に関するもの26点を提示した。以下新資料について記載する。2・3・5は不定形の剥片である。5が比較的分厚い。18・19・20の剥片・碎片はいずれも背面左に原礫面を残す。18と19は折れ面で接合する碎片である。21も分厚い剥片で背面は原礫面や節理面が大きく占める。26は節理に沿って頭部付近の破碎した剥片である。また、22と23はそれぞれ石核であるが、上面の節理面で接合する。

接合資料と剥片剥離技術 1～15からなる接合1、16～20からなる接合2、21～23からなる接合3、24～26からなる接合4の相互に接合しない接合資料がある。

[接合1] 第3次調査で報告された資料が大半を占め、すでに原石の分割から整形、打面形成を経て目的剥片の剥離に至る一連の剥片剥離工程が復元されている(永峯・谷口編 1993)。今回新たに追加された剥片2、3、5は、その一連の剥片剥離工程の中に位置づけられる。

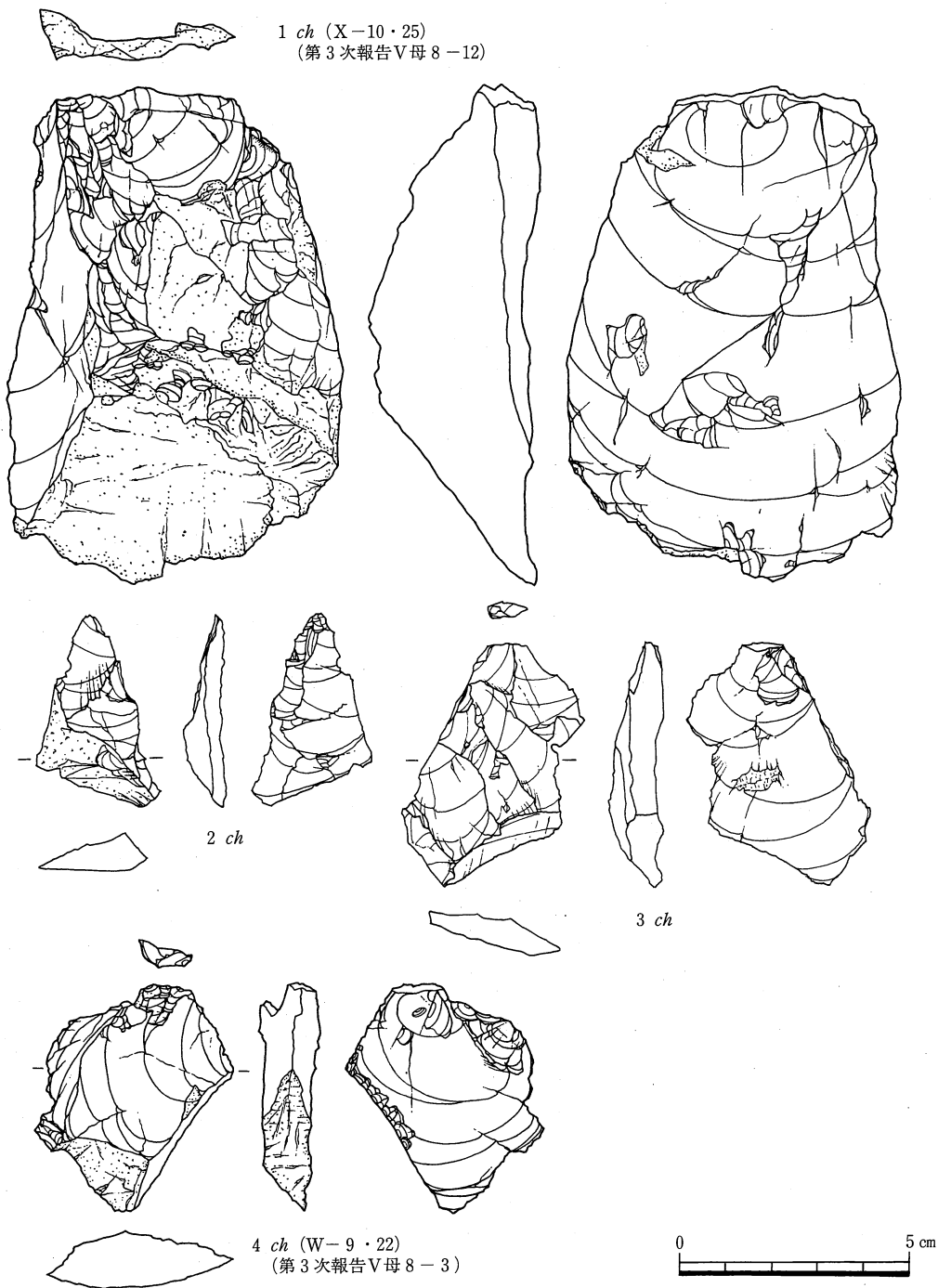
[接合2] 第3次調査で報告された石刃もしくは縦長剥片の連続的に剥離されたようすを窺わせる接合資料で、新たに追加した剥片18～20も同様の石刃もしくは縦長剥片である。

[接合3] 石核22と石核23とは、それぞれの上面にある節理面で接合する。剥片21は石核22の石核23と接合する節理面を打面にして剥離した剥片であり、石核23からの分割後の剥片剥離作業(個体A)である。一方の石核23に見られる作業面も石核22と接合する節理面を打面としたもの(個体B)であり、それぞれ個体分割後に用いられた独立した石核である。

[接合4] 第3次調査で報告されている小破片に、新たに頭部の破碎した剥片26が1点接合

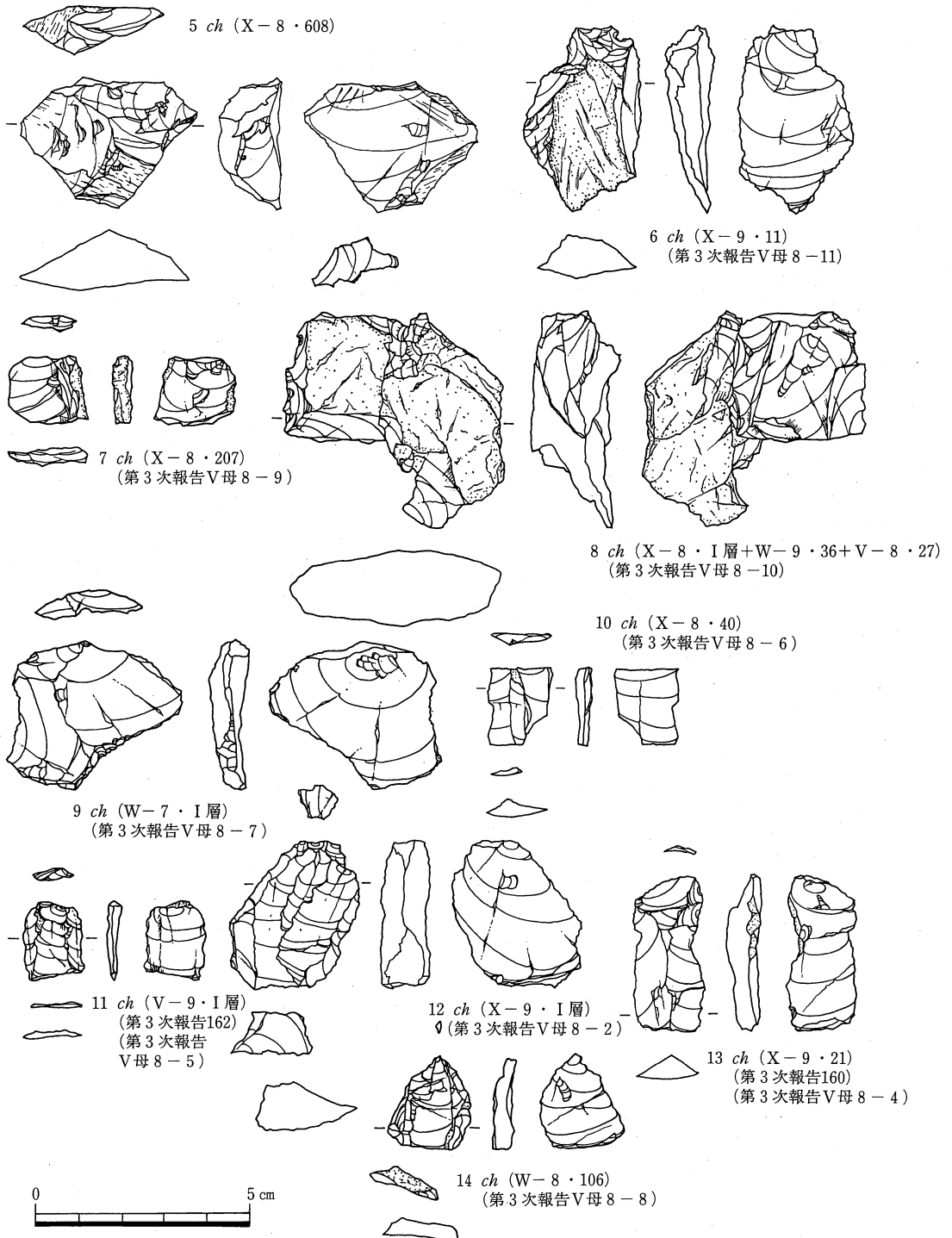
第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

[接合1]



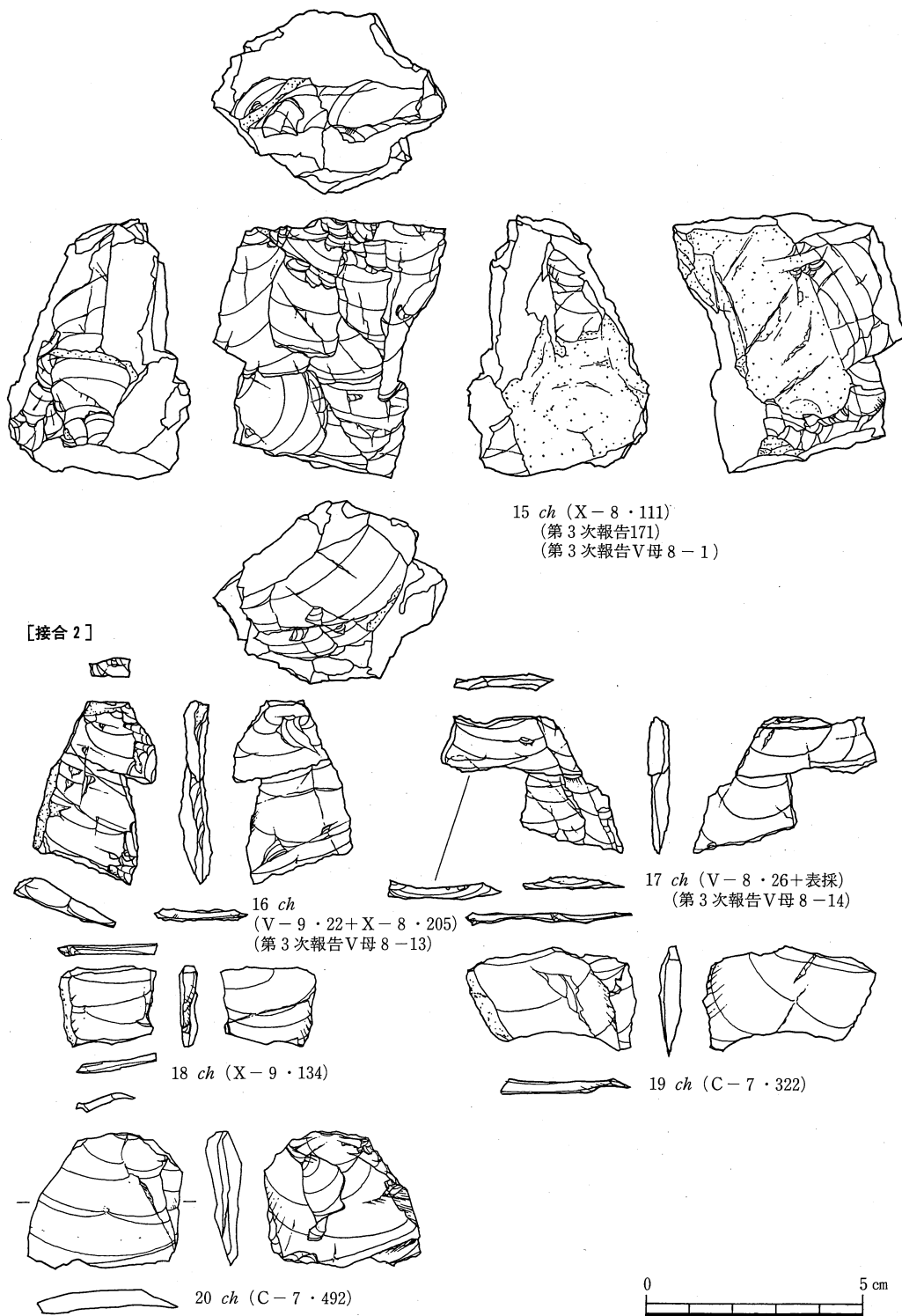
第31図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料8(1)(2/3)

第三章 第V層文化層

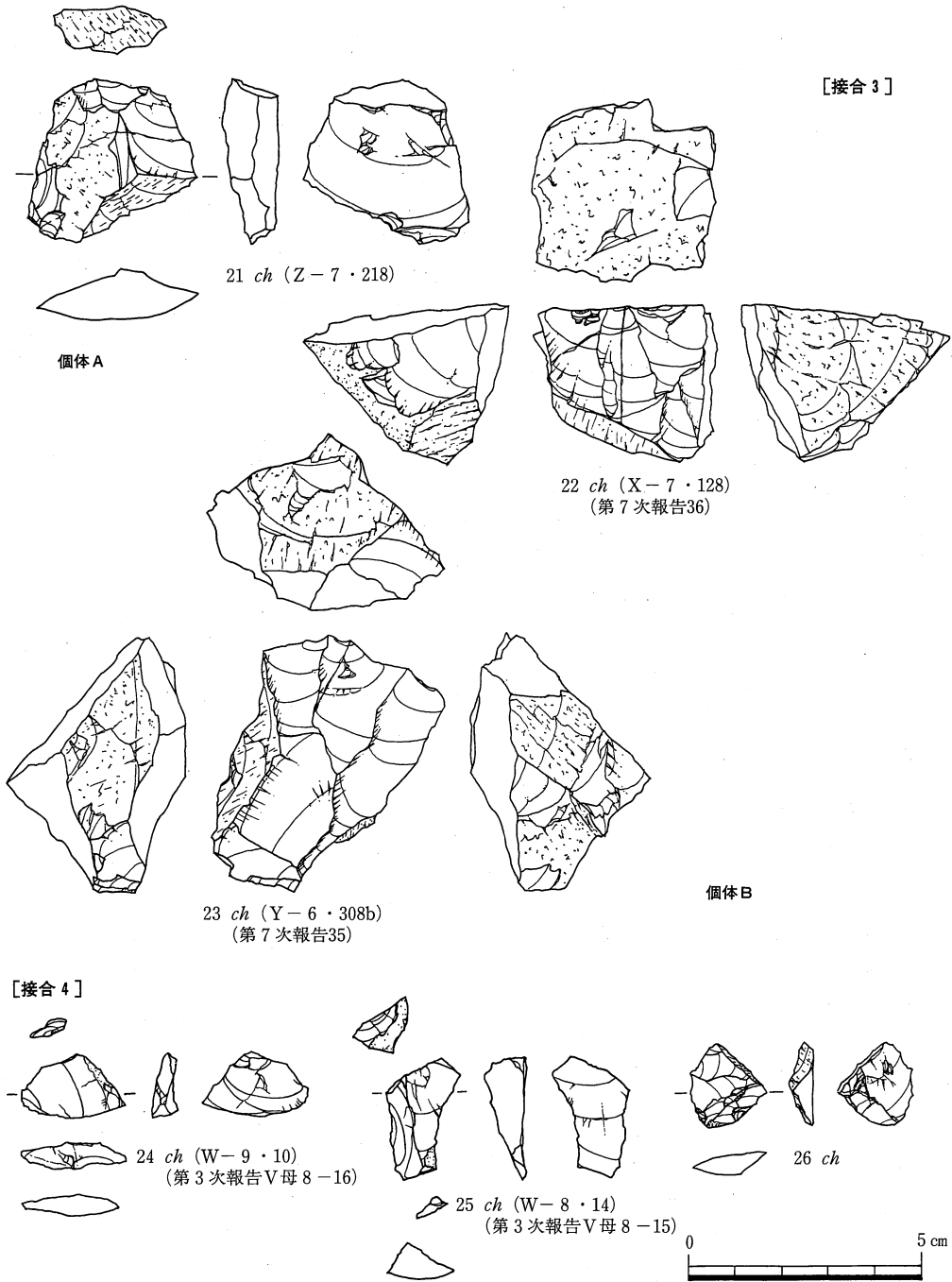


第32圖 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料8(2)(2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術



第33図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料8(3)(2/3)



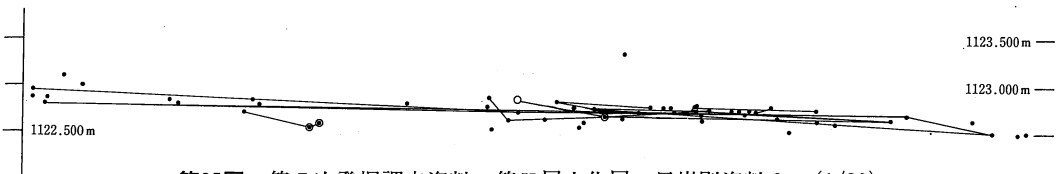
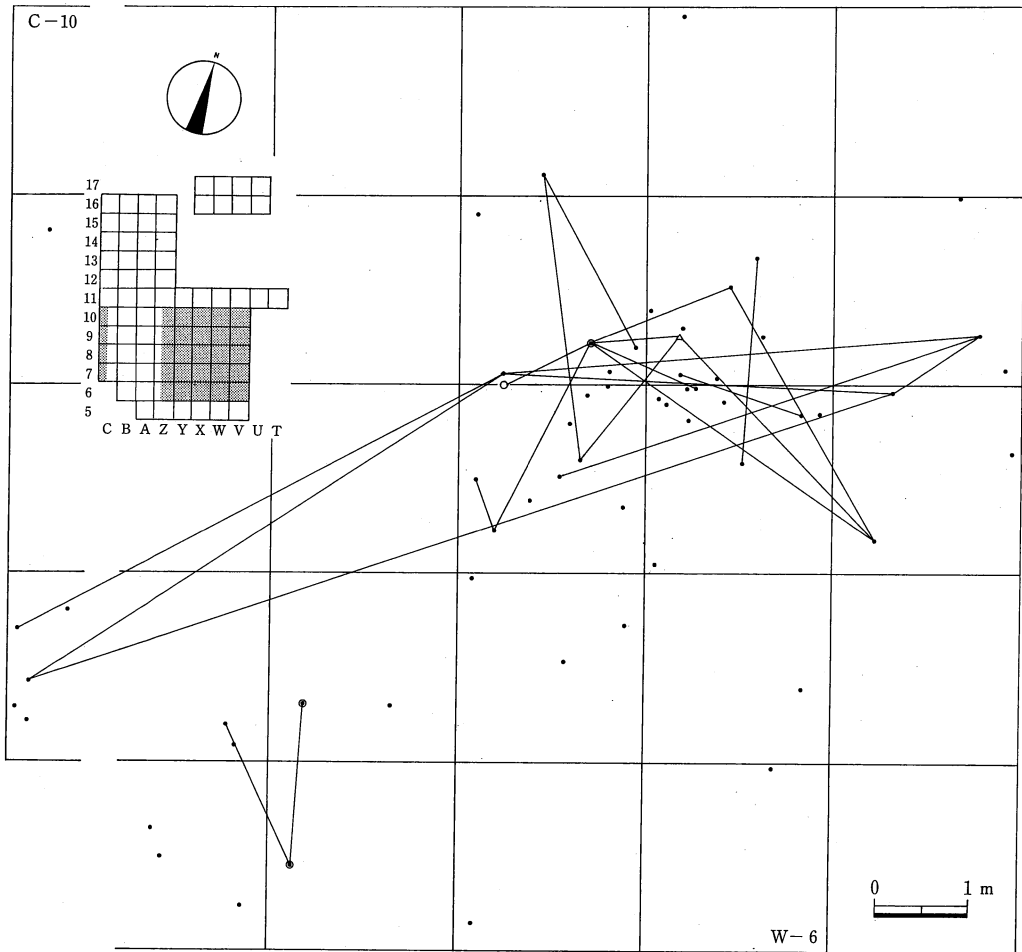
第34圖 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料8(4)(2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

しているにしているに過ぎない。

分布 第3次調査ではV～Z-5～10区に分布の広がりを確認し、特にW・X-6～8区に分布が集中することが明らかにされている。今回新たに得られた接合資料はC-7区、Y-6・7区、Z-7区から出土したものである。これらの中で、C-7区から出土した資料は、接合2に含まれているが、接合2の多くは石核を含む接合1の資料とともにV～Z-5～10区に存在しており注目される。

石核とともに多数の剥片が分布するV～Z-5～10区を剥片剥離の行なわれた具体的な場で



第35図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料8 : (1/80)

あると想定した場合、C-7区から出土した剥片は持ち出された可能性が高い。

その一方で独立した剥片剥離工程を想定させる接合3の個体Aと個体Bとはまとまって分布しており、母岩別資料5の接合3における個体Aと個体Bの分布状況とは対称的なあり方を示し、注意されるべきところである。

(岩越宏典)

(4) 母岩別資料9 (第36~38図)

石材 チャート。

石質 緻密で脂肪光沢があり、割れ口は貝殻状断口をなす。縞状の節理構造を持ち、色調は青灰色または灰色を呈す。

素材 断片的な資料のため、具体的な素材の大きさ、形状は不明である。

資料 石核2点、剥片53点の総資料数55点である。そのうち第7次調査出土の資料は石核1点、剥片8点の11点である。すでに第3次調査報告(小林・谷口編 1993)に掲載されている資料に、新たに接合した5と、第7次調査で新たに確認された8・9を図示した。5は平坦な単剥離面打面の比較的分厚い不定形の剥片である。節理によって下部は破碎している。8は破碎した石核である。9は節理面で頭部から背面右側にかけて破碎した剥片である。

接合資料と剥片剥離技術 1~7からなる接合1と、8・9からなる接合2とがあるが相互には接合しない。いずれも破碎した結果の接合であり、部分的な剥片剥離に関わっている資料が多く剥片剥離工程の復元は難しい。

[接合1] 第3次調査報告で大部分の資料が提示されている接合例であるが、今回接合した5のあり方から、5への加撃に伴って1~4は節理に沿って破碎したものであることが明らかになった。

なお、6の主要剥離面についても節理に沿って剥離したようすが窺えることから同様の状況が推察される。

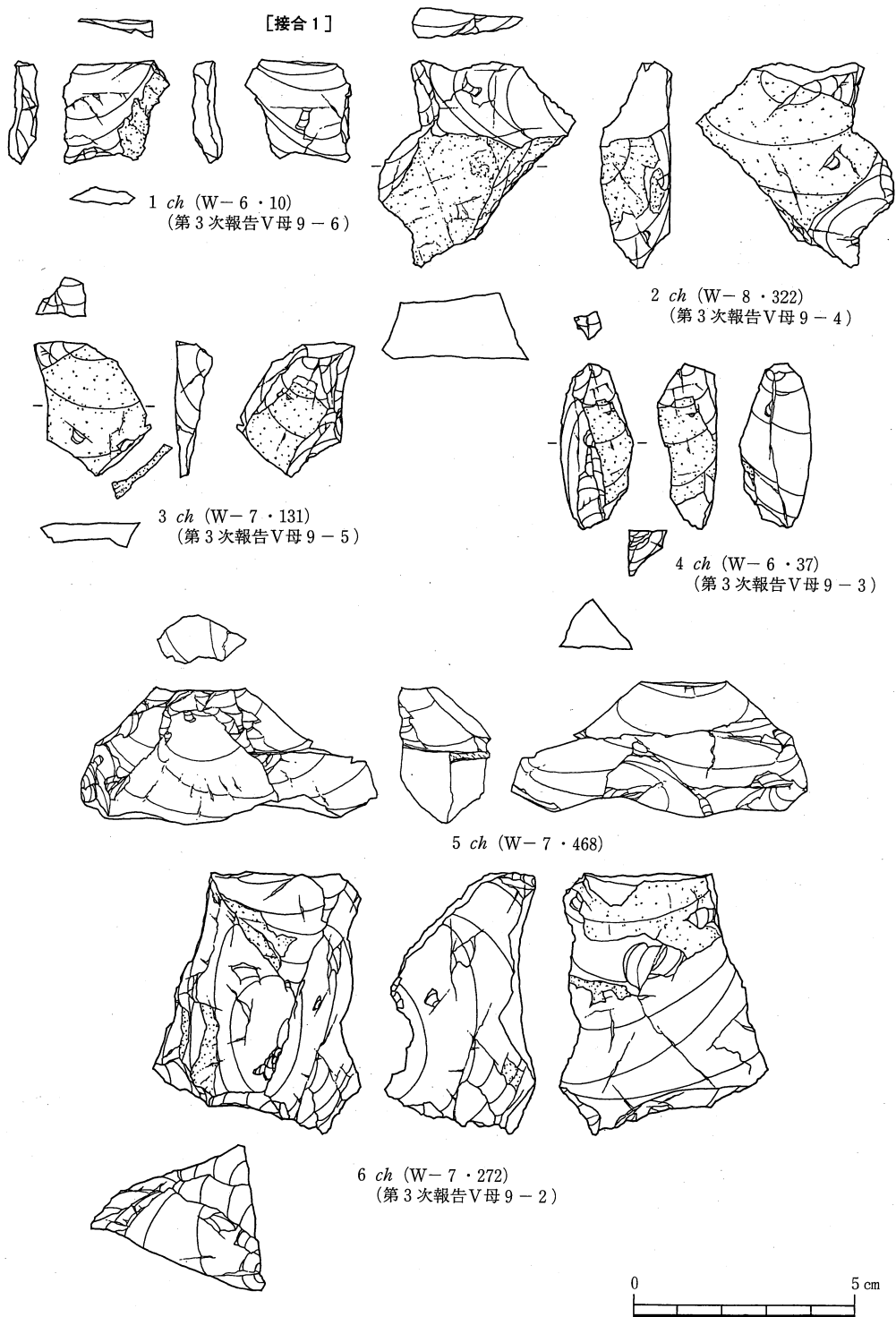
[接合2] 石核8からの剥片9の剥離は、石核8の上面に見られる節理面を打面としたものであるが、剥片9が破碎していることもあり、剥片剥離工程には言及できない。

分布 第3次報告に示されているとおり、接合資料はW-6~8区、X-7・8区に分布し、接合資料以外の同一母岩の資料もそれらを含むV-Z-5~11区の範囲に分布する。

これらの資料の分布範囲は、第3次調査で報告されている第2号礫群とほぼ一致し、礫群と剥片剥離工程の場の関連を示唆するものである。剥片剥離工程の具体的な場を想定できる母岩別資料が礫群と関連する場に分布することは、場の性格や機能を考えるうえで重要であるが、本母岩別資料の場合、節理面で接合している資料が多く、礫群の構成礫との分離とも関連して注意を要する。

(岩越宏典)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術



第36図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料9(1)(2/3)

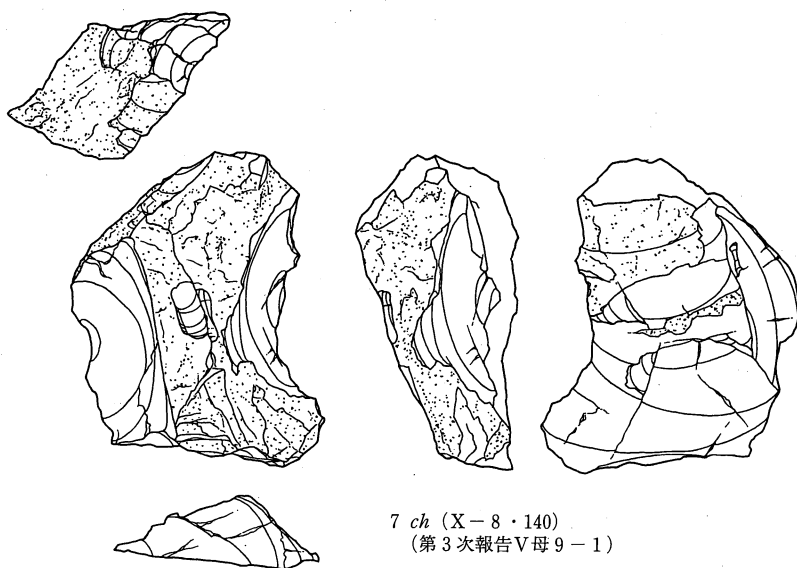
(5) 母岩別資料10 (第39~42図)

石材 チャート。

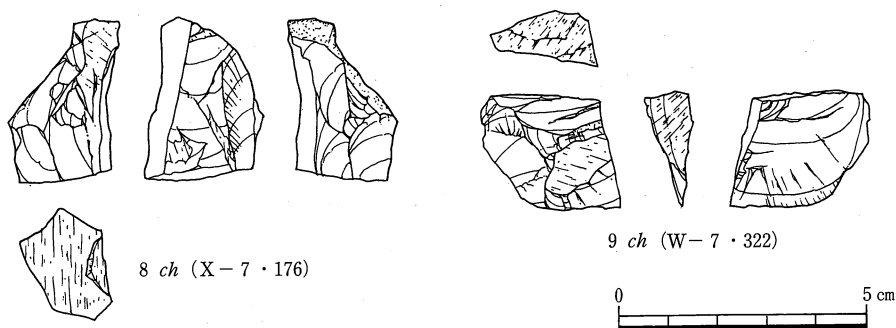
石質 緻密で割れ口は貝殻状断口をなすが、節理が多く、節理面に沿った不規則な割れや剥片の折れが生じている。赤色、青灰色の縞状の色調をなす。

素材 河原石を節理面に沿って分割した状態の石塊で、厚さ10cm程度である。

資料 石核1点、素材1点、石刃状剥片2点、細部調整剥片1点、碎片1点、剥片90点からなり、資料総数96点である。第3次調査報告(永峯・谷口編 1993)で大部分の資料は掲載されているが、新たに接合した資料1~3、5、6とともに13点を図示した。



[接合2]



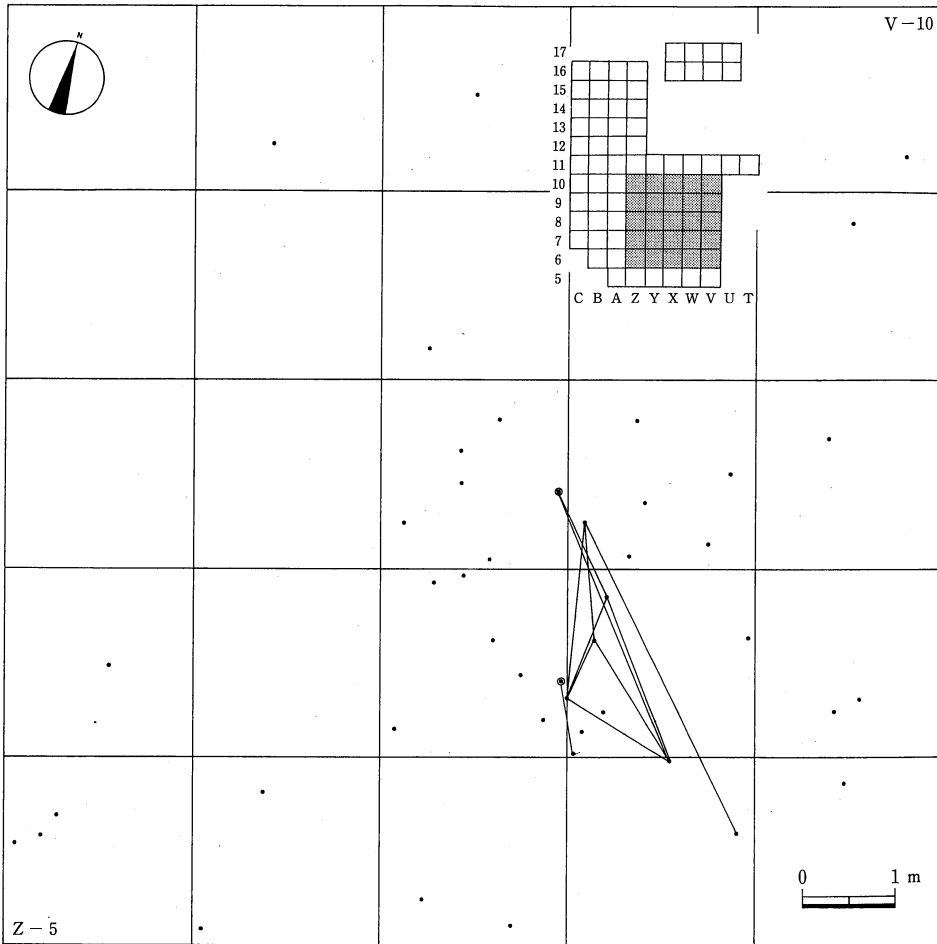
第37図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料9(2)(2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

1～3、5、6はいずれも剥片・破片である。特に5と6は既報告の7の主要剥離面に接合し、剥片7の剥離に際して生じた破破片である。また、1～3は節理に沿って剥離した剥片であるが、いずれも部分的に破破している。

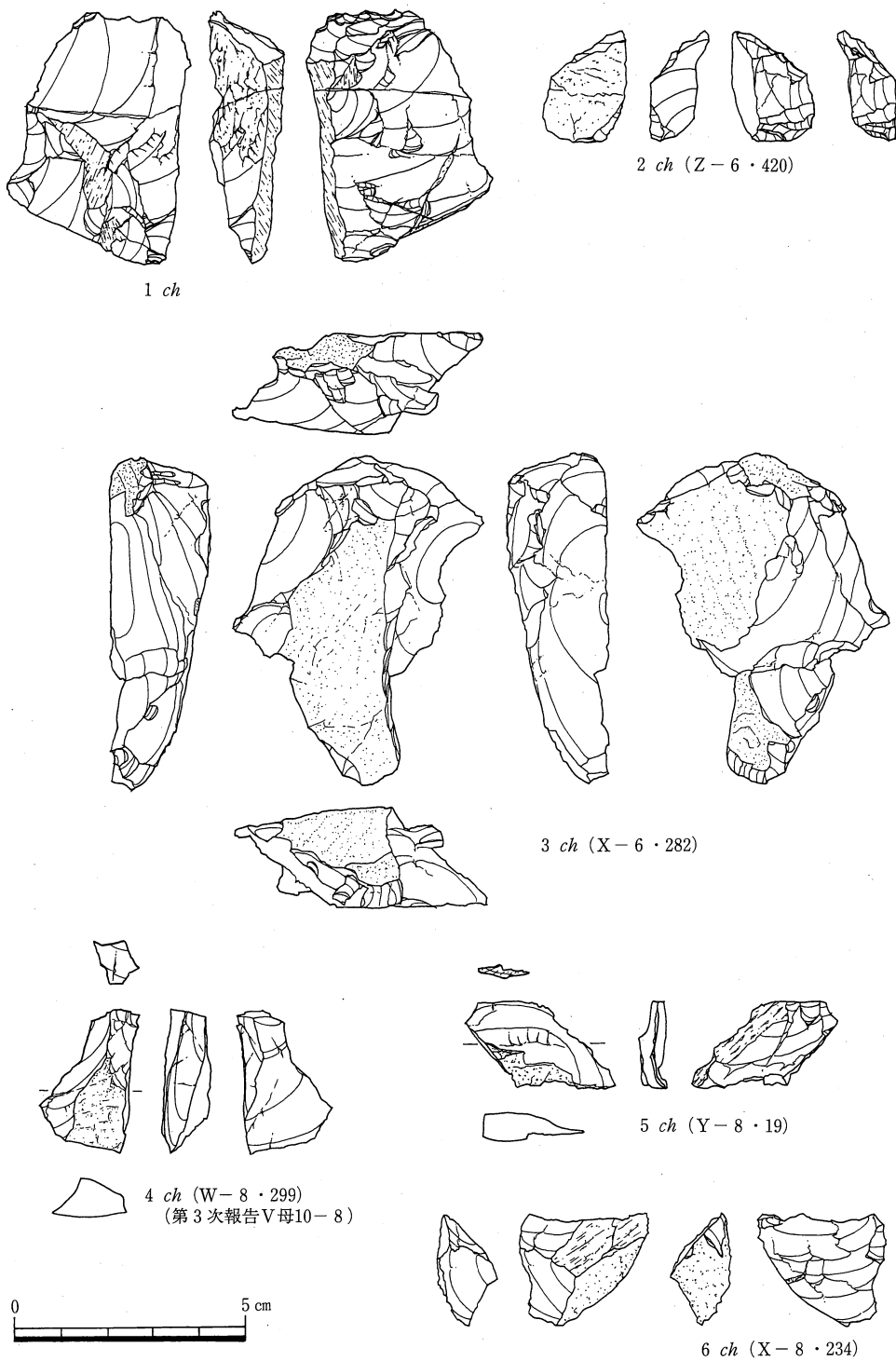
接合資料と剥片剥離工程 提示した13点からなる接合である。

これらの接合資料から理解される剥片剥離工程は、すでに第3次調査報告（永峯・谷口編 1993）に記されているとおりであり、新たに確認された接合資料はその一連の剥片剥離工程の中に位置づけられるものであるが、1～3は節理に沿った剥離であり、5・6は剥片7の剥離に伴う偶発的な破破である。



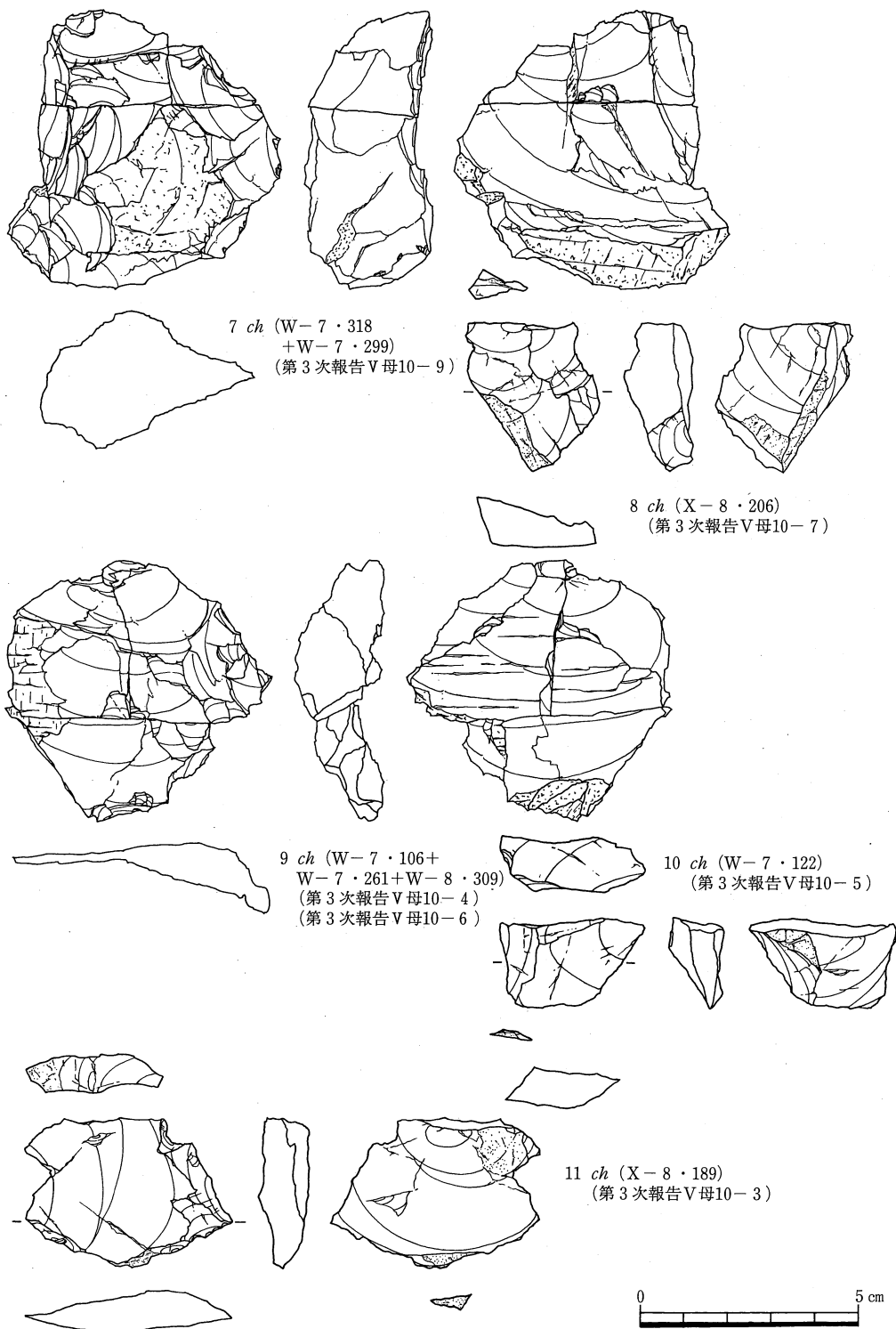
第38図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料9：(1/80)

第三章 第V層文化層



第39圖 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料10(1)(2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術



第40図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料10(2)(2/3)

分布 W～Z—5～8区に2か所の集中が認められる。提示した13点は、第2号礫群が形成されているW・X—7・8区に分布がほとんどまとまっており、剥片剥離の場と礫群との関連を示唆している。その一方でX・Y・Z—6区を中心に分布する剥片には、ほとんど接合が認められず、対称的なあり方が注意される。

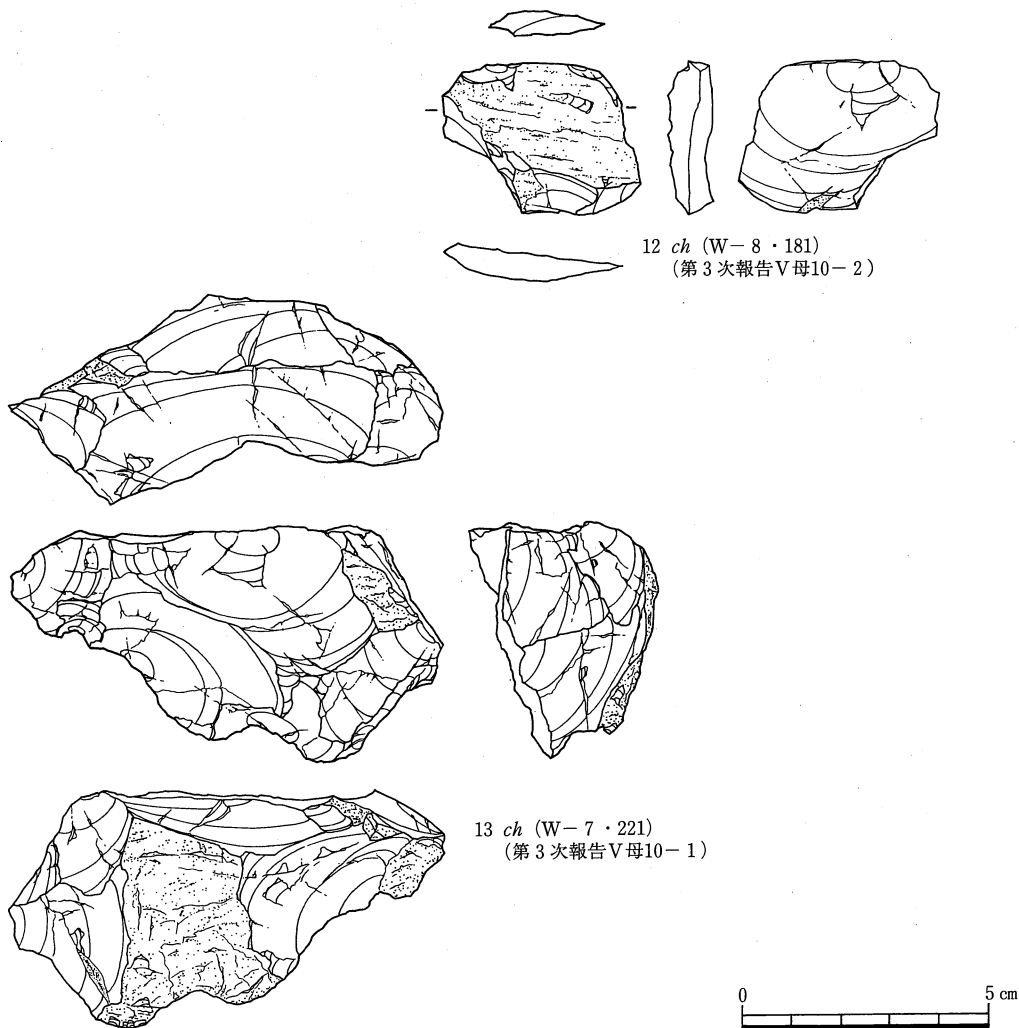
(石川季彦)

(6) 母岩別資料11 (第43～45図)

石材 チャート。

石質 緻密だが縞状の節理構造が多く、割れ口は貝殻状断口をなす。脂肪光沢がある。

素材 第3次調査報告(永峯・谷口編 1993)で母岩別資料9として報告されていた2つの接合資料の一方で、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)で両者の質感が異なることから、



第41図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料10(3)(2/3)

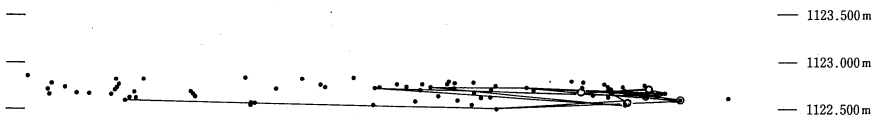
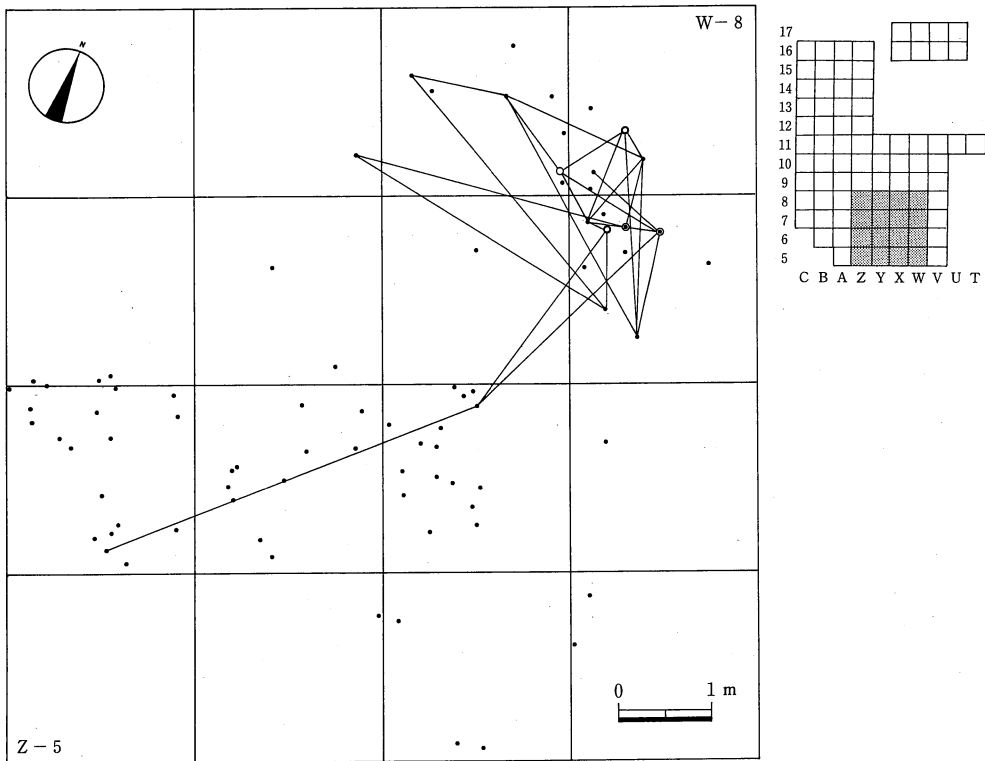
第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

母岩別資料11に分離した資料である。節理面で分割した石塊を素材にしたものと思われる。

資料 総数13点の資料であるが、接合する剥片9点を提示する。このうち7点はすでに報告されている資料である。1は背面に原礫面が残る。単剥離面打面の比較的厚みのある剥片である。6も背面に原礫面が残る比較的厚みのある剥片である。平坦な節理面を打面として剥離されており、主要剥離面には明瞭なバルブが観察できる。7は節理面に沿って剥離した剥片であり、加撃部が不明瞭である。

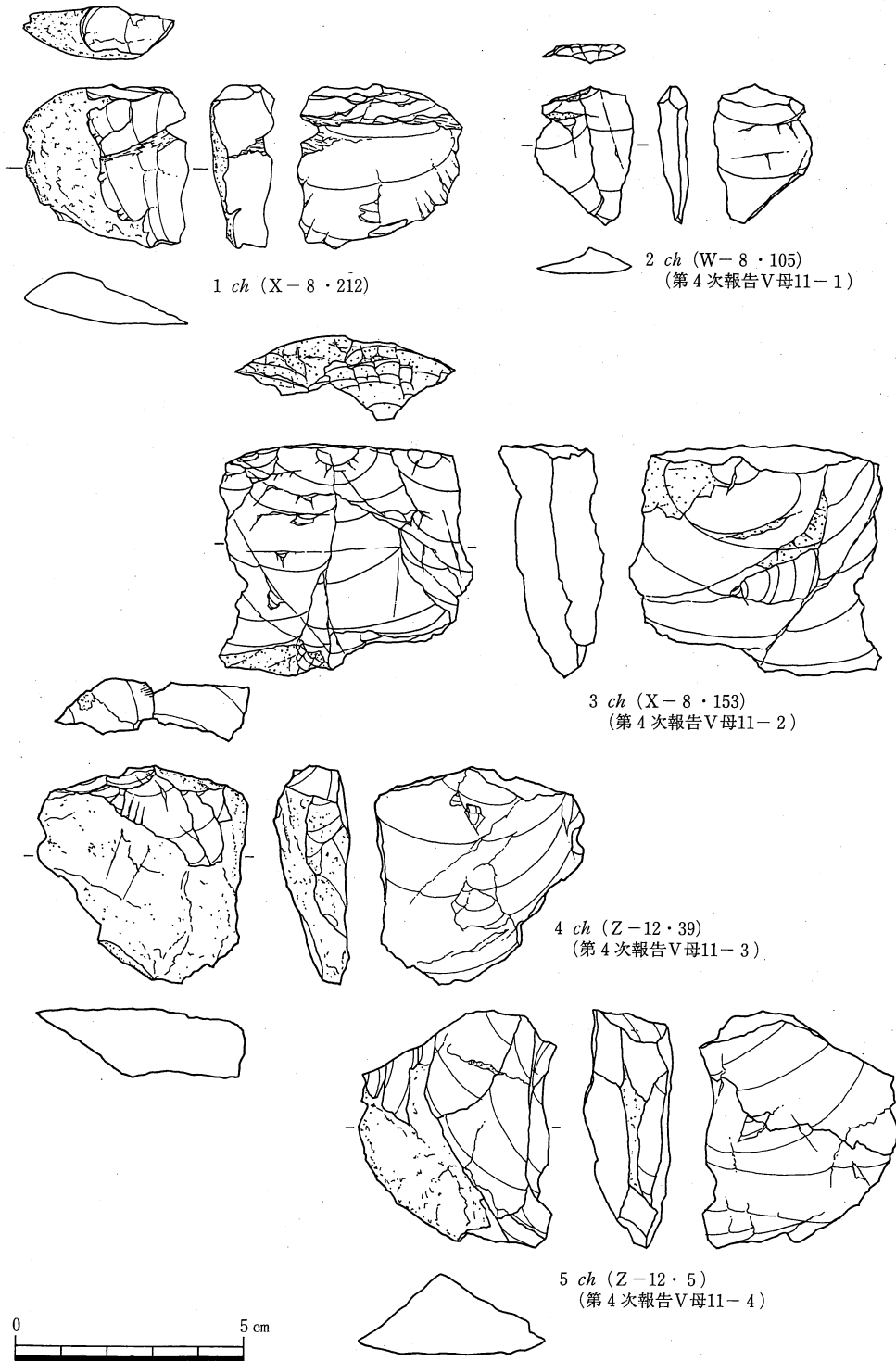
接合資料と剥片剥離工程 剥片9点からなる接合資料である。石核を伴わなわなない断片的な資料のため、剥片剥離作業のどの段階のものであるかは断定しかねるが、原礫面を残す背面をもつ剥片があることから推察して剥片剥離工程の初期の段階であると思われる。

分布 W・X-7・8区に7点、X-6区に1点、Z-5・6・7区に3点、Z-12区に2点が分布する。W・X-7・8区は第2号礫群の形成された場所と重複しており、剥片剥離の場と礫群との関連を示唆している。なお、このような分布は母岩別資料10の接合資料の分布範



第42図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料10：(1/80)

第三章 第V層文化層



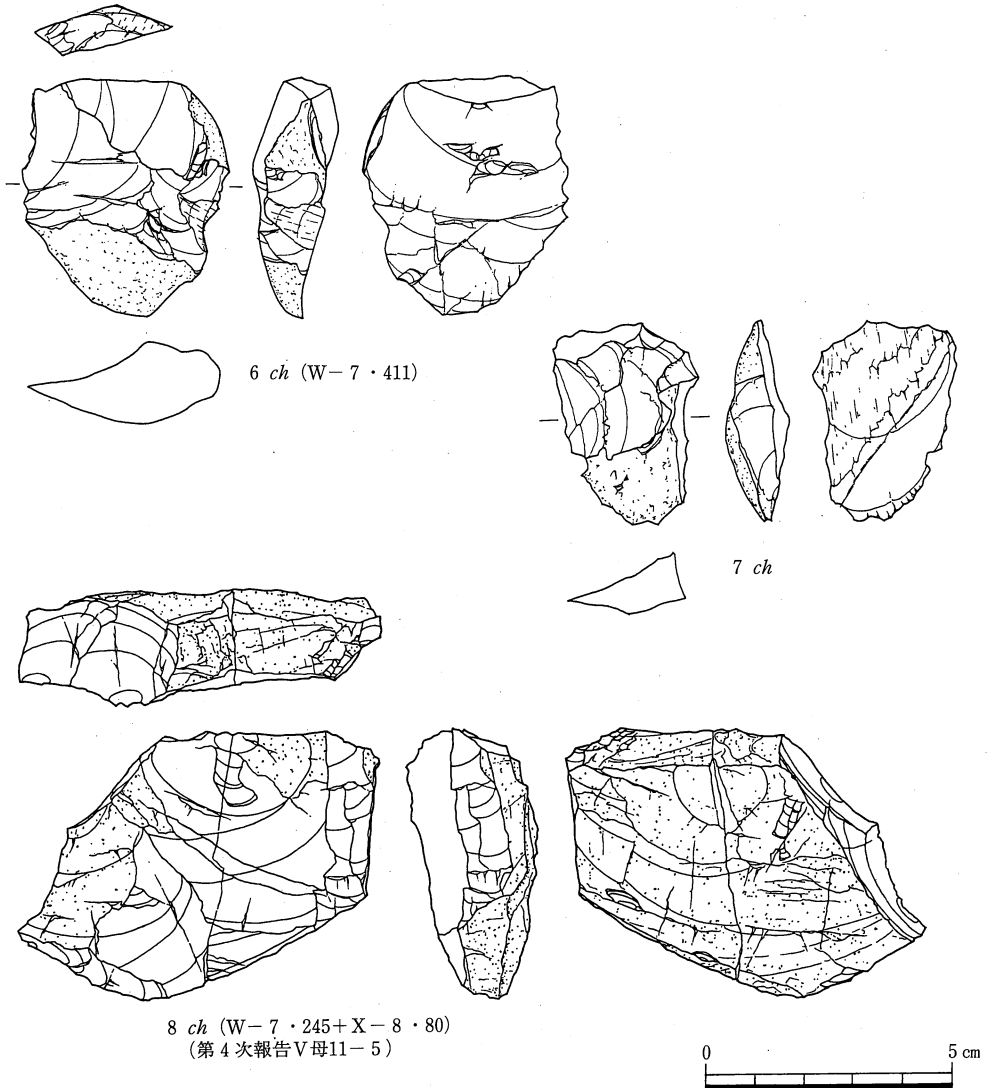
第43圖 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料11(1)(2/3)

冪と共通する。なお、本資料の剥片剥離工程を考慮すると打面形成剥片と考えられる剥片4、その打面を利用して剥離した剥片5がZ—12区にあり、その前後の段階に該当する剥片1～3、7・8がW・X—7・8区に分布しており、剥片剥離工程の進捗に伴って場の移動が推定されよう。ただし、それに複数の人間が関わっているか否かは判断できない。

(石川季彦)

(7) 母岩別資料13

母岩別資料13は、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)で母岩別資料分析を通して、第V層文化層への帰属を判断した資料である。しかしながら、第7次調査の出土資料を加えた今回

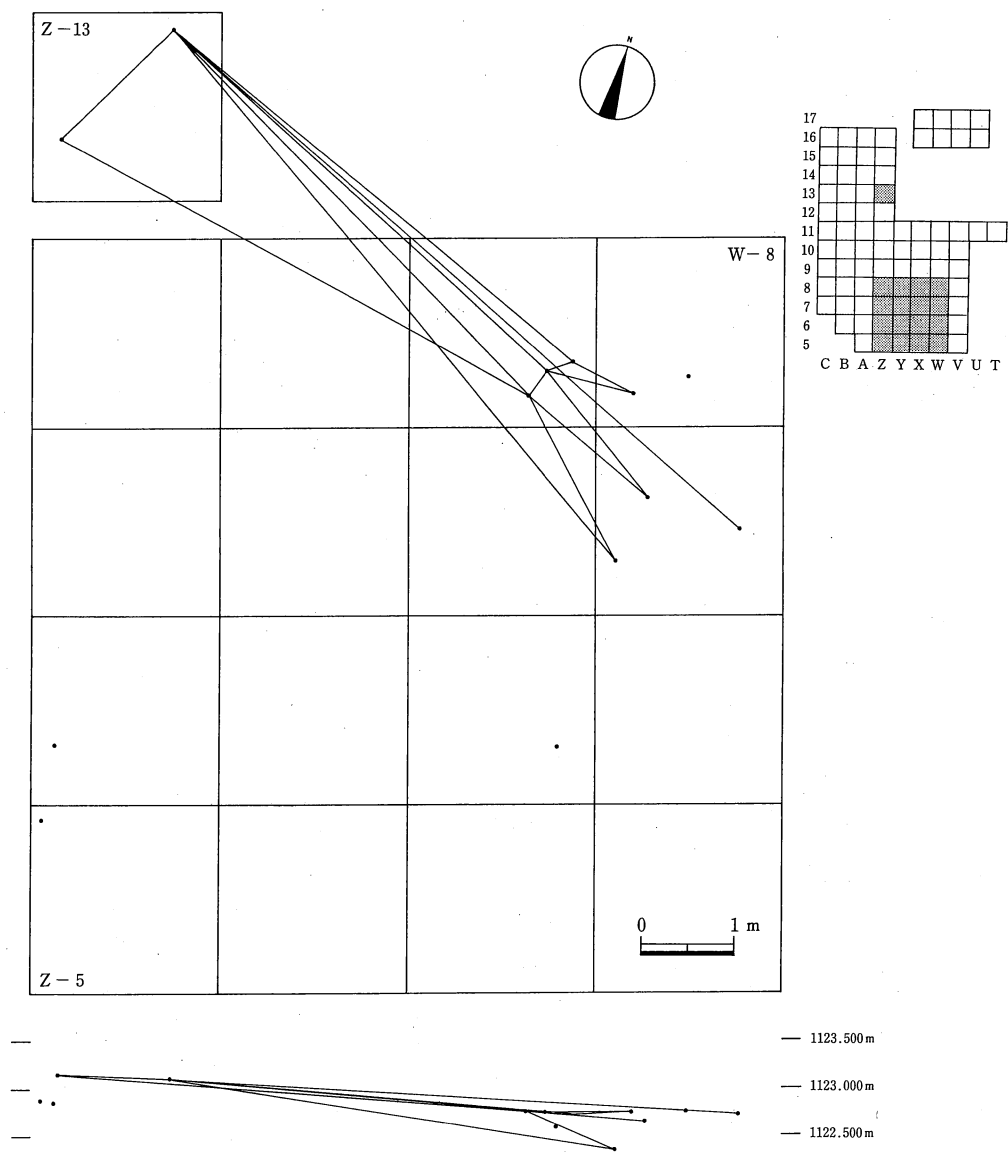


第44図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料11(2)(2/3)

第三章 第V層文化層

の母岩別資料分析によって、新たに得られた接合資料や同一母岩に含まれる資料が平面分布と垂直分布とに基づいて分離した各文化層の石器群の中では、第VI層L文化層に帰属することが明らかとなり、第4次調査報告における文化層の認定が誤りであると判断された。そこで本報告では第V層文化層から第VI層L文化層へと帰属文化層を変更し、新たに第VI層L文化層母岩別資料9として報告することとした。なお、この変更に伴って第V層文化層母岩別資料13は欠番とすることにした。

(栗田一生)



第45図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料11：分布(1/80)

(8) 母岩別資料15 (第46図～49図)

石材 チャート

石質 割口は貝殻状断口をなすが、無数の節理が縞状に入る。色調は全体に緑灰色を呈し、所々に赤褐色の縞が貫入している。

素材 拳大の河原石を節理に沿って分割したものと思われる。

資料 資料総数31点である。剥片・碎片15点、石核2点の接合資料17点を提示した。1、3～12、14～17は剥片、もしくは碎片であり、多くは節理に沿って剥離している資料である。2・13は石核で、このうち13はすでに第3次調査(永峯・谷口編 1993)で報告されている資料である。以下にそれぞれの概要を記す。

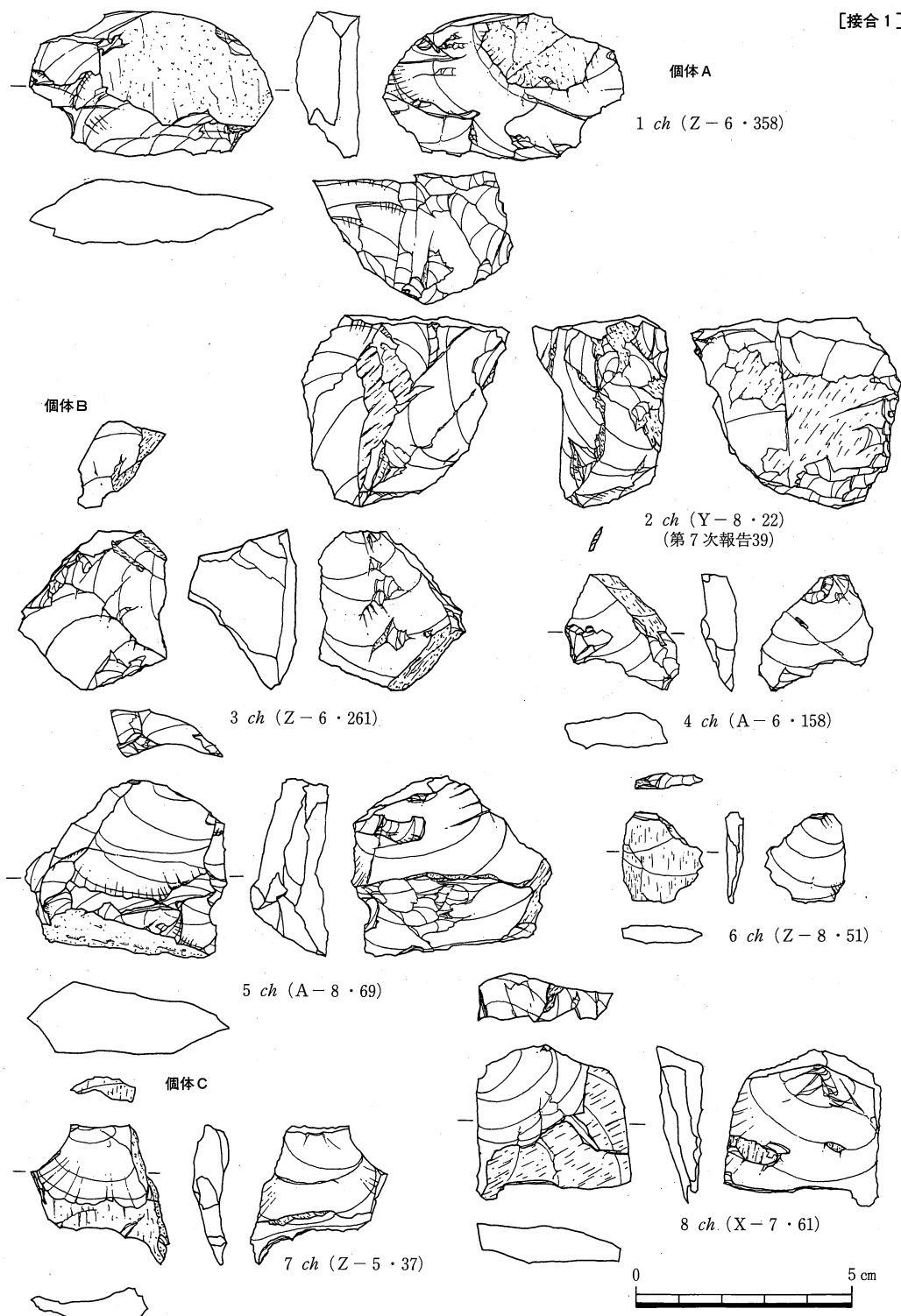
1は背面に大きな平坦な節理面を残す横長剥片であり、主要剥離面は節理により剥落している。2は素材の整形された節理面を打面として分割された石核であり、正面はその剥離面と節理面により構成されている。裏面は平坦な節理面であり剥離は右側面を打面として行なわれたようだが、接合する資料は見つかっていない。3は部厚い不定形な剥片であり、下端部に節理面を有する。4は側面に節理面を有する不定形な剥片である。5は長幅がほぼ同じで厚めの剥片であり、背面下部に原礫面を残す。6は背面に平坦な節理面を有する小さな剥片である。7は石核の13に対しての打面再生のための剥片であろう。背面と主要剥離面は同方向から剥離されており最低2回目以降に取られたものである。下端部は節理により不規則な形になっている。8は長幅がほぼ同じで厚めの剥片であり、背面に平坦な節理面を有する。9・10は8の剥離の際の加撃により生じた碎片である。11は7と同様の部厚い縦長の打面再生剥片である。背面と右側面に原礫面および平坦な節理面を有する。12は腹面右が破碎している剥片である。13は正面・下面・左側面に原礫面を残す石核であり、上面と右側面を打面とし正面・裏面を作業面としている。14は剥片剥離の際、節理により生じた碎片である。15は主要剥離面に節理面を有する部厚い縦長剥片である。背面・右側面に原礫面を残すことから、素材を調整するために取られた剥片と思われる。16は背面に節理面を有する縦長剥片であり、節理により頭部は破碎している。17は背面下部に節理面を有する縦長剥片であり、背面と主要剥離面は同方向から剥離されている。なお、本母岩別資料の接合資料の中には細部調整剥片は存在していない。

接合資料と剥片剥離工程 1～13からなる接合1、14・15からなる接合2、16・17からなる接合3の相互に接合しない3例がある。

[接合1] 2・13の石核2点を含む接合資料で、原石を任意の位置で打ち割り、個体分割したうえで、それぞれの石核の整形から打面形成にいたり、目的剥片の剥離にいたる工程が復元される。1・2の接合を個体A、3～6の接合を個体B、7～13の接合を個体Cとして以下に個体別に剥片剥離工程を記載する。

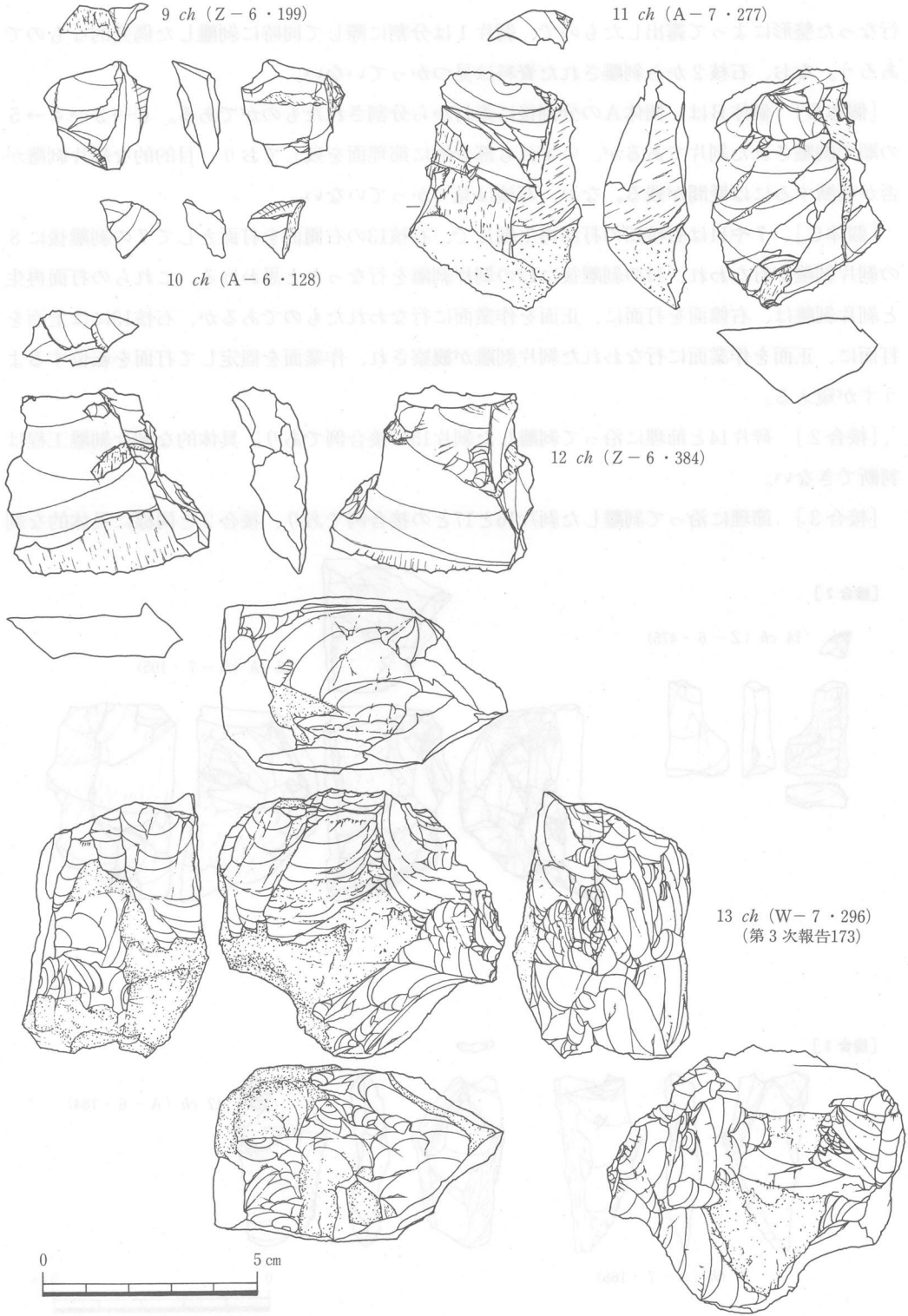
[個体A] 最初に分割された個体である。剥片1と石核2に見られる平坦な節理面は初めに

[接合1]



第46図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料15(1)(2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術



第47図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料15(2)(2/3)

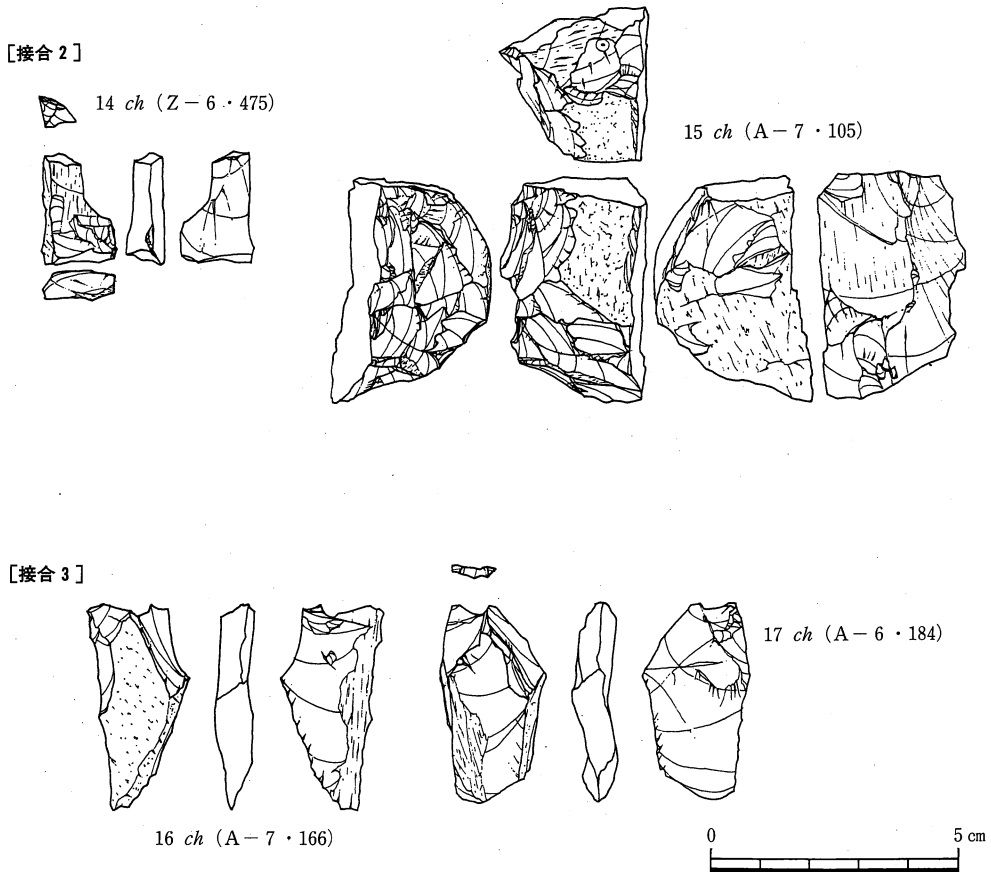
行なった整形によって露出したもので、剥片1は分割に際して同時に剥離した偶発的なものであろう。なお、石核2から剥離された資料は見つかっていない。

〔個体B〕 個体Bは、個体Aの分割後に素材から分割されたものである。6→3→4→5の順で剥離された剥片であるが、いずれも部分的に節理面を残しており、目的的な剥片剥離か否か判断するには疑問が残る。なお、石核は見つかっていない。

〔個体C〕 7や11は石核13の打面再生剥片で、石核13の右側面を打面として7の剥離後に8の剥片剥離が行なわれ、11の剥離後に12の剥片剥離を行なったと思われる。これらの打面再生と剥片剥離は、右側面を打面に、正面を作業面に行なわれたものであるが、石核13には上面を打面に、正面を作業面に行なわれた剥片剥離が観察され、作業面を固定して打面を転位するようすが窺える。

〔接合2〕 碎片14と節理に沿って剥離した剥片15の接合例であり、具体的な剥片剥離工程は判断できない。

〔接合3〕 節理に沿って剥離した剥片16と17との接合例であり、接合2と同様に具体的な剥



第48図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料15(3)(2/3)

片剥離工程は判断できない。

分布 A、W～Z-5～8区の広範囲に分布する。接合1に関わる資料はこのほぼ全域にひろがる。個体分割された個体それぞれに見た場合、個体Aの石核2はY-8区から、個体Cの石核13はW-7区からそれぞれ出土しているが、接合する剥片・碎片の分布は個体分割の単位に関わらずA・Z-6・7区に集中しており、剥片剥離工程の進行とそれに伴う剥片・碎片の分布の間には関連が認められない。なお、接合2と接合3に関わる資料も接合1とほぼ同様の範囲に分布する。

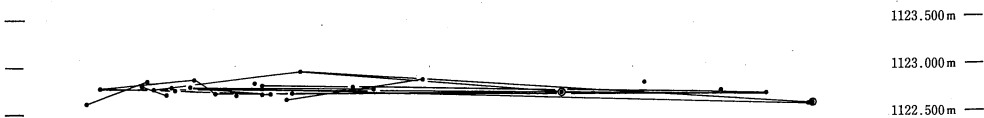
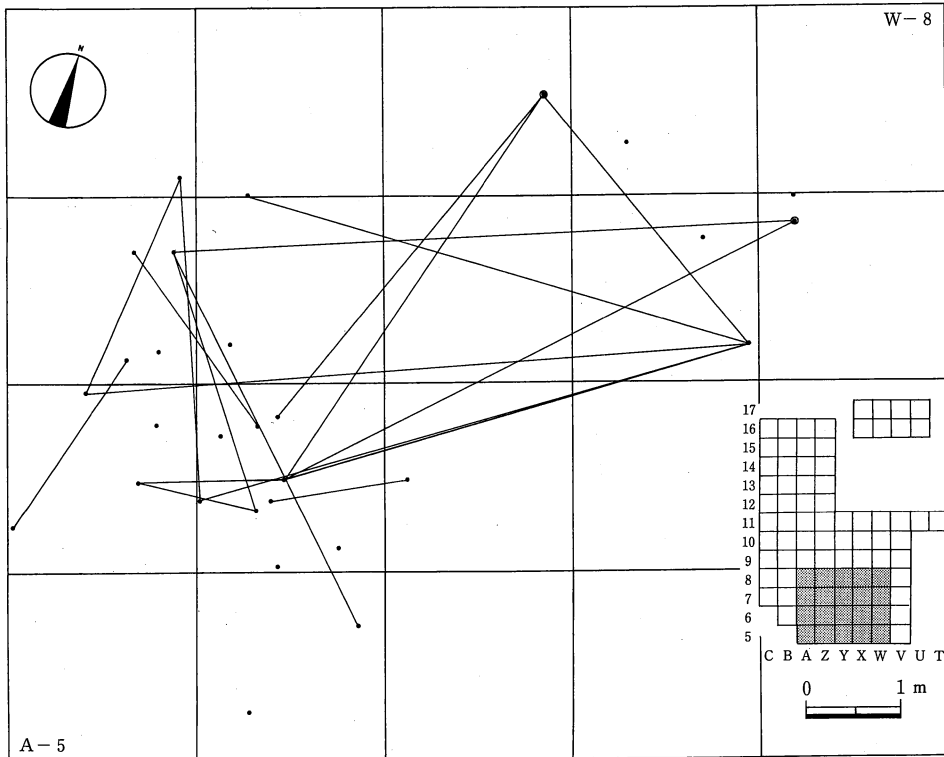
(小久保拓也)

(9) 母岩別資料16 (第50～52図)

石材 チャート。

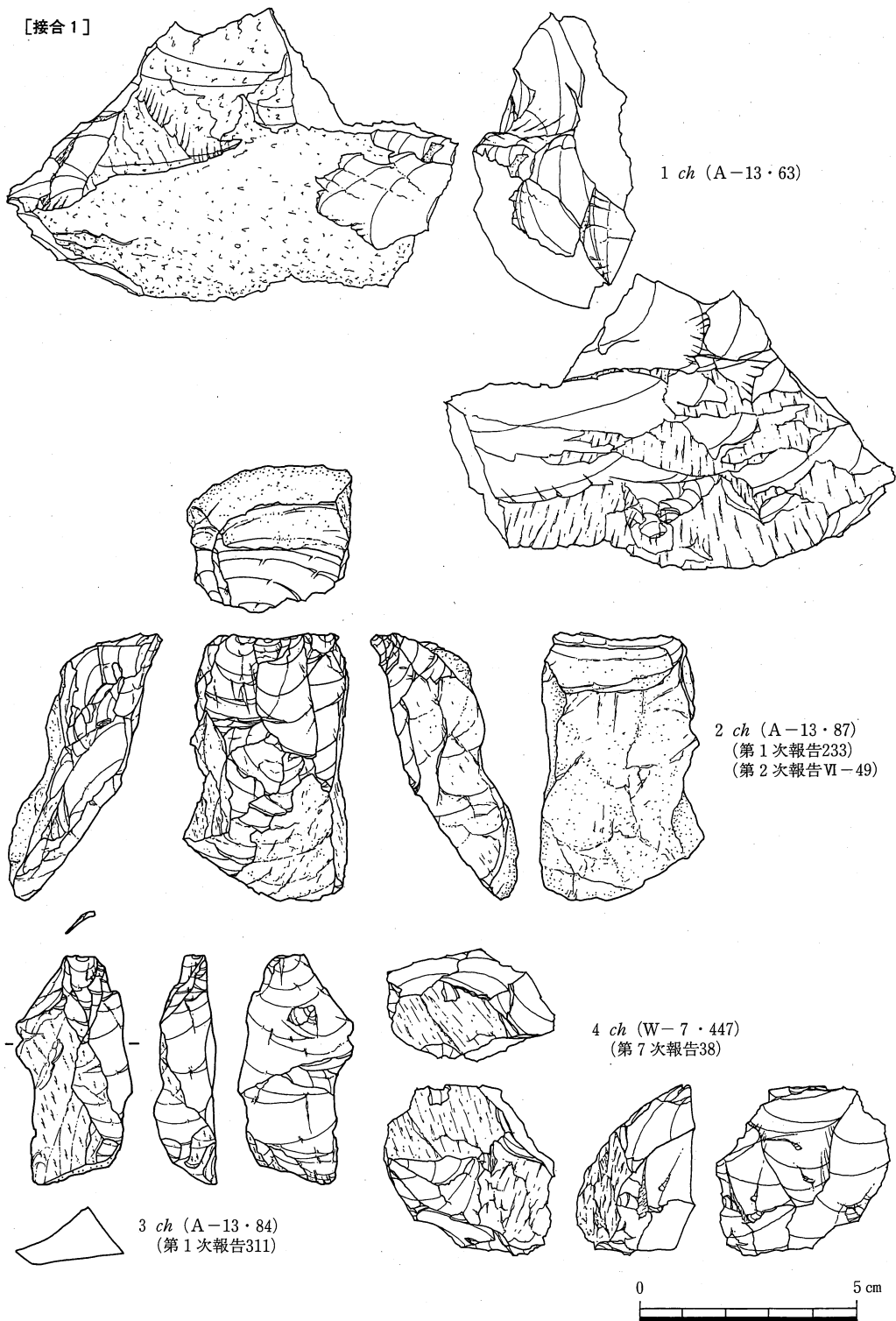
石質 全体に淡い緑色を呈し、縞状の節理が入る。

素材 拳大程度の河原石を節理に沿って分割したものと思われる。



第49図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料15：分布(1/80)

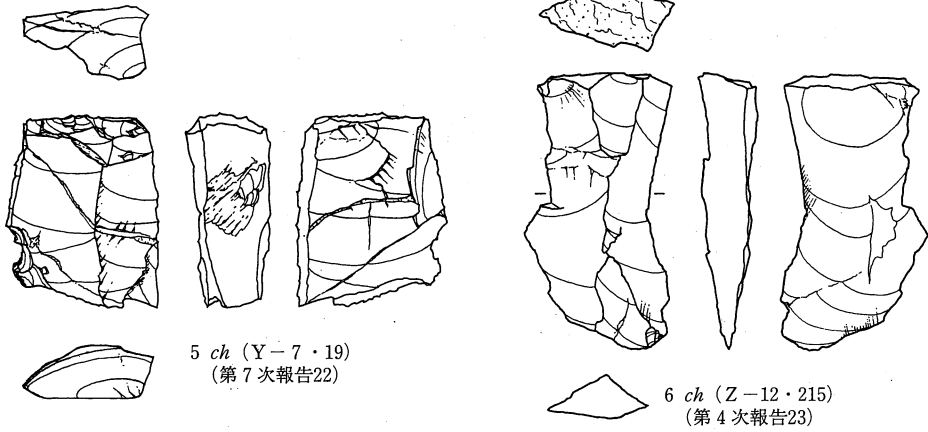
[接合1]



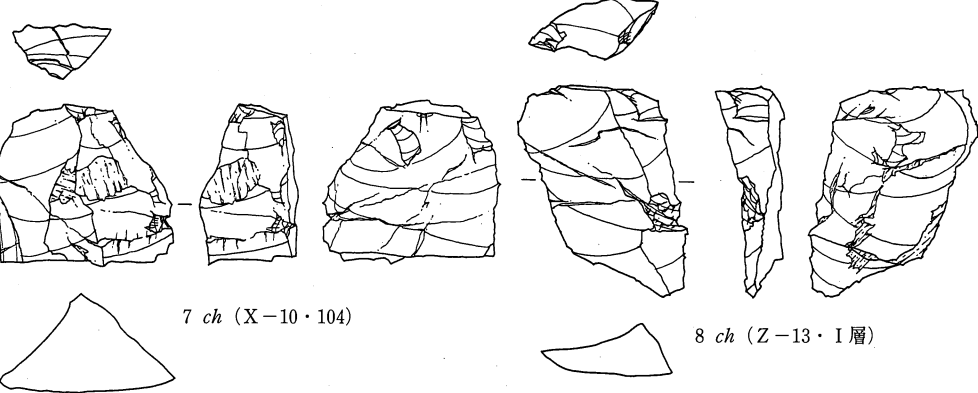
第50圖 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料16(1)(2/3)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

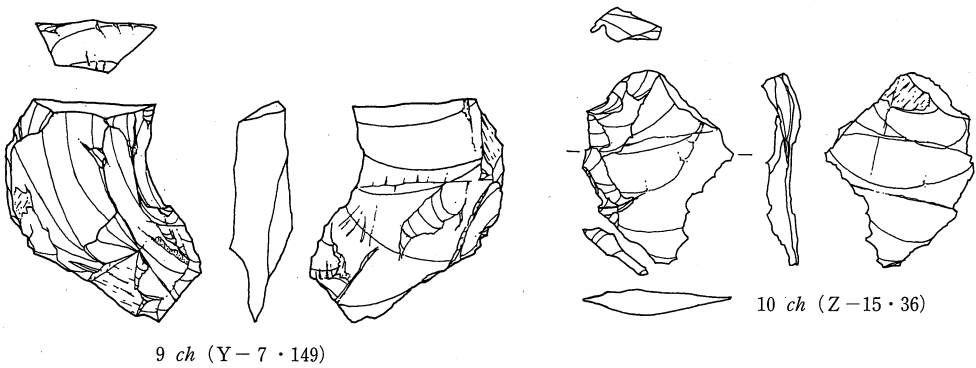
[接合 2]



[接合 3]



[接合 4]

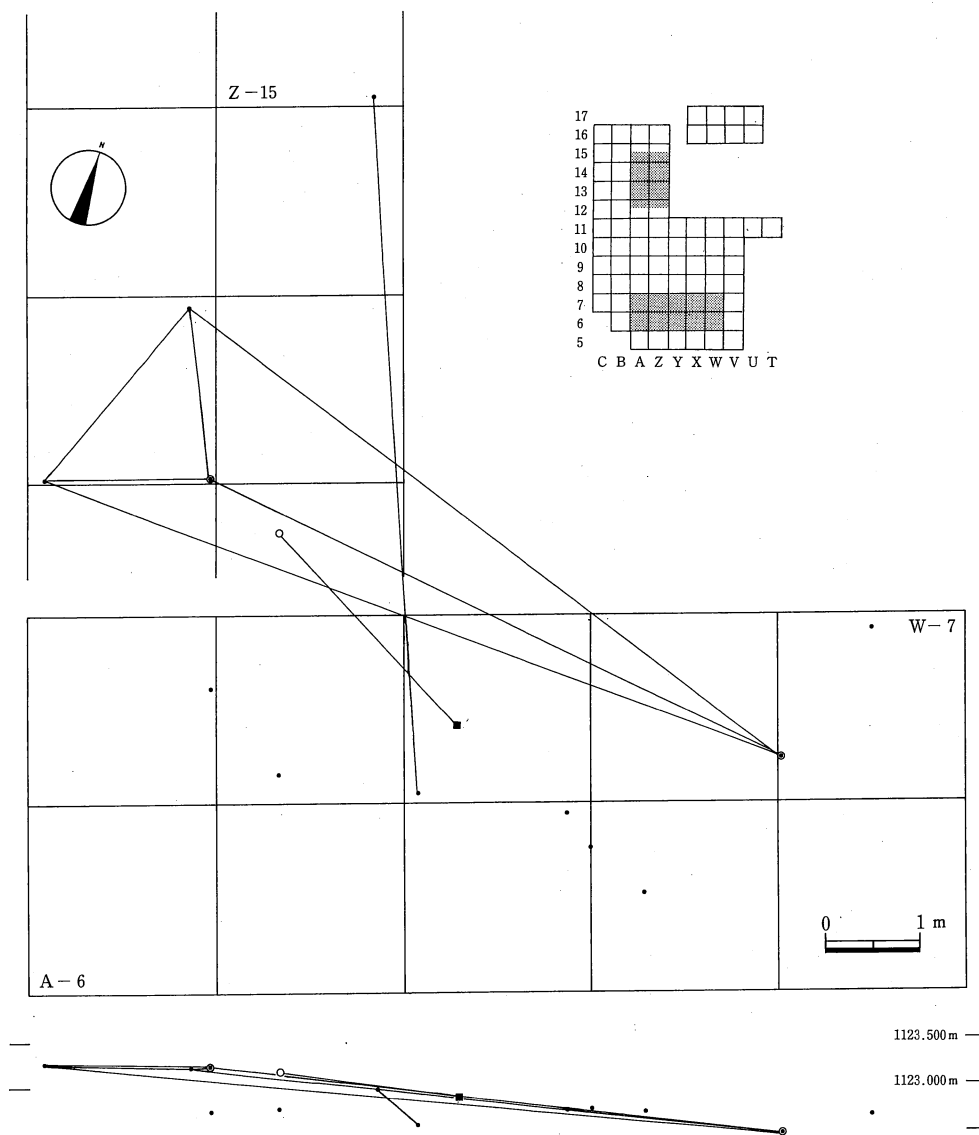


第51図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料16(2)(2/3)

第III章 第V層文化層

資料 資料総数16点からなる。剥片6点、抉入石器1点、石刃状剥片1点、石核2点の10点を図示した。

1は部厚い横長剥片で、打面を含む上面は節理に沿って破碎している。背面の大部分を占める原礫面から、素材の調整を目的とした調整剥片と思われる。2の石核は第1次調査（小林編 1990）で第V層出土資料として報告され、第2次調査報告（小林・谷口編 1991）で第VI層文化層と認定されていた資料であるが、今回の母岩別資料を経て第V層文化層へ帰属を変更した。3は第1次調査で報告（小林編 1990）されている部厚い縦長剥片であり、背面に平坦な節理



第52図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料16：分布(1/80)

面が認められる。4は上面と正面に節理面のある小振な石核で、上面の節理面を打面とした作業面が裏面に認められる。5はやや厚めの縦長剥片の左側縁に調整を加えた抉入石器である。6は第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)に石刃状剥片として提示されている。7は厚めの剥片で、背面に稜を持ち下端部は折損している。8は縦長の不定形な剥片であり、下端部は節理により折損している。9は節理による縦長の不定形な剥片である。10は節理による縦長の不定形な剥片であり、下端部は節理により折損している。

接合資料と剥片剥離工程 1～4からなる接合1と、5・6からなる接合2、7・8からなる接合3、9・10からなる接合4があるが、それぞれの接合例同士は接合しない。また、いずれも断片的な資料のため、剥片剥離工程を十分に理解し得る資料ではない。

[接合1] 剥片1は素材の整形を目的とした剥片と考えられる。主要剥離面の下部に見られる節理面が石核2の正面に見られる節理面と接合する。石核2の打面や作業面に当たる剥離面に接合する資料はないが、節理面に剥片3の背面と石核4の正面とが接合する。素材を荒割りし整形した後に分割された石核が2と4であろう。ただし、石核2・4と剥片3は節理に沿って割れたものであり、また、石核2と4の作業面に接合する剥片も確認されていないため、具体的な剥片剥離工程を復元するにはいたっていない。

[接合2] 石刃状剥片6の背面左側に抉入石器5が接合したものである。いずれもやや厚めの剥片を石器素材にしていることが特徴的である。

[接合3] 剥片8の背面左側に剥片7が接合する。接合2と同様の厚めの剥片であり、単剥離面打面から連続して剥離されていることと考え併せると、分厚い剥片を目的的に剥離している可能性が高い。

[接合4] 剥片10の背面に剥片9が接合する。剥片9の背面の剥離面と接合する剥離面の加撃方向は90°異なっており、作業面を固定しての打面転位が予測される。

分布 A・Z-13～15区とA・W-6・7区という2ヶ所に分布のまとまりがある。接合資料との関連で見ると、接合1の石核2と剥片1・3はA-13区から、石核4はW-7区からそれぞれ出土し、接合2の石刃状剥片5はZ-12区から、抉入石器6はY-7区からそれぞれ出土している点に注意される。接合1に関しては剥片剥離工程に個体分割の可能性があり、具体的な剥片剥離の場と、母岩の共有や分配のようすを窺わせる。また、いずれも製品となっている接合2は、石器製作後の使用に関わる場への移動を窺わせるものであろう。

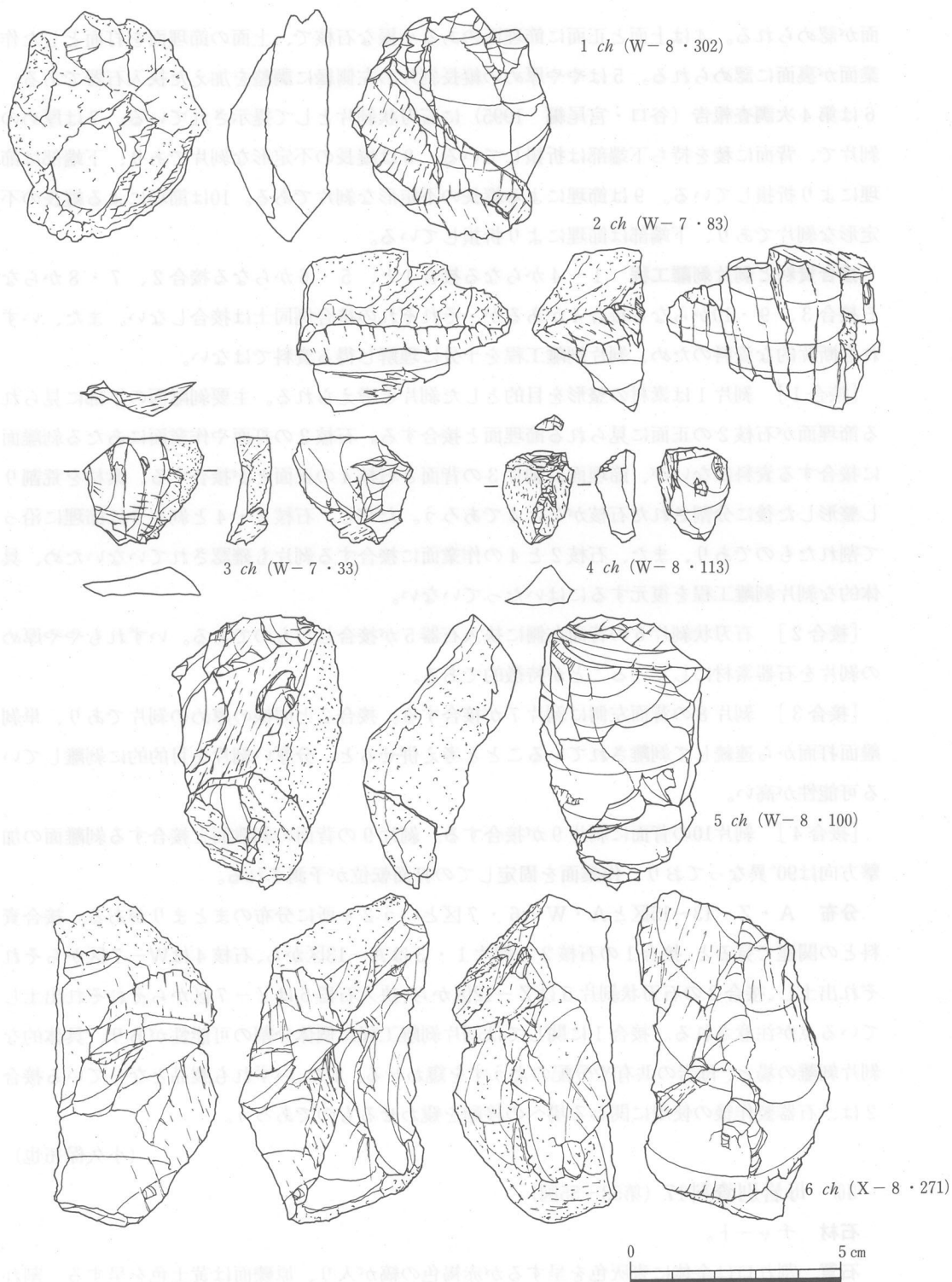
(小久保拓也)

(10) 母岩別資料17 (第53～55図)

石材 チャート。

石質 割れ口は全体に青灰色を呈するが赤褐色の縞が入り、原礫面は黄土色を呈する。割れ口は貝殻状断口をなすが、無数の節理がある。

第三章 第V層文化層



第53図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料17(1)(2/3)

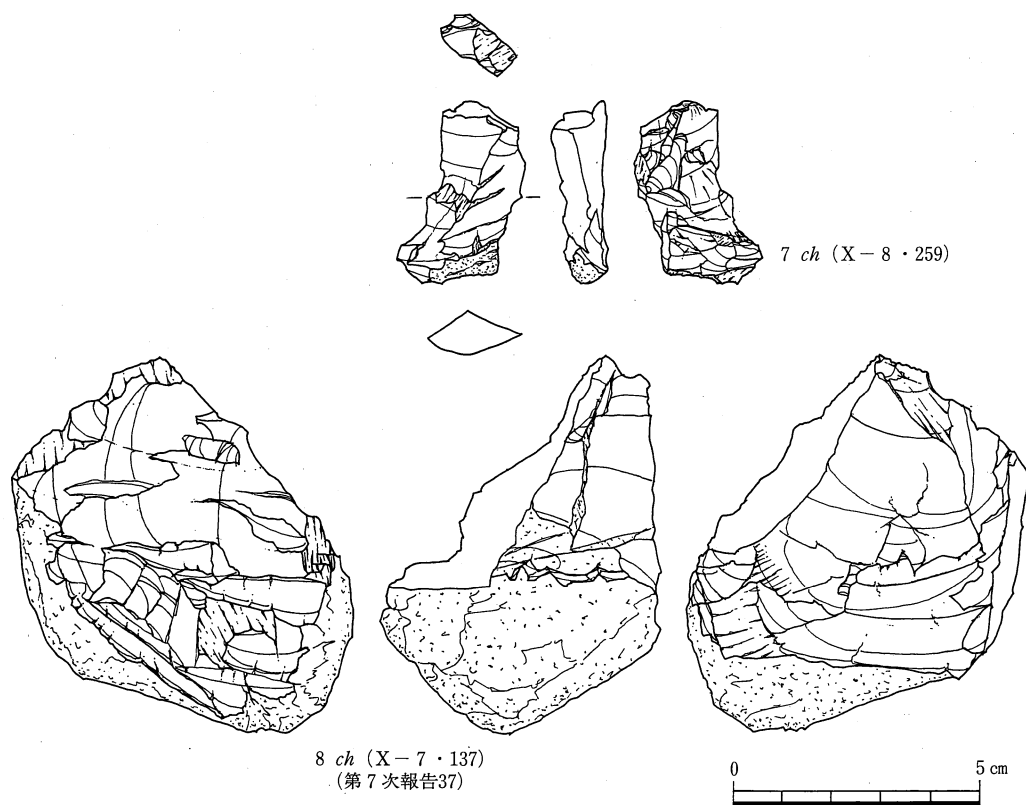
第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

素材 やや大きめの拳大程度の河原石を節理に沿って分割したものである。

資料 資料総数17点からなる。剥片7点、石核1点の8点を図示した。

1は背面に原礫面を残す部厚い不定形な剥片であり、主要剥離面は節理に沿って剥落したものである。打面を含む上部は破碎している。2は背面に原礫面を残す部厚い不定形な剥片である。縦に縞状に節理が入り、接合する碎片は破碎したものである。3は節理面を打面とした剥片だが、加撃された力は節理により下端まで抜けず、不定形な剥片になっている。4は背面に原礫面を残すことから整形を目的とした剥片と思われる。5は背面に大きく原礫面を残す部厚い縦長剥片である。打面を含む上部と下端部は節理により折損している。6は背面と右側面に大きく原礫面を残す部厚い剥片であり、主要剥離面は節理に沿って剥落したものである。7は背面下端部に原礫面を残す剥片であり、上部の節理面を打面とし、主要剥離面は節理によって階段状になっている。8は下端部のどの面にも原礫面を残す石核であり、側面の原礫面を打面とし整形を行ない、裏面を作業面としている。なお、これらの資料にはいずれも打面調整・頭部調整が認められない。

接合資料と剥片剥離工程 1～8として図示した剥片・碎片7点、石核1点からなる接合資



第54図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料17(2)(2/3)

料である。これらの中には細部調整剥片は含まれていない。

剥片1は素材の平坦な原礫面を打面とした整形剥片であり、主要剥離面が剥片6の背面と接合する。剥片2は180°打面転位して同じく素材の平坦な原礫面を打面とした整形剥片であろう。この整形によって露出した節理面を打面として剥片3が剥離されているが、節理に阻まれて下端まで加撃が抜けず、再度180°打面転位して剥片4の剥離は行なわれたものと思われる。また、剥片5・6は改めて原礫面を打面として整形を行なった結果であり、剥片7はそれによって露出した節理面を打面とした剥離である。本接合資料ではいずれの剥片も分厚く、原礫面を残している。剥片剥離のために石核整形を行なうために加撃を繰り返したが、節理に阻まれて目的とした剥片剥離にいたらずに廃棄されたものと思われる。

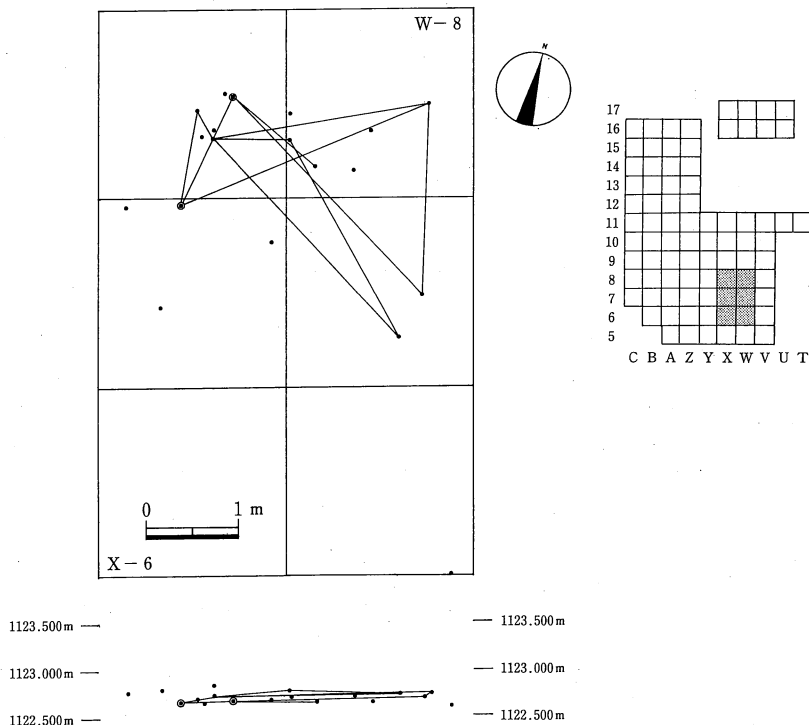
分布 X・W-7・8区に分布が集中し（第55図）、石核の整形の段階において放棄したと考えられる本母岩別資料の接合状態の性格をよく示しているとともに、第V層文化層における石器生産に関わる具体的な剥片剥離の技術上の特徴をあらわしているようである。

（小久保拓也）

(11) 母岩別資料18（第56～60図）

石材 チャート。

石質 青灰色を呈し、緻密かつ均質で割れ口は貝殻状断口をなすが縞状に節理が入る。



第55図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料17：分布(1/80)

素材 河原石を節理面に沿って分割したものと思われる。

資料 資料総数は19点であるが、細部調整剥片2点、剥片5点の7点を図示する。

1は不定形な分厚い剥片である。打面調整および頭部調整は認められない。背面には原礫面がみられ、主要剥離面と対向する加撃の剥離面がある。剥離の際に縦方向に破碎している。2は主要剥離面右側縁に細部調整のある剥片である。右側面に原礫面を、下端に節理面を残す。剥片下端が節理に沿って破碎している。3は頭部付近の破碎した剥片である。4は破片で、背面は原礫面で構成される。5は下端部背面側に加工のある細部調整剥片である。原礫面を打面とした比較的分厚い剥片で左側が折断している。なお、5の折断破片が6である。7は5の背面を打面として剥離された小形の剥片である。

接合資料と剥片剥離工程 1～4からなる接合1と5～7からなる接合2との2例があり、相互には接合しない。

両接合資料ともに石核は含んでいないうえ、わずかな資料の接合にとどまっているため、具体的な剥片剥離工程は判断できない。しかしながら、細部調整剥片や微細剥離痕を有する剥片が、接合資料の数に対して多いことが注意される。

ちなみに、石刃やいわゆる縦長剥片や横長剥片などの目的的な剥片に限らず、このように剥片剥離工程で生じるさまざまな形状を剥片に対して細部調整を施したり、微細剥離痕が顕著に認められる母岩別資料に含まれる接合資料は、第VI層L文化層に多く認められる傾向であり、本母岩別資料の分布する範囲と関係して、文化層の帰属に関して誤認している可能性がある。

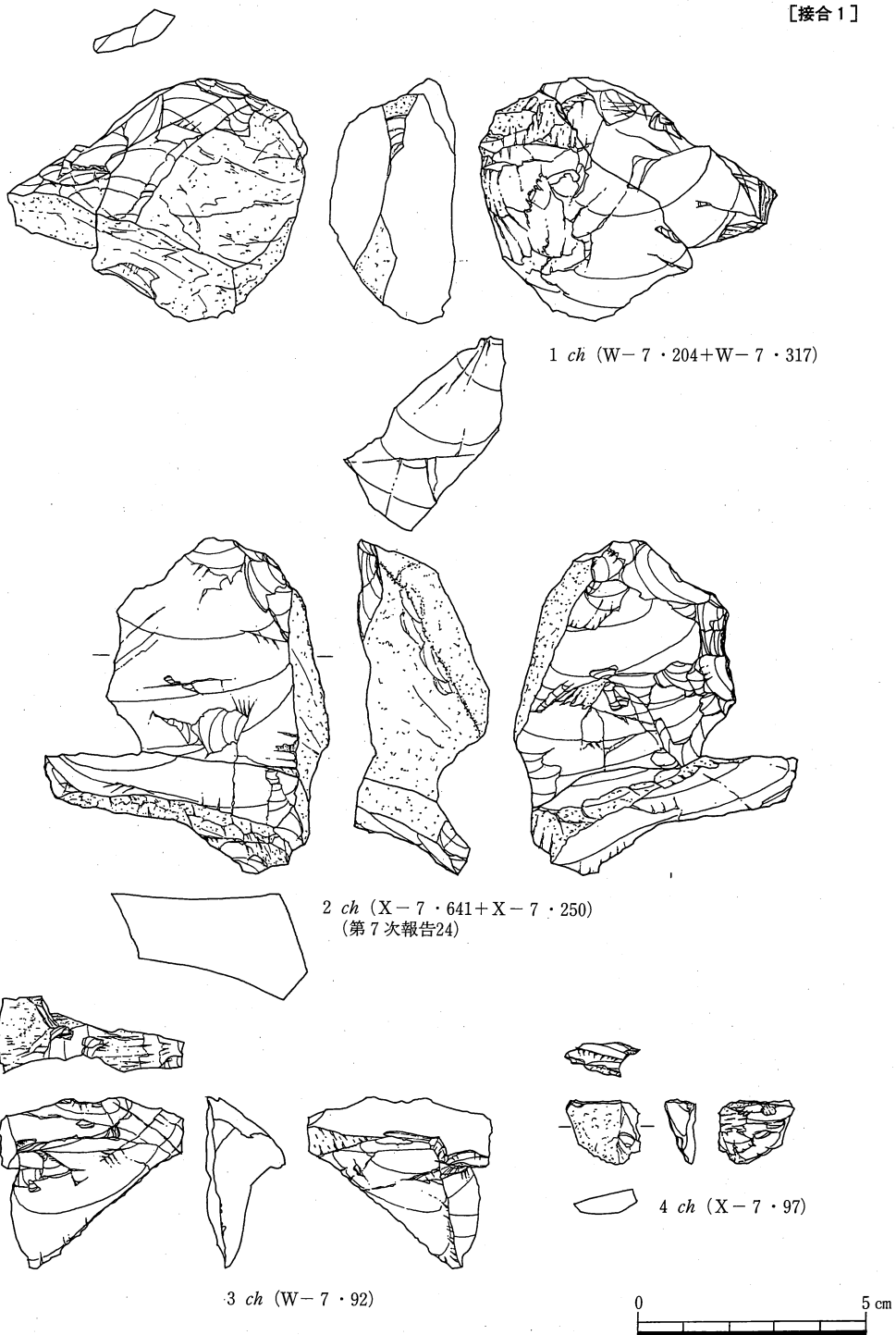
[接合1] 剥片1と細部調整剥片2とが剥片3の背面に接合し、剥片4の打面が剥片3の腹面に接合する。原礫面を残す剥片が多く、石核整形の初期段階と考えられる。

[接合2] 折断した剥片に細部調整の加えられている5に折断した6が接合し、剥片7の腹面が剥片5の背面に接合する。

分布 W～Z-6～8区にかけて分布する。特にW・X-6・7区に細部調整剥片を含む接合資料は限定的に存在する点に注意される。そして、それらの接合資料が分布する範囲が、第VI層L文化層の石器群の分布のまとまりである第VI層L文化層石器ブロック3と重複している点は、接合資料と剥片剥離工程の項で記したように、文化層の帰属に関して誤認している可能性を内在させているが、接合資料に含まれるそれぞれが含まれる垂直分布のまとまりが、第V層文化層に帰属すべき石器群であったことを根拠に第V層文化層に帰属させている。

また、同様の分布傾向を示す第V層に帰属する母岩別資料を本母岩別資料の他にも多数の認めている点も消極的ながら、本母岩別資料の第V層文化層への帰属に関する根拠として採用している。これらの母岩別資料は、いずれも原礫素材を無作為に剥片剥離して、任意に石器の素材を求めている点で共通しており、このような剥片剥離に見られる特徴を第V層文化層における剥片剥離の技術的な特徴と認識する限り、消極的な根拠ながらも、蓋然性を得られるものと

[接合1]



第56図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料18(1)(2/3)

考えている。

このような微妙な文化層の分離に関わる問題は、7年次にわたる柳又遺跡A地点の発掘調査とその分析過程では絶えず意識されてきたことであるが、今なお将来的な課題として明記する必要がある。

(阿部奈緒美)

(12) 母岩別資料19 (第59・60図)

石材 チャート。

石質 青灰色を呈する。石質は均質かつ緻密であり透明度も高いが多数の節理が見られる。

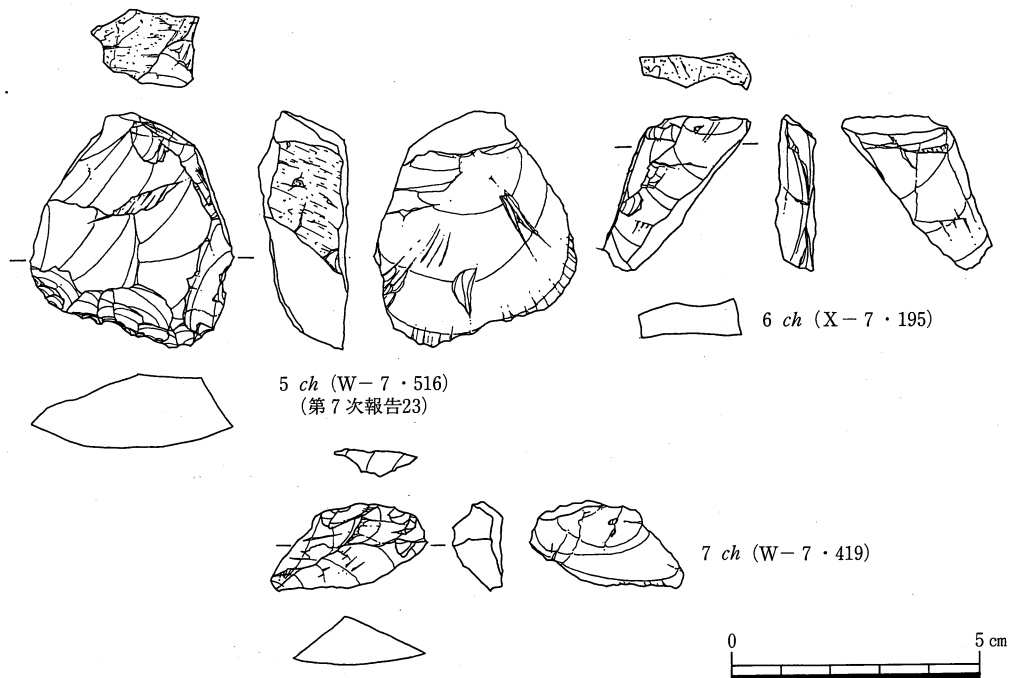
素材 角礫を節理面に沿って分割した状態の石塊である。

資料 資料総数22点である。剥片6点、石核1点を図示する。

1は分厚い剥片である。右側面・左側面に大きく節理面を残す。2はやや縦長の剥片である。3と4とはひじょうに分厚い縦長の剥片で、下端に節理面をもつ。5と6は折れた分厚い剥片の上下である。7は石核であるが、打面や作業面の大部分を節理面になっている。

接合資料と剥片剥離工程 1～7の剥片6点、石核1点からなる接合資料である。接合した剥片背面と石核から判断して、上下に180°打面転位を行いながら剥片剥離を行う工程が理解されるが、剥離された剥片はすべて分厚いものであり、また、同時にそれらの剥片剥離が節理面

[接合2]



第57図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料18(2)(2/3)

に沿ったものであることから、それらが目的的な剥片剥離を示しているかものか否かは判断に苦しむ資料である。

分布 A・W～Z-5～9区に分布する。特にW・X-6・7区に集中し、石核を含む接合資料の多くもこの範囲に存在している。

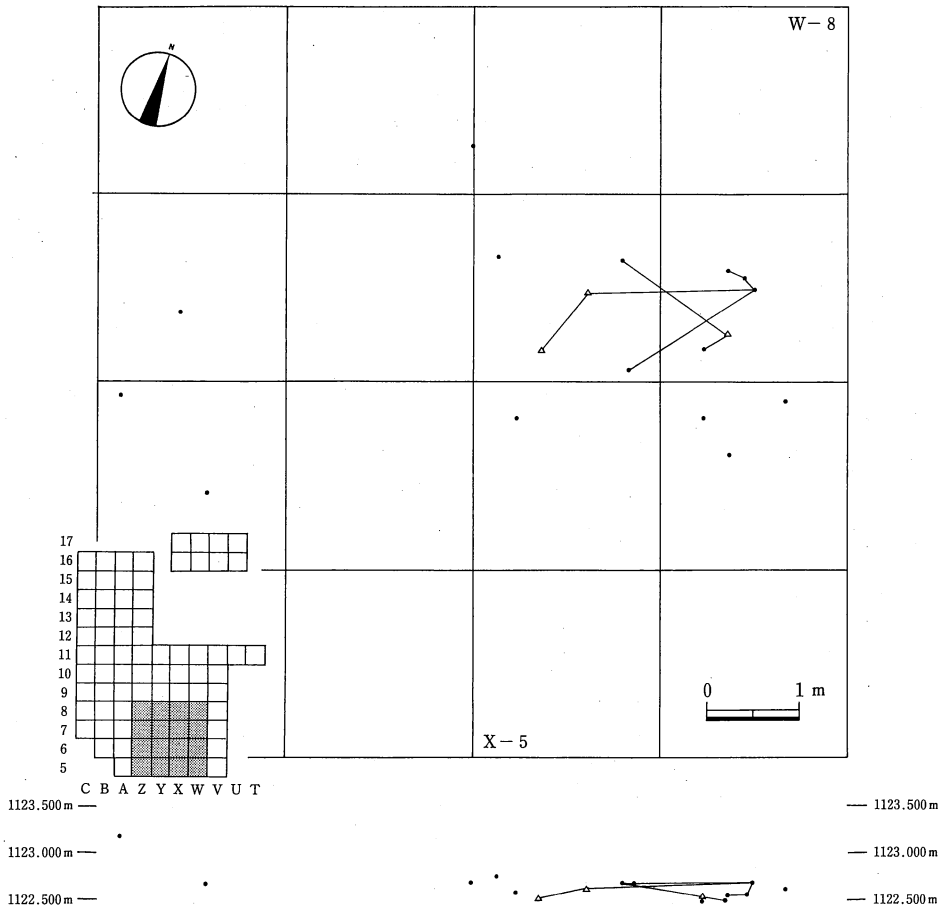
(阿部奈緒美)

(13) 母岩別資料20 (第61・62図)

石材 チャート。

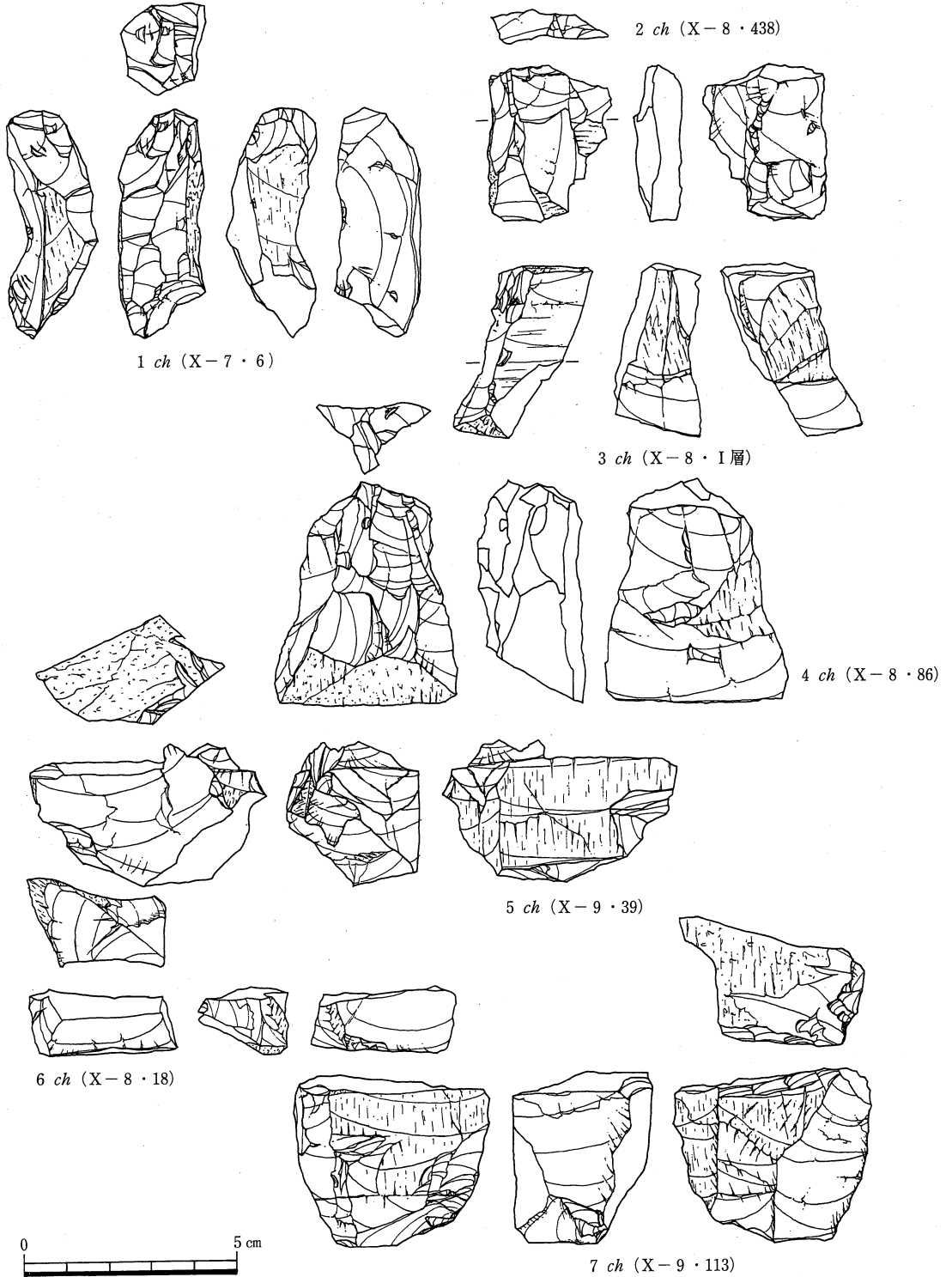
石質 緻密かつ均質であるが随所に節理が見られる。脂肪光沢をもち、割れ口は貝殻状断口をなす。色調は赤褐色であるが縞状に青緑色の部分が入る。

素材 1・4の背面に残る原礫面から、偏平な河原石を素材としたことが想定される。



第58図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料18：分布(1/80)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

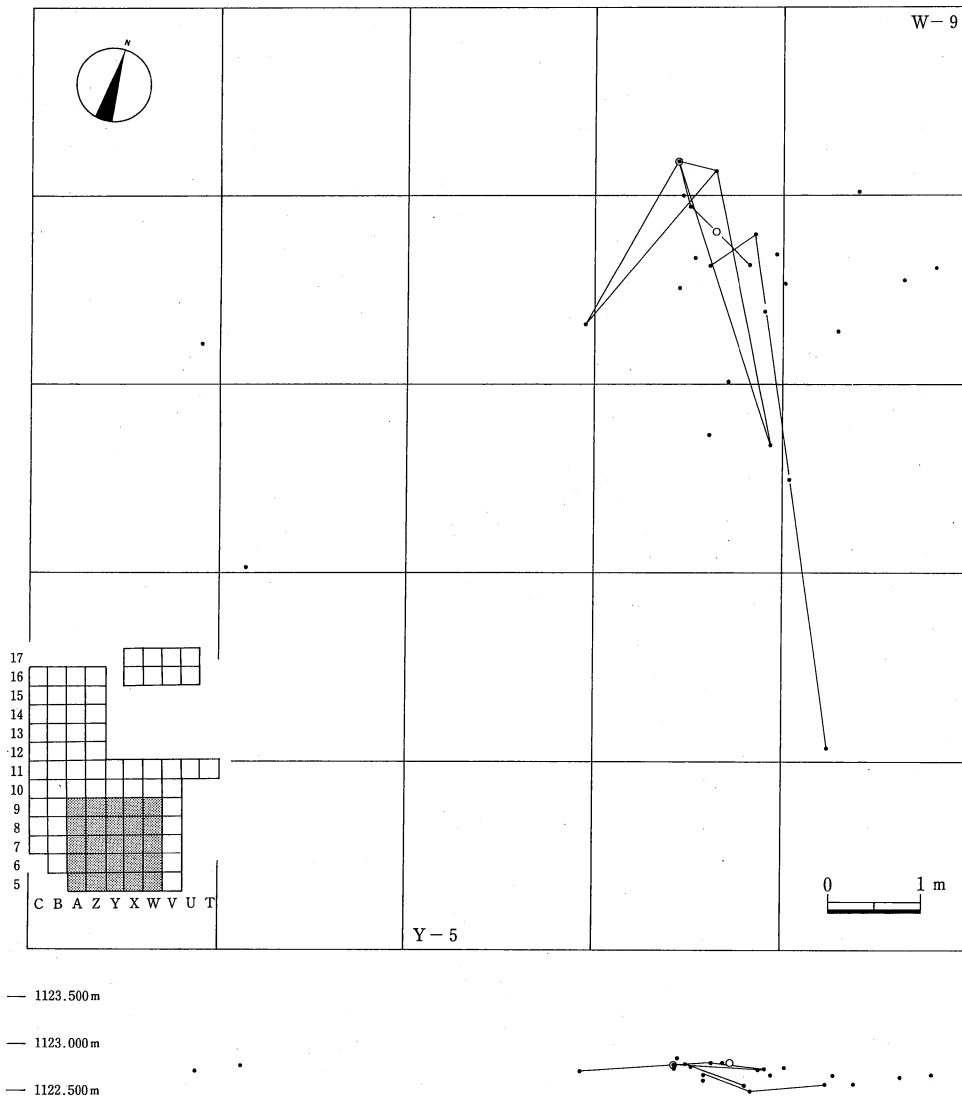


第59図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料19(2/3)

資料 資料総数10点からなる。剥片7点を図示する。

1は節理面を打面とした剥片で、背面は原礫面からなる。腹面に3が接合する。2は原礫面を打面とした不定形な剥片であるが、剥片中央の節理面で折れている。3は1の剥離の際に生じた破砕片である。4は比較的分厚い剥片で背面の大半が原礫面をなす。5は不定形な剥片であり、背面に原礫面を残す。左側縁が折れている。6は5の右側面に残る剥離面を打面とした剥片であるが、最低2ヶ所の折断が認められる。背面を構成する剥離面は主要剥離面と同一方向の加撃のみを示す。1～6のいずれの剥片にも打面調整や頭部調整は認められない。

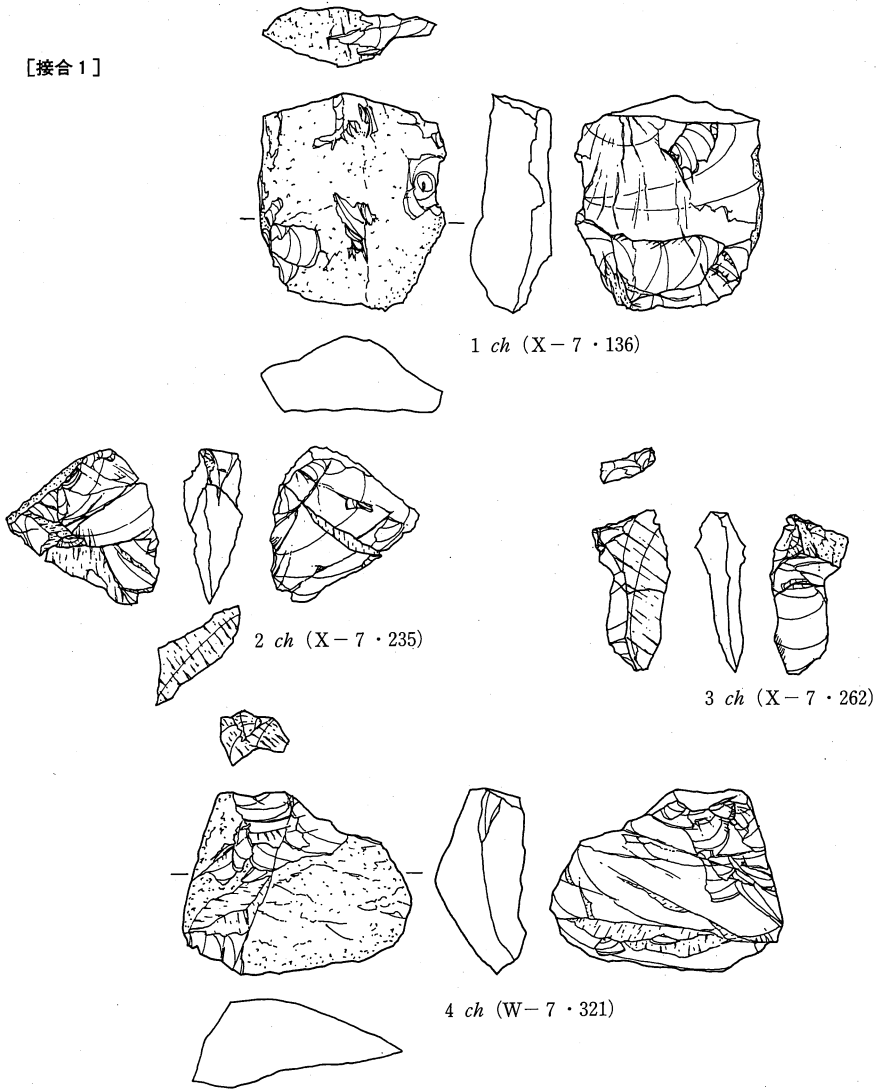
接合資料と剥片剥離工程 1～4からなる接合1、5・6からなる接合2の2例がある。こ



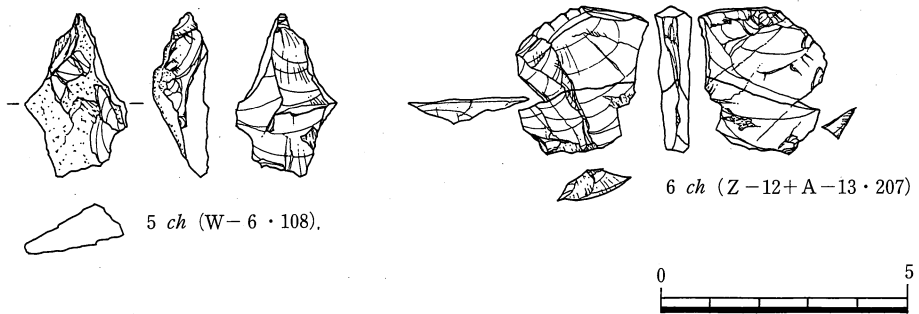
第60図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料19：分布(1/80)

第4節 母岩別資料と剥片剥離技術

[接合1]



[接合2]



第61図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料20(2/3)

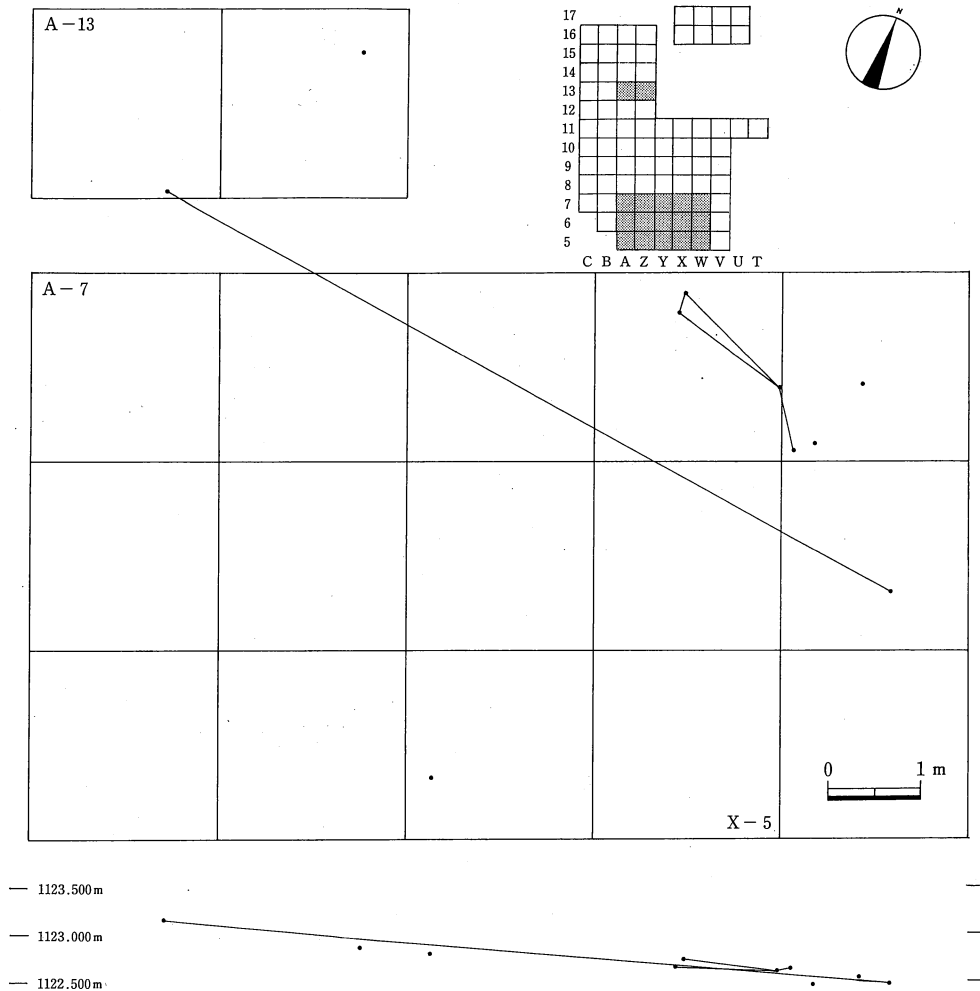
の2例は相互に接合しないものである。両者ともに剥片相互の断片的な接合事例であり、剥片剥離工程の全容は、具体的に把握できない。

[接合1] 原礫面が多く残り、原礫面や節理面に対して頻繁に打面転位を繰り返しながら石核整形を行う剥片剥離工程の初期段階であり、接合資料はいずれも整形剥片と推定される。

[接合2] 剥片5が剥片6の背面に接合する。剥片5には接合1同様に原礫面が残っており、比較的剥片剥離工程初期の剥片であろう。

分布 W・X-6・7区で散漫なまとまりを示す以外は、特に集中した分布状態は見られない。接合1に関わる資料がW・X-7区に限定的な分布を示すが、接合2はW-6区とA-13区とから出土した資料である。

(阿部奈緒美)



第62図 第7次発掘調査資料 第Ⅴ層文化層 母岩別資料20:分布(1/80)

(14) 母岩別資料21 (第63・64図)

石材 チャート。

石質 緻密かつ均質で割れ口は貝殻状断口をなす。色調は茶色を呈すが縞状の濃淡がある。

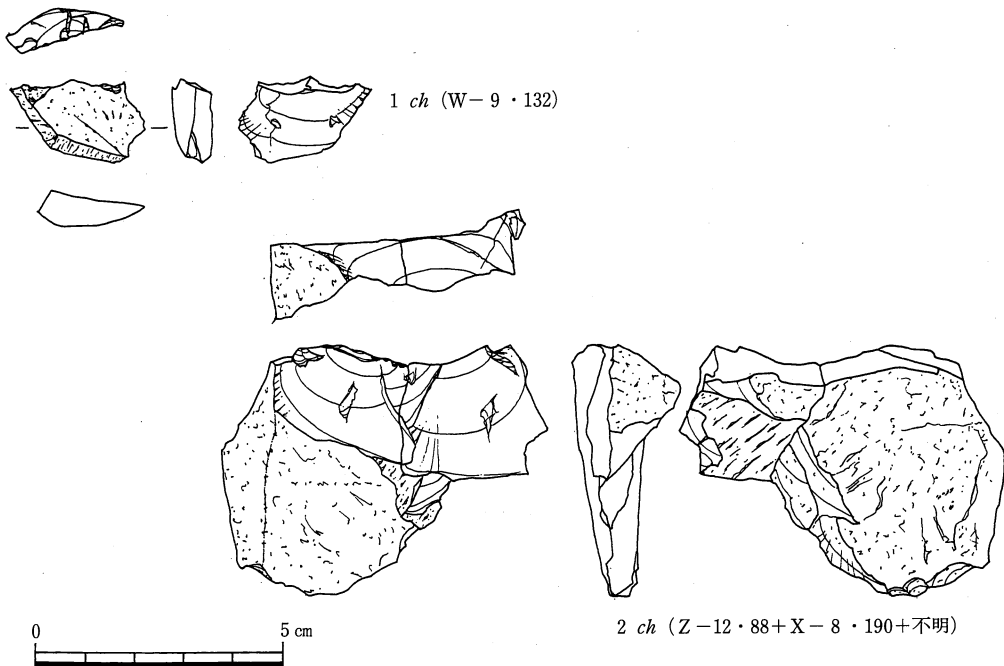
素材 接合資料はほぼ原形をとどめており、薄い板状の河原石を素材としたと思われる。

資料 石核1点と剥片1点の総数2点である。第7次調査出土の資料は剥片1点のみである。1は不定形の小形の剥片である。石核2は節理に沿って3点に破碎している。上面を打面とし正面を作業面とした剥片剥離がわずかに行われているに過ぎない。

接合資料と剥片剥離技術 剥片1と石核2の2点からなる接合資料である。石核2は破碎した3点が接合して復元された資料である。剥片1は石核2の上面に接合する打面形成剥片である。板状の素材の短辺に打面を形成し、長辺に作業面を設けての剥片剥離である。

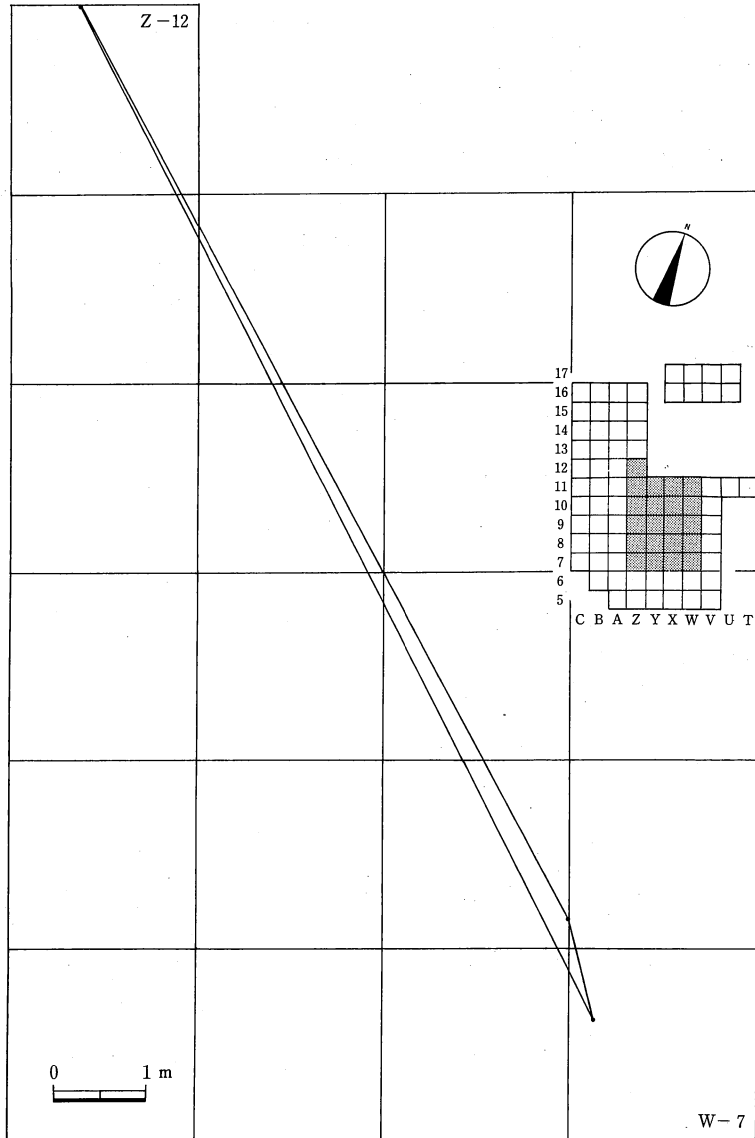
分布 石核2に復元された碎片は、X-8区とZ-12区とに大きく離れて出土した資料である。一方、打面形成剥片1は、そのうちX-8区と近接したW-9区から出土した資料であり、石核2に復元された碎片の一部とはまとまった分布を示す。

(岩越宏典)



第63図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料21(2/3)

第三章 第V層文化層



第64図 第7次発掘調査資料 第V層文化層 母岩別資料21：分布(1/80)